188.6
Mo17

始

A1142
32P422
188.6
M012

淨土教之研究

大正
3. 11. 11
内交

淨土教の研究序論

淨土教は大乘佛教中の一派にして、往生淨土を其の宗旨とせる教門なり。然るに大乘佛經中、淨土を說けるもの頗る多し。阿閦佛の妙喜世界、藥師佛の淨瑠璃世界、阿彌陀佛の極樂世界の如き是なり。蓋し此等諸淨土の法は、皆名けて淨土教と稱すべきものなるも、彌陀の信仰普及するに及で、獨り極樂往生の法を說けるものを淨土教と呼ぶに至れり。予が今研究しつゝある所は、主として極樂淨土教なり。是れ極樂淨土教は、廣く大乘佛經中に說述せられ、又印度以來、頻に敷講せられたるのみならず、支那、日本に於ては、中世以後、其の興行頗る盛にして、深く社會人心の根底に浸漸し、佛教の實際的教義として偉大なる感化を貽し、影響を與へたるものなるを以てなり。嘗て以爲らく、東洋の文明は佛教に負ふ所多し。故に苟くも東洋の文明を研究せんと欲する者は、宜しく其の力の一半を佛教の研究に貸さゞるべからず。然るに佛教中、民間に於ける實際的信仰として最も普及し、且最も有力なりしものは、極樂淨土教に過ぎたるはなし。故に隨て佛教を研究せんと欲する者は、亦宜しく其の力の

大半を淨土教の研究に費さゞるべからずと。是れ必ずしも依怙の言に非ざるべし。之に由りて淨土教史を研究するは、卽ち佛教の教理及び教會史の大半を研究するものと謂ふべく、佛教史を研究するは、卽ち東洋文明史の一半を研究するものと謂ふを得べし。

唯夫れ近代的研究の傾向は、何れの學術を問はず、歷史的に其の起原及び發達變遷の跡を訪ねて、以て其の脈絡繼承を詳にし、又同時に細密の注意を用て、其の事實又は論說を批評し、因て以て眞理の闡明に資せんことを期するに在り。蓋し佛教の變遷に關する編年的史傳は固より少からずと雖も、近代の所謂史的研究の意に愜ふものの殆ど之れなきが如し。宗教に批評的研究を用ふるの可否に至ては異論あり。信仰の側に立てる一種の教權論者は一概に之を拒否し、自由討究を視ること或は蛇蝎に過ぐるありと雖も、滔々たる現時の大勢は、史的研究の流行につれて、遠慮なく宗教に對しても亦深刻の批評を加へつゝあり。但し舊來の保守的佛教學者には、笑ふべき迷信尠からず。悉く其の所傳を保持せんことは、到底不可能の事に屬すべし。されど之あるが爲に佛教の本體をも擬議せんとするは、甚だ不可と謂はざるを得

ず。

佛教研究の初に當り、先づ第一著に討尋すべきは、乃ち經典成立の問題なり。現存せる漢譯大藏を始め、巴利及び梵語の聖典、竝に西藏等に存する多種の經典は、果して悉く佛陀釋迦牟尼の直說に係るものか。若し直說とするも、現存せる諸經の一文一句悉く皆其直說の實錄と見るを得べきか。若し又實錄とするも、支那等に傳譯せる幾多の三藏が、果して悉く善く之を漢語等に翻じて、毫も訛謬なきことを得しか。此等の諸問題は、當に先づ愼重に討究せらるべからざる所たり。且く夫れ譯經三藏の如き、後漢以來其數甚だ衆し。中に就き梵漢兼ね通じ文質併せ得たる者、固より少からずと雖も、復然らざる者もなきに非ず。梁僧祐の出三藏記集第一に云はく、前漢の末より經法始めて通ず、譯音胥訛りて、未だ明練すること能はず。故に浮屠、桑門、謬を漢史に遺す。音字猶ほ然り、況や義に於ておや。案ずるに中華の彝典、詩を誦し禮を執るに、師資相授くるすら猶ほ訛亂あり。華戎遠く譯す、何ぞ屠桑を怪まんや。乃至、是を以て義の得失は譯人に由り、辭の質文は執筆に繫る。或は胡義を善くするも而も漢旨を了せず、或は漢文に明なるも而も胡意を曉めず。偏解ありと雖も終に圓通

を隔つ。若し胡漢兩ながら明かに、意義四暢し、然る後、經奥を宣述せば、是に於てか正しからん。前古の譯人、能く曲練することなし。所以に舊經の文意、阻礙あることを致す。豈に經に礙あらんや、譯の失なるのみと。又晉道安に夙に五失本三不易の說あり、隋彥琮に八備十條の論あり、唐玄奘の五種不翻、宋贊寧の六例等、竝に皆翻經の規式を示して、以て其の業の容易にあらざるを說けるものなり。鳩摩羅什は譯家の泰斗にして、古來爭ふて其の本を用ふと雖も、每に原文を節略するの風あり。僧叡の大智度論序に依るに、此の論は元と十萬偈あり、偈に三十二字あり、併せて三百二十萬言なりしも、梵夏既に乖き、又煩簡の異あるを以て、三分して二を除き、唯一百卷三十萬言を得たりと云へり。梵網經、百論等、亦皆貝葉を要略して原文を傳へず。眞諦は亦譯經の尤なりと雖も、俱舍釋論の中に、現法に非得あり、又無爲は因果に非ずと翻じて、後代の非議する所と爲れり。玄奘は、胡漢に精熟し翻譯の正を得たりと稱せられ、贊寧之を讃して天子の璽印の信ずべきに比したりしも、然かも唯識を宗とせしを以て、華嚴の法藏は、證義潤文を異にするの故を以て其の譯場を退出し、法寶は、大毘婆沙論中に十六字を加入せしを難じ、凡語を以て聖言に增加するの非を指摘せり。此の數師は三藏中の白眉にして、譯經の指南なり。而も原文を删補し理義を訛傳せる是の如きものあり。餘は准じて知るべきに非ずや。

又夫れ現存の大藏を撿するに、重譯異出の經甚だ少からず。中に於て唯少許の字句の異同に過ぎざるものもありと雖も、復部帙廣略碩に異に、章品先後し、文叚支吾し、名數具缺し、義旨乖角して、到底同一實錄の翻譯と見るべからざるものあり。出三藏記集第二異出經錄序に、異出經とは、胡本同にして而も漢文異なるものを謂ふなり。梵書復た隱れ、宣譯多く變ず。經を出すの士、才趣各殊に、辭に質文あり、意或は詳略す。故に本一にして末二に、新舊をして參差ならしむ。若し國音訛轉せば、則ち音字楚夏し、譯辭格礙せば、則ち事義胡越ならん。豈に兩傳の騁駮ならんや、乃ち東寫の乖謬なるのみと言ひ、頗る原本の同一にして信ずべきを主張し、諸種の乖謬を悉く譯家の過に歸せんとするが如きも、是れ未だ深く究めざるの言のみ。無量壽、華嚴、金光明、楞伽等の諸譯の如き、豈に唯國音譯辭の參差にして止まんや。且く無量壽經の如き、古來十二代の譯ありと稱せられ、梵文を併せて現に六本存す。然るに此等諸本に就き比較對照するに、其の異同極めて多く、彌陀の本願の加き、或は二十四願となせるあ

り、或は四十八願、或は四十六願、或は三十六願となし、而も一々の願文も亦相等しからざるもの多し。決して是れ同一原本の翻傳に非ざるや明かなり。之に由りて果して若し同一原本に非ずとせば、其の中、何の本を以て佛の直說と定むべきや。若し悉く佛直說の實錄とせば、佛は其の說を二三にせられたるものと謂はざるべからざるも、吾人は爾かく之を信ずること能はず。維摩等の經に、佛以一音演說法、衆生隨類各得解の說あり。若し之に依りて經文の異同は、卽ち聽者解了の異同に基くと言はば、一往通ずべきに似たるも、而も所謂各得解の眞意は、機の優劣に應じて義解に淺深あることを示したるに過ぎざるべく、之を以て重譯經中に現はれたる種々の差異具缺を悉く同聽異聞に歸せんとするは、恐くは太過の失あらん。

案ずるに佛敎の聖典は、元と師資口授して以て諳誦傳持せしものに係り、其筆錄せられたるは寧ろ後代に在るが如し。高僧法顯傳に、法顯本と戒律を求む。而も北天竺諸國、皆師師口傳して本の寫すべきなし。是を以て遠く涉りて乃ち中天竺に至り、摩訶衍僧伽藍に於て一部の律を得たりと云へり。是に依りて當時尙寫錄の廣く行はれざりしを知るべし。然るに此の如き誦持口傳の法は、歲月を經るの間に、自ら種々の訛脫を生ぜしのみならず、部執分裂の後に及では、諸部各〻自家の所立に便なるものゝみを誦し、他は故らに越略して之を誦せざると共に、復自義に便なるの文は、縱ひ聖敎に非ざるも尙之を誦持して以て他家の所破に對せんと努めたるの結果、遂に聖敎をして支離今日の如くならしめたるものゝ如し。俱舍論第八に、若し復是の如き等の經を誦せず。無上法王久しく已に滅度し、諸大法將亦般涅槃す。聖敎支離して已に多部と成り、其れ文義に於て異執交〻馳せ、取捨、情に任かす、今において轉た盛なり。傷むべきこと甚しと云へるは、卽ち此の間の事情を露白するものに非ずや。從來の學者は、現存の大藏を以て悉く金口に出でたりと信じたりと雖も、已に其の當時筆錄せられたるものに非ず、又滅後幾多の部執によりて改竄加減を經たるものなる以上、其の中には、自ら人我の水の混ぜられたるもあるべく、外道の石の加へられたるもあるべきは、亦已むを得ざる結果なり。且夫れ大乘經典は、小乘敎徒の取て以て非佛說となしたる所なり。之に對して無著の大乘莊嚴經論、竝に顯揚聖敎論、堅意の入大乘論等に大乘佛說を立證し、辯明甚だ勉むと雖も、其の所謂小乘經典も、亦悉く佛說の眞を傳へたるものなりや否や、疑なき能はず。小乘敎徒に取りて、大乘

は共通の敵なりしが故に、大乘非佛說は、當時一般の敎團の聲なりしが如く感ぜらるゝも、實は自己の原始的敎權を保護する手段に過ぎずして、一種の宗論と見るを可とす。若し史實に就て之を論ぜば、共に金口に淵源して其の所說を敷衍し、幾多の年月の間に幾多の編纂結集を經て、以て今日の大藏を成立せしものと謂ふべし。

淨土敎の研究も、上述の意味に於て、先づ其の經典の本文に就き、種々に精細なる考證觀察を下すを要す。就中、極樂淨土に關する說相を見るに、鼓音聲王陀羅尼經には、彌陀聖王所住の城は、縱廣十千由旬にして、刹利種充滿し、阿彌陀佛に父母及び子等あり、又魔王竝に提婆達多あり、大比丘六萬人と俱なりと云へり。之に依るに、其の地域、住民、竝に比丘の數等、殆ど釋迦所住の娑婆の都城と揀ぶ所なきが如し。又已に彌陀に父母及び子ありと言ふは、是れ彼の國に女人ありとするものに非ずや。而も平等覺經第一及び其の重譯の諸經、竝に大智論第三十四等には、彌陀の淨土に婦女あることなく、女人往生する者は化生して皆男子となると說けり。是れ前の鼓音聲王の說に一歩を進めたるものと見るを得べし。然るに此等平等覺經等の諸經には、同じく皆彼の淨土に無數の聲聞ありと云へるも、悲華經第三、如來智印經、竝に天親の

往生論等には、彼の國は純菩薩の所居にして、二乘あることなしと說けり。是れ復前の所說を凌駕せるものと謂はざるを得ず。又阿閦佛國經卷上に依るに、阿閦の淨土たる妙喜世界には、女人あれども婬欲の事に從はず、又其の刹中に王なきこと鬱單越の如しと云ひ、而も娑婆に對して、特に娑婆中の樂土たる鬱單越に對して、其の世界の優越なることを說かんとするが如きも、平等覺經第二には、無量淸淨佛國は無央數佛國中の雄國なり、無央數佛國中の衆傑なり、最快明好甚樂無極の處たりと說けり。是れ彌陀の淨土を以て、前の阿閦の妙喜世界等に勝るとなすの意ならん。然るに文殊師利佛土嚴淨經には、文殊佛刹の莊嚴は大海の水の如く、阿彌陀佛刹の莊嚴は一滴の水の如しと言ひ、觀世音菩薩受記經には、阿彌陀佛國所有の嚴淨の事は毛端の水の如く、金光師子遊戲佛國は大海の水の如く、觀世音の淨土莊嚴の事は更に金光師子遊戲佛國に勝ること百億萬倍なりと言ひ、舊華嚴經第二十九には、此の娑婆世界釋迦牟尼佛刹の一劫の如き、安樂世界阿彌陀佛刹に於て一日一夜と爲す。安樂世界の一劫は、聖服幢世界金剛佛刹に於て一日一夜と爲す。乃至、是の如く次第して乃ち百萬阿僧祇世界に至り、最後の世界の一劫は、勝蓮華世界賢首佛刹に於て一

日一夜と爲す。普賢菩薩等の諸大菩薩、其の中に充滿すと言へり。是れ皆次第に說を起して、前々を劣とし後々を勝とするものに非ずや。

又阿彌陀佛に關する說述を見るに、鼓音聲王陀羅尼經等には、其の本生を說かざるも、平等覺經等には、具に因位の發願修行を說き、就中、悲華經の所說の如き、頗る大仕掛にして、觀音、勢至、文殊、普賢及び阿閦等を悉く彌陀の前身なる無諍念王の子となせり。然るに此等悲華經、平等覺經、大阿彌陀經、竝に觀世音菩薩受記經等には、彌陀成佛の後、其の壽極めて長久なるも、終に命盡きて般涅槃することあり。觀音、勢至、次第に其の處を補ふて成佛すと言へり。是れ釋迦入滅し、彌勒補處すと云へる信念に相等し。然るに無量壽經、大寶積經無量壽如來會等には、彌陀入滅の說なく、阿彌陀經、稱讚淨土佛攝受經には、彼の佛及び其の人民の壽命無量無邊阿僧祇劫なるが故に、其の佛を號して無量壽と名くと言へり。又此等の諸經には、齊しく彌陀を十劫以前の成佛となすと雖も、大乘入楞伽經第六には、十方諸刹土、所有の法報佛、化身及び變化は、皆無量壽極樂界中より出づと說きて、無量壽極樂界を諸佛諸土の根本となすものゝ如し。是れ法華壽量品の說に同じく、彌陀を久遠本佛となすの意と見るを得べし。

若し夫れ往生の行因に至りては、諸經の所說頗る多岐に亙るものあり。就中、平等覺經第一、大阿彌陀經卷上等には、諸天人民蠕動之類、聞我名字、皆悉踊躍來生我國と說き、唯だ聞名を以て來生の因となすが如きも、無量壽經、大寶積經無量壽如來會等には、十方衆生、至心信樂欲生我國、乃至十念、若不生者不取正覺と言ひ、又諸有衆生、聞其名號信心歡喜乃至一念、至心廻向願生彼國、即得往生住不退轉と說きて、聞名の上に、更に乃至十念の因を要すとなせり。然るに十念に關しては、古來の解釋一準ならず。或は彌勒發問經所出の慈心悲心等の十種の心を名けて十念となすと云ひ、或は佛名を稱する十遍するを十念と名くと言へり。蓋し無量壽經等には、十念に關し、自ら何等の解をも下さゞるが故に、經意を明むること頗る難しと雖も、觀無量壽經上品上生の文に修行六念と言ひ、下品下生の文に具足十念と言ひ、一經中に六念十念竝べ擧ぐるを以て之を考ふるに、十念は、增一阿含經第一第二等に說ける念佛念法念僧念戒念施念天念休息念安般念身念死の十種の念を指せるものに非ざるなきかを疑はんと欲するなり。六念の說は、雜阿含經第二十、竝に觀佛三昧海經第六、觀普賢

經等に出す所にして、今の十念の中の前の六念を稱す。若し果して念佛等の十種の念を指して本願の十念となさば、無量壽經等は、卽ち觀念を以て往生の行因となせるものと謂はざるを得ず。況や十種の念の中、最初の念は所謂念佛にして、念を如來に繫けて他想を起さず、一心に如來の形を觀じ、如來の十力四無畏等の功德を念ずるを稱す。是れ豈に般舟三昧經等に說ける所謂念佛三昧の法に非ずや。之に依りて淨土念佛の敎は彼の阿含所說の六念十念の法と密接の關係を有するものなるを見るべし。又觀無量壽經に依るに、極樂の依正二報を觀察し、其の觀成就する者は、多劫の罪を除き、命終して其の國に生ずべしと說けり。是れ所謂觀佛三昧の法なり。又阿彌陀經に依るに、聞說阿彌陀佛、執持名號一心不亂と言ひ、觀無量壽經に合掌叉手稱南無阿彌陀佛と言ふは、卽ち稱名を以て往生極樂の因となせるものなり。案ずるに、淨土の諸家に往生の行を論ずる甚だ多しと雖も、其の主要なるものに就かば、念佛と觀佛と稱名との三種を出でざるが如し。龍樹の十住毘婆沙論易行品に、念我稱名自歸卽入必定と言ふは、稱名往生說にして、天親の無量壽經優婆提舍に、五念門を擧ぐるは、卽ち觀佛行因の說なり。五念門の中、作願は卽ち奢摩他にして止なり、觀察は毘鉢舍那にして卽ち觀なり。天親は是の如く止觀の二門を以て往生極樂の正因となせるも、馬鳴の大乘起信論には、止觀の法を學し、正信を求めんと欲するに、其の心怯弱にして成就すべきこと難きを懼る者は、阿彌陀佛を專念して、西方極樂世界に生せんことを願求すべしと云へり。是れ念佛行因の說にして、前の觀佛及び稱名と相同じからざるを見るべし。

古へに敎相判釋の說あり、如來の聖敎中に大小半滿權實漸頓の不同あるを以て、佛一代の說法を數時期に分畫し、其の淺深に隨て之を次第に施設せるものとなせる是なり。是れ橫に諸說を一代五十年間に起るとなせるものなるも、若し其の意を轉用して、佛滅數百年間に次第に此等の諸敎漸興せしものと見ば、卽ち善く史實に合するものあるが如し。解深密經所說の三時の如き、第一時有敎は、所謂小乘敎にして、滅後四五百年中、盛に印度に流行したるものなり。第二時空敎は、所謂般若大乘敎にして、滅後五六百年の頃、龍樹等に依りて方に繁興せしものなり。第三時中道敎は、所謂瑜伽大乘敎にして、滅後八九百年の頃、無著等に依りて唱道せられたる所なり。是の如く彼の三時は、滅後に於ける聖敎傳通の次第を語れるものと見ることに於

て、始めて深き趣味を感ずべし。淨土の諸經も、恐くは滅後に於て數次の編纂結集を經て、以て今日の諸說を成立せしものならん。是れ淨土敎の研究に取りて先づ討尋すべき主要の問題たり。

印度に於ける淨土敎の傳通は、極めて史科に乏しきを憾とすと雖も、支那、日本に傳來するに及で、其の記錄の存するもの良に尠からず。予先年以來、夙に此の研究に從事し、仔細に敎理發達の徑路を考ふると共に、廣く敎會變遷の事跡を尋ね、已に稿を脫するもの亦鮮からざるも、未だ大成するに至らず。本編の如きは、明治三十一年以後、隨時に「宗粹」「宗敎界」等の雜誌に執筆せしものゝ中、特に淨土敎に關する論說のみを輯錄したるものに係り、其の中、今日より之を見れば、甚だ不充分にして慚愧に堪えざるものもあり。と雖も、今悉く改竄するの餘暇を有せざるを以て、すべて原稿のまゝ之を印刷に附せり。庶幾くば他日大成の日を待て之を刪補する所あらん。

大正三年十月　　望月信亨識

目次

一　淨土の三部聖典論 明治三六・八……一
二　三部經翻譯の年代 明治三四・一……七
三　劉宋求那跋陀羅譯の阿彌陀經に就て 明治四二・九……二七
四　傍明淨土の經竝に論集目次 明治三六・一〇……三四
五　無量壽經の成立年代私考 明治三八・九……五六
六　讀餘雜筆 明治四一・一……一〇六
七　諸經に顯はれたる彌陀本生譚 明治三八・二……一一
八　彌陀因位發願の異說 明治三八・四……一四三
九　無量壽經四十八願名稱比較 明治三八・五……二〇八
一〇　十二光佛の異說 明治四〇・三……二一一
一一　過十萬億佛土の數量に就て 明治三一・四……二一四
一二　十念論 明治四二・五……二一九

一三　壽觀彌陀の三經と法華經との優劣 明治三一・一一……二三三
一四　龍樹の十住毘婆沙論易行品 大正二・八……二九五
一五　無著の攝大乘論別時意の說と之に對する淨土諸家の會釋 明治三六・一……三二二
一六　世親の出世年代に就て 明治三五・五……三四二
一七　再び世親の出世年代に就て 明治三五・七……三五八
一八　往生論と攝大乘論の十八圓淨 明治三八・七……三七二
一九　○兜率上生の起源と婆須蜜菩薩 明治三九・一……三八四
二〇　○兜率上生に對する淨土諸家の辯難 明治三六・二……三九二
二一　安世高の事蹟に就て 明治三七・八……四一七
二二　支道林の阿彌陀佛像讚と極樂有女人說 明治四二・二……四二〇
二三　曇鸞法師の傳及び著作 明治四二・一〇……四二三
二四　無問自筆 明治三五・九……四三〇
二五　天台觀經疏の眞僞を論ず 明治三七・五……四三四

二六　天台十疑論は僞作たる可し 明治三四・九……四五四
二七　慈恩大師の淨土に關する著書及び其の所說 明治三五・八……四六三
二八　善導大師の事蹟 明治四一・二……五一二
二九　善導大師の著書 明治四二・三……五二九
三〇　慈愍三藏の事蹟及び其の文集 明治三六・六……五三六
三一　支那の禪僧と念佛 明治三六・一……五四七
三二　雲栖袾宏禪師の淨土教義 明治三六・九……五五〇
三三　蕅益大師智旭の淨土教義 明治三七・九……五六七
三四　○叡山常行堂の念佛と其の影響 大正三・八……五九四
三五　法然上人登山の年時に就て 明治四四・八……六〇三
三六　法然上人の南都遊學 明治四五・六……六〇六
三七　法然上人立教開宗の文證に就て 明治四四・一一……六一八
三八　玉葉に現はれたる法然上人 明治三九・一一……六二七
三九　法然上人の外寬內嚴主義 明治四一・一二……六三四

四〇　元祖上人と圓頓戒の系統 大正三・四……六四二
四一　再び圓頓戒の系統に就て 大正三・七……七六三
四二　法然上人の著作法語竝に其の眞僞 明治三九・六……六八一
四三　選擇本願念佛集 明治四二・一……七一八
四四　一枚起請文に就て 明治四三・八……七四四
四五　法然上人の行狀記傳竝に其の價値 明治四四・五……七四九
四六　本朝祖師傳記繪詞に就て 明治四四・一二……七六九
四七　拾遺古德傳に就て 明治四四・四……七七六
四八　嵯峨小倉山の法然上人塔 明治四三・五……七八一
四九　嵯峨の正信房湛空 明治四三・三……七八七
五〇　元祖上人門下の異義 明治四三・六……八〇一
五一　覺明房長西 明治四三・四……八四三
五二　九品寺覺明 大正二・一……八五一
五三　再び九品寺覺明の所立に就て 大正三・七……八五八

五四　聖岡上人の事蹟及び其の教義 明治四一・九……八六四
以上

淨土教の研究

一　淨土の三部聖典論

荆溪（止觀輔行第二之一）曰く、諸經に讚する所多く彌陀に在りと。今現存せる漢譯大藏經に就て之を撿するに、彌陀若くは極樂を散說せる所の經、凡そ二百數十部あり。之を現藏大小乘經通計九百四十餘部に比例する時は、實に其の四分の一に當り、若し小乘經中には、他方淨土を說かざるが故に（僅に一二經あり）姑く之を控除し、單に大乘經約六百數十部に比例する時は、其の三分の一强に當る。諸經に讚する所多く彌陀に在るや之を以て知るべきなり。

然るに斯く多數の經の中に於て、一部の始終を通じて主として淨土を說けるものと、傍ら之を明せるものとの別あり。法然上人の選擇集には、之を正依傍依の二種に分ち、中に就て無量壽經（曹魏康僧鎧譯）觀無量壽經（劉宋畺良耶舍譯）阿彌陀經（姚秦鳩摩羅什譯）の三部を淨土正依の經典となし、華嚴、法華、隨求、尊勝等の諸部を淨土傍依の經典となせり。而して阿

彌陀經釋（法然上人著）には、六證を引いて此の淨土の三經が、往生極樂の旨を述べたる最要の聖典なることを記し、無量壽經釋（同著）には、此の三經は淨敎の根本なり、餘の諸經は枝末なり、又此の三經は正往生敎なり、餘の諸經は傍往生敎なり、又此の三經は具足往生敎なり、餘の諸經は不具足往生敎なることを記せり。日本の淨土各派は、爾後此の分類に依りて、無量壽等の三經を淨土三部經と稱し、神聖なる聖典として尊重奉戴しつゝあり。凝然の淨土源流章に依るに、曇鸞、道綽、善導、懷感等の諸師は多く無量壽經、觀經、彌陀經の三部を以て淨土所依の本經となすといへり。されど曇鸞、道綽等の諸師は、未だ其の著書の中に明かに此の三部を取て正依の經となすと言はず、唯處々に之を引用して其の所說を立證せるに過ぎざるなり。善導の觀經疏第四には、此の三經等を讀誦するを往生の正行と說けり。既に等といへば、必ずしも三部に限らざるが如きも、亦之を向內等と見られ得ざるにもあらず。されば三部經の選定は、乃ち善導に在りといふべき乎。

今日日本に在りては、三部經といへば、卽淨土主要の聖典として何人も之を熟知せ

り。是れ法然上人の功なり。然るに上人の以前、若くは支那に在りては必ずしも一定せず。源信の往生要集には、念佛往生の證據として六經十文を出せり。六經とは古察經、無量壽經、觀經、阿彌陀經、般舟三昧經、鼓音聲王陀羅尼經これなり。されば源信は、此の六經を淨土主要の聖典となせるもの乎。支那に在りては、淨影、嘉祥等の諸師各〻無量壽經及び觀無量壽經の疏を述作せり。若し然れば此等の師は、此の二經を主要と見たるなるべし。慈恩の阿彌陀經疏には、上の三經の外、更に鼓音聲王陀羅尼經を加へて、四部の經を以て淨土の本經となせり。迦才の淨土論には、十二部の經を引いて、之を往生淨土の敎證に備ふ。其の十二部とは一に無量壽經、二に觀經、三に小阿彌陀經、四に鼓音聲王經、五に稱揚諸佛功德經、六に發覺淨心經、七に大集經、八に十方往生經、九に藥師經、十に般舟經、十一に大阿彌陀經、十二に無量淸淨平等覺經なり。宗曉の樂邦文類には、專談淨土經として平等覺經、大阿彌陀經、無量壽經、寶積經無量壽如來會、無量壽莊嚴經（此の五經同本異譯）阿彌陀經、稱讚淨土經（此の二經亦同本異譯）觀無量壽經、後出阿彌陀偈經、鼓音聲王經、般舟三昧經、如來烏瑟膩沙最勝總持經の十二部を列ぬ。袾宏の阿彌陀經疏鈔には、大本無量壽經と小本阿彌陀經とを同部の經となし、觀無量壽經と鼓音

聲王經と後出阿彌陀偈經の三種を同類の經となせり。蓋し大小二本は文に繁簡ありと雖も、義に勝劣なく、譬へば父を同うする兄弟の如くなるが故に、之を同部の經と名け、觀經等の三種は、從昆弟の父を同うせざれども而かも其の祖を同うするが如くなるが故に、之を同類の經と名くといへり。袁中郎の西方合論には、經緯の四句を作つて廣く淨土の諸經を分類せり。經とは專ら淨土を談ずるものをいひ、緯とは汎爾に念佛を明かすをいふ。中に於て經中の經は前の所謂三部の經是なり。但し異譯の諸本をも併せ取るは、聊か法然上人に異なる所なり。經中の緯は鼓音聲王經、後出阿彌陀偈經なり。緯中の經は華嚴、法華、楞嚴、寶積、般舟三昧、其の他八經あり。緯中の緯は淨名、涅槃、文殊般若等なり。定仙の海藏念佛典決（日本選述）には、普賢行願品と阿彌陀經と文殊般若經とを念佛往生の要典となせり。斯の如く異說雜然たりと雖も、無量壽等の三部を淨土主要の聖典となせることは、諸家の殆ど齊く一致する所なり。智旭の阿彌陀經要解に、當時三經竝び行はれしことを記せり。是に由て考ふるに、支那に在りても、後代に及んでは、獨り此等の三部を尊崇して、以て淨土の聖典となしたるを知るべきなり。

今試に上の諸說に就て之を見るに、諸家の出だす所多く出沒ありと雖も、而かも三經の外、更に鼓音聲王、及後出阿彌陀偈の二經を淨土の聖典に加へんとするは、殆ど異論なきが如し。是れ一考すべき問題なり。但し予を以て之を見るに阿彌陀偈經は、唯僅に五言四句十六行の偈を有するのみにして、如是我聞等の經の體裁を具へず、恐くは他の經より斷取せられたる伽陀にあらざれば、後人唄佛の讃文ならんと想像せらるゝを以て、此の偈經を淨土主要の聖典に加ふるは、聊か危ぶむ所なき能はず。されど鼓音聲王經に至ては然らず、一經の始終を通じて專ら淨土の法を明かすが故に、取て之を淨土の聖典となすは、寧ろ當然なるを覺ゆ。慈恩の四部經の說、蓋し之に依て生ずる所なり。然るに法然上人が、無量壽等の三經の外、都べて之を主要の聖典となさず。加之、異譯の諸本をも盡く廢して之を用ひざるは、其の主張する所の宗義の純粹を保持せんが爲なり。之を詳言すれば、異譯の諸經等に依れば、願數を列ぬること一定せざるのみならず、往生の行法亦區々にして紫朱辨じ難きものあり。況や鼓音聲王經の如きは、彌陀の國土を明かすこと大に他の諸經に殊なり、又陀羅尼を受持するを以て往生の要因となせるに於ては、若し此等の諸本を淨土の聖典

に加ふる時は、その宗義の一貫を妨ぐるの恐あるを以てなり。是の故に獨り三部の經を選定せられたるものなりと雖も、而かも專ら淨土を談ずるの經は、必ずしも之に限らず。惟ふに經典の分類としては、西方合論の說尤も精なるが如し。彼に云ふ所の經中の經は最も主要の聖典なり、經中の緯は次いで用ふべき要典なり。專談淨土の經に就て此の二種の別を設けたるは、頗る允當といはざるを得ず。是に依て法然上人の說を詳にするに、正明傍明と正依傍依との二語の間に、聊か其の意味の異なるものあるを覺ゆ。何となれば、正明傍明は直に經の內容に就て之を論じ、正依傍依は宗義建立の依憑に就て之を論じたる者なればなり。故に正明經といへども、必ずしも宗義建立の依憑とならず。是れ異譯の經及び鼓音聲等を以て、正依の經典となさざる所以なり。蓋し法然上人は宗義建立の上より經典を分類し、他の諸家は直に內容に就て之を爲したるが故に、其の說の不同を生じたるものと謂ふべし。

今法然上人に依りて、無量壽等の三部を淨土主要の聖典と定め、餘の種々の經を傍依の聖典となすべし。主要聖典の中、三部の次第は壽經を第一とし、觀經を第二とし、阿彌陀經を第三となす。若し翻譯の年次に依れば、康僧鎧最も先きに、羅什之に次ぎ、

畺良耶舍最も後るゝを以て、觀經は阿彌陀經と前後せざるべからずと雖も、今は經の說時竝に內容の文旨に順ずるが故に、此の次第を作すといへり

二　三部經飜譯の年代

一

西曆紀元六七卽ち後漢明帝永平十年に印度の三藏迦葉摩騰、竺法蘭の二人支那に來りて、始めて四十二章經等を翻譯せし以來、西紀一二八五卽ち元世宗至元二十二年に、慶吉祥等が至元法寶勘同總錄を撰するに至る迄、凡そ二十二朝一千二百十九年の間、漢譯の業は繼續せり。至元錄に載せる大小乘經律論は、一千四百四十部五千五百八十六卷の決して少からざる數を示すと雖も、然れども此の數は單に現存せる者に就く耳にして、若し既に逸失して傳はらざる者を合せ算する時は、實に之に倍する者あらんも知るべからず。唯當時保存の法完からざる者ありしが爲めに、再び得べからざる原文と譯文とを容易に亡失せしめたるは遺憾千萬といふべし。輓

近に至りて泰西の東洋學者は、多少の原本を印度の國境に搜見して、之が傳譯に努めつゝありと雖も、此等は眞に少小にして其の大部分の佛教聖典は、獨り漢譯の本文に存するに過ぎず。されば漢譯の諸經は世界に於ける珍寶にして、又人道を照らす光明の府といふべく、既に亡逸せる者の惜むべきを知らば、則ち現存せるもの〻寶藏すべきことを思はざる可らず。吾人近年以來少しく藏經閱讀の事に從ふあり、今其の中、淨土正依の經典たる無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經の三部に就き、翻譯の年代及存缺を記するに左の如し。

第一　無量壽經

藏錄を見るに、無量壽經に十二譯あり、頌義十六左五に大經に十二代の翻譯ありといへる卽ち是なり。然るに開元釋教錄十四之上左四に此の經前後十一譯を經、四本、藏に在り、七本缺くといへるは、法賢が最後に出せる無量壽莊嚴經の加はらざるが爲めにして、卽ち此の經の翻譯は、開元十八年(西紀七三〇卽ち開元錄製作の年代)に後る二百五十三年に在るを以て、智昇が當時には唯十一譯ありしに由る耳。又緣山三大藏目錄上左十に無量壽經に總じて十一譯あり、四存七缺といふは、寶積經第五無量

壽如來會二卷が四十九會の中の一會にして、單譯別部の本文に非ざるより之を除ける者にして、若し之を合する時は、頌義に云ふ如く十二譯を成すべし。今年代を追ふて之を列記す。

初譯　無量壽經二卷　(缺失)

後漢安世高譯す。開元錄第一右十四に無量壽經二卷、初めて安世高の出だす所といひ、歷代三寶紀四左五に、此の經初出見別錄、沙門曇戀論偈註解と記せり。世高は安息國の太子にして、王統を紹ぐべき者なりしが、發心して位を祖父に讓り、自ら三藏となりて西紀一四八卽ち後漢桓帝建和二年に支那に來り、一七〇卽ち靈帝建寧三年に至る迄翻經に從事せり。大唐內典錄一左七には高は此間に於て一百七十六部一百九十七卷を譯すと云も、開元錄一右十に依るに唯九十五部一百十五卷を出だし、其の中に於て五十四部五十九卷のみ存すと云へり。而して開元錄十四上左三大乘缺本錄の中に、安世高(第一出)を列ぬるを見れば、此の經は西紀七三〇卽ち唐玄宗開元十八年迄に既に逸失せしを知るべし。

二譯　無量淸淨平等覺經二卷

Amitāyuṣa-vyūha.

亦直に無量淸淨經と云ふ。麗本四卷に作る。

後漢支婁迦讖譯す。開元錄一七右に平等覺經二卷、支婁迦讖第二出といひ、又歷代三寶紀四十四右に見吳祐錄と云も、第二出といはず。支婁迦讖は月支國の沙門にして、西紀一四七卽ち後漢桓帝建和元年(或は西紀一六四卽ち桓帝延熹七年)に支那に來り、一八六靈帝中平三年に至る迄、翻譯を事とせり。內典錄一十五右によれば讖は廿一部六十三卷を出すと云も、開元錄には廿三部六十七卷を列ね、其の中、十一部廿六卷の外は悉く逸亡せりといへり。此の經は現に存して藏經乃帙に在り。

三譯　阿彌陀經二卷

Amitāyuṣa-vyūha.

亦無量壽經といふ、宋元二本共に阿彌陀經と云ふ、麗本上卷には題して諸佛阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經といひ、下卷には阿彌陀經といふ。

吳支謙譯す。開元錄二上右に阿彌陀經二卷、支謙第三出といふ。然るに歷代三寶紀五六左には阿彌陀經二卷、支謙第四出、與漢世高魏僧鎧譯者小異、見竺道祖吳錄といふも、其の第四出といふは恐くは非ならん。長房勅を奉じて錄を撰し又博覽にして記に强しと雖、往々年序を後先する者あり、依るべからず。謙は月支國の優婆塞にして、後漢の終(西紀二二〇)に支那に來り、西紀二二三卽ち吳黃武二年より二五三卽ち建興二年に至る間に、多くの翻譯をなせり。內典錄二六左には、一百廿九部一百五十二卷を出すといひ、開元錄二上右には、八十八部百十八卷を出だして、而して其の中、五十一部六十九卷のみ存すといへり。然るに現に明藏に藏する所の支謙が譯本は唯四十九經なるが、南條博士は此の四十九經の數が高僧傳一九左に記する所に遙に符合することの却て奇なるを論じたりき。此の經は現存せる四十九經の一にして乃帙に收む。

四譯　無量壽經二卷

Amitāyuṣa-vyūha.

曹魏康僧鎧譯す。開元錄一四十に無量壽經二卷、康僧鎧第四譯といふ。然るに三寶紀五十三左に康僧鎧第二譯、見竺道祖晉世雜錄及寶唱錄、與世高出者少異といふも、其の云ふ所の第二譯とは年代の次に非るを以て信ずべからず。僧鎧は印度の三藏にして、西

紀二五二卽ち魏嘉平四年瑯琊白馬寺に來りて數部の經を譯す。內典錄二右に二經四卷を出すと記し、開元錄一三廿に三部四卷を列らねたり。無量壽經は卽ち其の一にして亦乃峽に在り。此の經は淨土正依の三經の一にして吾が徒の日夕拜誦する所となす。

五譯　無量淸淨平等覺經二卷　（缺失）

曹魏白延譯す。開元錄一三廿に平等覺經二卷、第五白延譯といふ。然るに三寶紀五左四に白延第三出與世高康僧鎧等所出無量壽經本同、文名少異、見竺道祖晉世雜錄といふも、其の第三出といふは錯りなり。白延は西方の沙門にして、西紀二五七卽ち魏甘露二年（或は三年）に數部の經を出だす。內典錄二右四に六經八卷といひ、又開元錄一三廿に五經七卷を列ねて、而して此等の經は悉く逸亡せりと云も、然ども現に明藏に白延の譯一本を存す。開元錄十四上左二大乘缺本錄の中に、白延（第五譯）を列ねたれば、此の經も亦世高の本と同じく、西紀七三〇迄に已に亡失せることを知るべし。又開元錄一三廿に依るに白延は西域の人にして、高貴卿公甘露三年戊寅洛陽に遊化し、白馬寺に止り、無量淸淨等の經五部を出だす。長房等の錄に又平等覺經一卷あり、亦白延の

出だす所と云ふも、此の經は卽ち是れ無量淸淨平等覺經にして、但名に廣略あるに過ぎざれば今復存せざる也といへり。

六譯　無量壽經二卷　（缺失）

亦無量淸淨平等覺經といふ。

西晉竺法護譯す。梵に曇摩羅察 Dharmarakṣa といふ、法護とは其の翻なり。開元錄二上左二十に無量壽經二卷、西晉永嘉二年（西紀三〇八）正月廿一日竺法護の出だす所、第六譯なりといふ。然るに三寶紀六右五に永嘉二年正月十一日譯、是第四出、與吳世支謙、魏世康僧鎧、白延等出本同文異、見竺道祖晉世雜錄と云も、未だ正からず。法護は月支の苗裔にして、其の師竺高座と共に西域に學び、三十六國の語に通せりといふ。西紀二六六卽ち西晉武帝太始二年瑯琊に來り、西紀三一三卽ち愍帝建興元年或は三一七卽ち中宗元帝建武元年に至る間に、多くの翻經を出だす。三寶紀六右五には護は此間に二百十部三百九十四卷を出だすといひ、開元錄二上右二廿已下二には百七十五部三百五十四卷を列ね、而して其の中、唯九十一部二百八卷のみ存すといふ。開元錄大乘缺本錄十四上左三の下に、此の經（卽ち竺法護第六譯）を缺本となす、今傳はらず。

七譯　無量壽至眞等正覺經一卷　（缺失）

Amitayur-arhat-samyaksambuddha-sūtra.

亦樂佛土樂經と云ひ、又極樂土經と名く。

東晉竺法力 Dharmabala 譯す。開元錄三（二十四左）に至眞等正覺經一卷、竺法力の出す所、第七譯と云。三寶紀七（十一左）に是れ第六出、與支謙、康僧鎧、白延、竺法護、鳩摩羅什等所出本大同、文名少異、見釋正度錄と云も、其の第六出と云は例に由りて謬りなるのみならず、長房は鳩摩羅什の阿彌陀經を無量壽經の第五譯（三寶紀八（十三右）所載）となすも、并は經名相同きを以て大小二帙を混同せし者にして、卽ち什譯の彌陀經は小經の第一譯にして、大無量壽經の異譯に非るを知らざるに由る耳。法力は西方の沙門にして西紀四一九卽ち東晉恭帝元熙元年二月唯此の一經を譯したるも、開元錄大乘缺本錄十四上（三左）に竺法力（第七譯）を列ぬるを見れば、此の單なる一經も已に西紀七三〇迄に世に失はれたるを知る也。

八譯　新無量壽經二卷　（缺失）

東晉佛陀跋陀羅 Buddhabhadra 譯す。此に覺賢といふ。開元錄三（十一左）に新無量壽經二卷宋

永初二年（西紀四二一）に佛陀跋陀羅道場寺に於て出だす、僧祐、寶唱二錄に見ゆ、第八譯といふ。三寶紀七（十一右）に佛陀跋陀羅は十五部一百十五卷の經を譯し、無量壽は其の中に在りと記するも、第何譯なるをいはず。跋陀羅は釋迦族の後裔にして、西紀三九八卽ち晉安帝隆安三年より四二一卽ち宋永初二年に至るの間に支那楊都及廬山の二所に於て、十三若くは十五の經を譯す。開元錄三（十一左）に依るに此の中八部、百十六卷を存すといふも、明藏には唯七部を藏するのみ。開元錄大乘缺本錄十四上（三左）に佛陀跋陀羅第八譯を載す、故に今傳はらず。

九譯　新無量壽經二卷　（缺失）

宋釋寶雲譯す。開元錄五上（九左）に新無量壽經二卷、宋永初二年（四二一）寶雲、道場寺に於て出だす。第九譯と云。三寶紀十（五右）に是れ第七譯與支謙、康僧鎧、白延、竺法護、羅什、法力等出者不同、見道慧宋齊錄及高僧傳といへり。法雲は支那人にして西方に遊び、宋文帝元嘉年中（西紀四二四より四五三に至る）に四部の經を譯せしが、其の中、三部十卷は開元十八年までに既に失はる。此の經も亦其の一に居るといふ。

十譯　新無量壽經二卷　（缺失）

宋曇摩蜜多 Dharmamitra 此に法秀と譯す。開元錄五上(四)に新無量壽經二卷曇摩蜜多譯、第十出、眞寂錄に見ゆといふ。然るに三寶紀十(五)及內典錄四上(二)には法秀は十部十二卷を出だすといふも、其の中に無量壽經を陳ねず。法秀は罽賓國の三藏にして、西紀四二四卽ち宋元嘉元年支那に來り四四一卽ち元嘉十八年迄に數多の翻譯をなす。開元錄五上(三)に十二部十七卷を列らね、其の中、此の新無量壽經等の五部十卷は西紀七三〇迄に既に失はれたりといへり。

十一譯　大寶積經第五無量壽如來會二卷

Amitāyuḥsa-vyūha.

唐菩提流志、西紀七一三卽ち唐玄宗開元元年に譯す。菩提流志此に覺愛といふ。大寶積經は四十九會百二十卷にして現存せるが、其の中無量壽如來會は第五會にして、十七十八の兩卷に亙れり。年代の次に依るに此の經第十一譯となす。開元錄十四上(四)に缺失の七經を擧げ已りて、右七經は大寶積第五無量壽會と同本といひ、又支婁迦讖、支謙、康僧鎧の存せる三本を列ねたる下に、右三經は寶積第五無量壽會と同本

異譯といへり。流志は南天竺の婆羅門にして、西紀六九三卽ち唐中宗嗣聖十年より七一三卽ち玄宗開元元年に至る迄に五十三部の經を出だし、其の中、十二部十二卷の外は現に存して法寶藏に在り。

十二譯　大乘無量莊嚴經三卷

Mahāyānâmitāyur-vyūha-sūtra.

北宋法賢譯す。緣山三大藏目錄上(九)に又法賢の譯せる大乘無量壽莊嚴經三卷あり、寶積無量壽會と同本異譯といひ、又同錄下(十)に闕藏知津を引いて、此の經無量壽如來會と同本異譯といふ。法賢は中印度摩揭陀國の沙門にして、西紀九七三卽ち宋太祖開寶六年より一〇〇一卽ち眞宗咸平四年に寂を示すに至る迄に百十八部の翻譯をなせり。法賢初めて來る時、法天といひしが、太宗皇帝、明敎大師の號を賜はりしに由り、卽ち名を法賢と改めたりといふ。法天時代の譯は四十六部にして、法賢のは七十二部あり。無量壽莊嚴經は法賢時代の譯にして、乃ち西紀九八二卽ち太宗太平興國七年より一〇〇一に至るの間に出だす所なり。現に藏經命帙に收む。之を最後の漢譯となす。

蓋し無量壽經には是の如く十二代の譯あり、其の中、第二と第三と第四と第十一と及び第十二との五本は存し、餘は逸亡して傳はらず。

又此等の諸譯の外に龍舒王日休が西紀一一六〇卽ち南宋高宗紹興三十年より一一六二卽ち紹興三十二年に至る三年の間に校輯せる大阿彌陀經二卷あり、現に明藏貞帙に收む。此經は梵本より翻譯せられたる者に非ずして、卽ち支婁迦讖の平等覺經、支謙の阿彌陀經、康僧鎧の無量壽經、及び法賢の無量壽莊嚴經の四本を對校して、意に隨つて改易し別に一本を成せる者なり。王日休は觀音に祈り、加祐を請ふて此の業を成就せりと云も、之に由りて聖典としての價値を生ずるを肯んずべきにあらず。又緣山三大藏目錄附錄右二に知津に趙宋龍舒居士王日休、前の四の單譯を取りて參會し析して五十六分となす、唯寶積經內の一譯を除くと云を引き已りて、此の參會の本未詳、何が故に菩提流志の本を除くやと問難せり。惟ふに奇といふべし。

又東方聖書第四十九卷にかゝげたる英譯の大無量壽經 The larger Sukhāvatī-vyūha は、教授マクス、ミュラー F. Max Müller が、西紀千八百九十四年卽ち明治廿七年に翻譯出版せし所にして、卷首に數葉に亙る有益の序論を載す。此れ本經歐譯の嚆矢にして、吾人は其の尠からざる劬勞を多謝せんと欲する所なり。其の內容の如きは不日他の現存せる漢譯の諸經と共に之を比較詳究して、大方の笑正を乞ふべし。

二　第二　觀無量壽經

開元釋敎錄十四上十七左に依るに觀無量壽佛經に前後兩譯あり、一存一闕といひ、又緣山三大藏目錄上四十七右にも此の經兩譯一存一闕といへり。然るに傳通記には廣く經錄を考ふるに、觀經に總じて三譯ありと記し、頗義に亦之を引用せり。惟ふに三譯ありといふの說は、歷代三寶紀後漢失譯錄四十九左已下に觀無量壽佛經等の一百二十五部一百四十八卷を列ね、其の尾に

右一百二十五部合一百四十八卷、竝是僧祐律師出三藏記撰古舊二錄、及道安失源竝新集所得失譯、諸經卷部甚廣、讎校羣目蕪穢者衆、出入相交實難詮定、未覩經卷空閱名題、有入有源無入無譯、詳其初始非不有由、旣涉遠年故附此末、冀後博識脫覩本流、希還正收以爲有據、澄澄法海使靜濤波焉

といひ、又大唐內典錄後漢失譯錄一左二十にも、長房に同く觀經等の一百二十五部一百

四十八卷を列ねたるに由り、乃ち觀經は茲の如く後漢の間に於て已に一たび翻譯せられたるを以て、之に下に記すべき宋朝の兩譯を合して總べて三譯ありとなす者なるが、然るに開元錄に依るに、其後漢錄一三十二右已下の下に別に佛遺日摩尼寶經等の六十六部七十一卷を列ね、其の中亦觀無量壽佛經をあげ、下に註して

此經已曾兩譯、一存一闕、備顯錄中

といひて曾て三譯ありと云はざるのみならず、彼の錄には此等の諸經を擧げ已りて、其の結末に

右佛遺日下六十六部七十一卷、或翻譯有遷、或別生疑僞、今既尋知所據、故非漢代失譯、用舊重編恐成繁雜、今並刪也

と記し、更に其の連文に次上の三寶紀の全文を引き、之を評して

今尋長房此言未可、依據委求同異如前所述

と云へり。蓋し開元に云ふ意は、觀經は畺良耶舍と曇摩蜜多の兩譯に過ぎず。然るを長房等は此の經の他の一譯が曇摩蜜多に出ることを知らず、故を以て漫に之を後漢失譯錄の中に編し、此の經が曾て一たび後漢の間に在りて翻譯せられたるが如く記せるは、所謂所據を尋知せざるの罪にして、卽ち未可と言はざる可らずと曰ふに在り。今吾人を以て見るに、開元の言允正にして、觀經は前後二譯に過ぎざるが如し。何となれば三寶紀十左十五並に內典錄四上右十二に曇摩蜜多の翻經を列ねて唯十部十二卷を出して此の觀經を云はず。此れ卽ち此の經の他の一譯が曇摩蜜多に出るを知らざるに坐する者にして、若し之を知らば長房も亦此の經を後漢失譯錄の中に編するの理なきこと明かなればなり。若し然らば觀經は宋朝に二譯あるに過ぎず、三譯ありといふの說は恐くは不可ならん。

又三寶紀東晉失譯錄七二十三右已下の中に復た觀無量壽佛經一卷を列ね、內典錄東晉失譯錄三上十八左已下の中にも之を騰げたり。若し此等に依れば觀經は、東晉の世に復たび譯出せられたるが如く見ゆるも、開元錄東晉錄三二十五已下の下に之を評して、开は後漢失譯錄の中に已に有り、此の中復載するは重複なりといへり。果して然らば三寶紀及び內典錄の記事は杜撰にして信ずるに足らざるが如し。

初譯　佛說觀無量壽佛經一卷

宋畺良耶舍 Kālayaśas 此に時稱と譯す。開元錄五上三右に觀無量壽佛經一卷、亦無量壽

觀經と云ふ、畺良耶舍初出。道慧宋齊錄及び高僧傳に見ゆといへり。三寶紀十六内典錄四上十二亦同じ。但第何出を云はず、高僧傳三十に其の傳を載す。耶舍は西域の沙門にして、西紀四二四卽ち宋元嘉元年を以て支那建業に入り、勅によりて鐘山道林精舍に止り、沙門僧含請ふて此の經及び藥王の二部二卷を譯せしむ。後江陵に移り、西紀四四二卽ち元嘉十九年を以て卒す、年六十矣。此の經は現存して養帙に收む。淨土正依の三經の一にして、吾が徒の日常受持する聖典となす。

二譯　觀無量壽佛經一卷　（缺失）

宋曇摩蜜多此に法秀と譯す、開元錄五上三に依るに、法秀の下に虛空藏菩薩神呪經等の十二部十七卷を列ね、其の中に觀無量壽佛經一卷を出だし、下に註して此の經第二出、畺良耶舍の出す者と同本、寶唱錄に見ゆといへり。然るに三寶紀十五竟に内典錄四上十二には法秀は唯十部十二卷を出すと記して、其の中に觀經を列ねず。此れ上に云へる如く長房等は曇摩蜜多が此の經を譯せることを尋ねず、漫に之を後漢錄に付したるに由れる者なり。之を未可となす。法秀は無量壽經の第十譯を出せる者と同人にして、卽ち西紀四二四に支那に來り四四二に八十七歲を以て終ふ。畺良耶舍と同年に來り同年に死す。亦奇といふべし。此の經は開元錄十四十七に已に缺本錄に編す。今傳はらず。

又英譯せられたる者あり題してAmitāyur-dhyāna-sūtra(The sūtra of the meditation on Amitāyus)といふ、博士高楠順次郎氏が畺良耶舍の本文を傳譯せし者にして、西紀一八九四に出版せられたる東方聖書第四十九卷に載す。

第三　阿彌陀經

開元錄十四十八に阿彌陀經前後三譯二存一闕といひ、緣山三大藏目錄上四十七に亦前後三譯といふ。今之を記するに左の如し。

初譯　佛說阿彌陀經一卷

Buddhabhāṣitâmitāyus-sūtra.

姚秦鳩摩羅什 Kumārajīva 此に童壽と譯す。開元錄四上四鳩摩羅什の下に阿彌陀經一卷、亦無量壽經と名く、弘始四年西紀四〇二二月八日譯す、初出、唐譯の稱讚淨土經等と同本、二秦錄及僧祐錄に見ゆといへり。然るに三寶紀八十三に此の什譯の小經を大無量壽經と混同して之を大經の第五譯となし、支謙、康僧鎧、白延、法護等の出せる

兩卷の者と同本、文廣略異と記し、又內典錄三下十三にも全く此の文を寫せり。されど此れ謬にして鳩摩羅什の出せる經は康僧鎧等の出せる所と本文相同からざるは固より言を俟たざる所となす。什は西紀三八三卽ち前秦建元十九年に龜茲國を發して支那に入り、四〇二卽ち弘始四年より四一二卽ち弘始十四年に至る迄に、七十四部三百八十四卷の翻譯をなす。開元錄四上二十に列ぬるが如し。什は支那に於て三千の弟子を有し、その中生肇融叡の四人を上足となす。敎澤遐邇に及び、法雷一時に震ふ。譯經の尤なる者と謂ふべき也。其の卒去の年は定かならず、高僧傳二十一には弘始十一年(西紀四〇九)八月二十日に寂を示すといふも、開元錄四上十三には弘始十四年(四一二)に至る迄什は翻經に從事せりと記せり。孰れか是なるを知らず。什の譯せる阿彌陀經は唯五紙にして現に養峽に在り。淨土正依の三經の一となす。

二譯　小無量壽經一卷　(缺失)

宋求那跋陀羅(Gunabhadra)卽ち功德賢の譯する所、四紙のみ。開元錄五上二十の求那跋陀羅を列ぬる下に小無量壽經一卷、或は小の字なし、第二出、羅什阿彌陀及唐譯稱讚淨土と同本。孝建(西紀四五四―四五六)年に出だす、一に阿彌陀と名く、道慧、僧祐二錄に見ゆ云々と云へり。又三寶紀十三左並に內典錄四上十左並に六二十九左にも同く之を載す。求那は中印の三藏にして、西紀四三五卽ち宋元嘉十二年支那に來り、四四三卽ち元嘉二十年迄に五十二部一百三十四卷の翻譯をなす。開元錄五上十八左巳下に列ぬるが如し。求那の譯せる此の小無量壽經は缺失して今傳はらず。開元錄大乘缺本錄十四十八右に此の經を載し、下に註して此の經乃ち阿彌陀と異らず、故に缺本となすといへり。

三譯　稱讚淨土佛攝受經一卷

唐玄奘之を譯す。開元錄八上十三右玄奘の下に稱讚淨土佛攝受經一卷を騰げ、註に內典錄に見ゆ、第三出、羅什阿彌陀經等と同本。永徽元年(西紀六五〇)正月一日大慈恩寺翻經院に於て譯す。沙門大乘詢筆受すと記せり。內典錄五下十九左並に同錄六二十九左に同く之を載す。十紙にして亦養峽に收む。奘は西紀六二九卽ち唐貞觀三年支那を發して、有名なる印度旅行の途に上り、渡天十有七年にして洽く三藏を研習し、西紀六四五卽ち貞觀十九年一月二十四日洛陽に歸還し、それより西紀六六四卽ち麟德元年二月四日六十五歲を以て其の生を終る迄に、七十五部一千三百三十五卷の驚くべき翻譯を完成せり。開元錄八上十二巳下右に列ぬる所の如し。惟ふに當今下根の徒纔かに五

三の書冊を傳譯し揚々得色あり。古人に對して何ぞ少く慚ぢざる、噫、何ぞ少く愧ぢざる。

又英譯の阿彌陀經あり、西紀一八八〇卽ち明治十三年に敎授マクス、ミュラーの譯する所にして、復載せて東方聖書第四十九卷に在り。題してThe Smaller Sukhâvati vyûha といふ。

又佛譯あり、南條博士の英譯明藏目錄に記する所を見るに左の如し。

A French translation, by MM. Ymaïzoumi and Yamata, with the Sanskrit text, was published in the Annales du Musée Guimet, vol.ii (1881), pp.39—64.

其他別出及支派の經あり、他日之を錄すべし。

今云はく、本稿は明治三十四年一二月の起草に係る。其の後、無量壽經の譯者に就て研究するに疑ふべきもの多々あり。乃ち改竄を要すべき所なりと雖も、其の閑を得ざるまゝ、舊稿を取りて之を編入することゝなせり。

三　劉宋求那跋陀羅譯の阿彌陀經に就て

阿彌陀經の漢譯は前後三譯ある。第一譯は姚秦の鳩摩羅什の翻譯したもので、淨土宗等にて現に所依の經として用ひつゝあるものが、卽ちそれである。第二譯は、劉宋求那跋陀羅が孝建年中に翻譯したもので、小無量壽經、一名阿彌陀經と稱するものであるが、此の經は傳はらない。第三譯は唐の玄奘の翻譯であつて、普通には稱讚淨土經といふて居るが、詳しくは稱讚淨土佛攝受經と云ふのである。第一第三の二譯は現存して藏經中に收められてある。そこで現存二經は世に流布して、人の知る所であるから、今は第二譯に就て、少しく述べて見よう。

外に梵本の阿彌陀經が、不思議にも日本に傳つて居て、それを英國の碩儒マクス、ミュラーが、翻譯をした英譯經がある。

求那跋陀羅卽ち功德賢は、中印度の婆羅門種の家に生れた人で、幼にして五明諸論を學んだが、後ち阿毘曇雜心を見て大に驚悟するところがあつて、家を捨てゝ沙門となり、尋いで復た小乘を措いて專ら大乘を究め、後ち錫蘭に遊化し、元嘉十二年に

舟に乘て支那廣州に渡來した處が、宋の文帝は、使を遣はして之を京師に迎へ、深く厚遇を加へられた。求那跋陀羅は、其の年已後、小無量壽經、外五十一部の經を翻譯し、泰始四年に壽七十五で寂せられた。

此の小無量壽經は、支那で早くから逸亡して仕舞つたものであるから、勿論其の內容は知ることが出來ぬ。さり乍らその中の拔一切業障根本得生淨土神呪だけは、不思議神力傳に載せられて殘つて居る。同傳に依て見れば、此の神呪は、宋元嘉末年に求那跋陀羅が重ねて勅を奉じて譯したもので、合計五十九字十五句しかない。これは元と龍樹菩薩が安養に生せんと願じて、夢に感得せられたものを、耶舍三藏と云ふ人が、其の呪を誦持して支那に來り、口づから之を天平寺錫法師に授けた。時に耶舍三藏が告げて云ふよう、若し此の呪法を受持せんと欲せば楊枝澡豆を嚼み、口を嗽ぎ香を燃し、佛の像前に於て胡跪合掌して、日夜六時、各誦すること三七遍すれば、卽ち四重五逆十惡謗方等の罪を滅し、現世に求むる所皆得て、惡鬼神の爲に惑亂せられず。若し數二十萬遍に滿つれば、卽ち菩提の芽を感得し、若し三十萬遍に至れば、卽ち面り阿彌陀佛を見ることが出來ると。其の神呪と云ふのは、左の如くである。

南無阿彌多婆夜哆（多曷切一）他伽跢（都餓切二）夜哆地（途賣切三）夜他阿彌利（上聲四）都婆毗（五）阿彌利哆（六）悉耻婆毗（七）阿彌利哆（八）毗迦蘭諦（九）阿彌利哆（十）毗迦蘭哆（十一）伽彌膩（十二）伽伽那（十三）枳多迦隸（十四）莎婆訶（十五）若有善男子善女人能誦此呪者、阿彌陀佛常住其頂、日夜擁護、無令怨家而得其便、現世常得安隱、臨命終時任運往生。

處が此の神呪は、唐永徽四年に、阿地瞿多三藏が譯した陀羅尼集經第二、又唐不空が譯した無量壽如來修觀行供養儀軌等にも記載せられてある。陀羅尼集經には、阿彌陀大身呪として

那（上音）謨喝囉（上音）怛那（二合）跢囉（二合）夜耶（一）那（上音）謨阿喫耶（二）阿彌跢婆（去音）耶（三）跢他揭跢耶（四）阿囉訶（上音）帝（五）三藐三菩馱耶（六）跢姪他（七）阿蜜哩（二合）羝（八）阿蜜哩（二合）跢（三）婆（去音）髀（九）阿蜜哩（二合）都知婆（二合）髀（十）阿蜜哩（二合）跢毗迦爛（去音）跢（十一）伽彌（去音）泥伽伽那（十二）吉哩底羯隣（十三合）薩婆薩波迦生（二合）迦隣曳（十四）莎（去音）訶（十五）

とあり。無量壽如來修觀行供養儀軌には、無量壽如來根本陀羅尼として

曩謨（引）囉怛曩（二合）怛囉（二合）夜（引）耶一娜莫阿（引）哩野（二合引）弭跢婆（去聲引）耶二怛他（去聲）藥跢（引）夜囉曷帝三（去）藐三（去）沒馱（引）耶三怛儞也（二合）他（四）唵（引）阿蜜嚩（二合）帝（五）阿蜜嚩（二合）妬

引納婆二合吠引微六閉反阿蜜嘿二合多三去婆上聲吠準上七阿蜜嘿二合多蘖陛八阿蜜嘿二合多悉
第九阿蜜嘿二合多帝際自曳反十阿蜜嘿二合多尾訖磷羅舌反二合引帝十一阿蜜嘿二合多尾訖磷二合前準
反多誐引弭寧引二十阿蜜嘿二合多誐誐曩吉引底丁以切迦隷三十阿蜜嘿二合多嫩上弩批娑
嚩二合嚩四十薩嚩引囉佗二合婆去聲引駄寧五十薩嚩羯磨訖禮二合引捨乞灑二合孕迦嚩娑嚩二合
引賀引六十

此無量壽如來陀羅尼、纔誦一徧、卽滅身中十惡四重五無間罪、一切業障悉皆消滅、若
苾芻苾芻尼犯根本罪、誦七遍已、卽時還得戒品清淨、誦滿一萬徧獲得不廢忘菩提心
三摩地、菩提心顯現身中、皎潔圓明猶如淨月、臨命終時見無量壽如來與無量俱胝菩
薩衆、圍繞來迎安慰行者、則生極樂世界上品上生、證菩薩位。

と書かれてある。

又元の沙羅巴(淨土指歸集卷上)も此の呪を音譯して、無量壽如來根本眞言と名づけ
てゐる。卽ち

奈麻辣怛納、特囉耶也、奈麻阿哩也、阿彌打跋也、怛㗚哿怛也、阿囉喝帝、三迷三不達也、
怛的也㗚、唵、阿彌哩帝、阿彌哩打、嗢巴偉、阿彌哩打、三巴偉、阿彌哩打、葛哩比、阿彌哩打、
薛帝、阿彌哩打、帝際、阿彌哩打、韋羯蘭帝、阿彌哩打、韋羯蘭帶、哿彌儞、阿彌哩打、哿哿奈、
羯哩帝、葛哩、阿彌哩打、頓都比、蘇哇哩、薩哩哇、阿勒㗚、薩怛儞、薩哩哇、哿哩麻、吉哩舍、吉
舍也、葛哩、莎喝、

斯樣に此の神呪は幾遍も音譯せられたものと、內容は同一である。雲棲の袾宏禪師は、阿
彌陀經疏鈔の終に、不思議神力傳に依つて、求那跋陀羅の此の神呪を揭載し、非常に
其の受持を勸めて居る。淨土指歸などにも此の呪のことを書いてゐる所から見る
と、支那には餘程行はれて居つたことが解かる。

現に今阿彌陀神呪經と題する一卷の經が坊間に傳つてゐて、菩提流支譯と銘が打
つてある。此の經は文段字句悉く皆羅什の阿彌陀經と同一であるけれども、唯六方
段の前に、次の如き文字が挿入されてあるのが異點である。

又舍利弗、阿彌陀佛有根本祕密陀羅尼神呪、是名拔一切業障根本得生極樂淨土神
呪、卽說呪曰、

南無阿彌哆婆夜哆(多曷切一)他伽哆(都俄切二)夜哆地(途賣切三)夜他阿彌利(上聲四)

都婆毗(五)阿彌利哆(六)悉耽婆毗(七)阿彌利哆(八)毗迦蘭諦(九)阿彌利哆(十)毗迦蘭哆(十一)伽彌膩(十二)伽伽那(十三)枳多迦隷(十四)涉婆訶(十五)

佛言、若有善男子善女人、能誦此呪者、阿彌陀佛、常住其頂、日夜擁護、無令怨家而得其便、現世當得安穩、臨命終時、任運往生極樂淨土。

又舍利弗、阿彌陀佛名號、具足無量無邊不可思議甚深祕密殊勝微妙無上功德、所以者何、阿彌陀佛三字中、有十方三世一切諸佛一切諸菩薩聲聞阿羅漢一切諸經陀羅尼神呪無量行法、是故彼佛名號、卽是爲無上眞實至極大乘之法、卽是爲無上殊勝淸淨了義妙行、卽是爲無上最勝微妙陀羅尼、卽說偈曰、

阿字十方三世佛、彌字一切諸菩薩、陀字八萬諸聖敎、三字之中是具足。

舍利弗、若有衆生、聞說阿彌陀佛不可思議功德、歡喜踊躍、至心稱念、深信不懈、於現在身、受無比樂、或轉貧賤獲得富貴、或得果免宿業所追病患之苦、或轉短命得壽延長、或怨家變恨得子孫繁榮、身心安樂如意滿足、如是功德不可稱計。

これは勿論麒麟聖財論などの筆法と同樣に僞經であらう。恐らく求那跋陀羅の譯經に似せて拵へたものであらうと思はれるので、古人も五難を設けて之を疑つてゐる。五難と云ふのは、卽ち

(一)諸錄を考ふるに此の經を載せず(二)此の經前後の文を撿するに、神呪を除いて以外は什譯の小經と全く異なりがない、譯人旣に別なるに、その文言相同じきは大に疑ふべきである(三)神呪は龍樹の夢に感じたるを耶舍が誦し、耶舍より天平寺鍜法師が口づから受けたといふのであるが、而も耶舍はその經が外國(支那)に傳つてゐないといふて居る(四)旣に外國(支那)に傳つて來ない經文を如何にして之を譯することが出來ようか(五)菩提流支の傳中(唐傳一、釋敎錄六等)に、此の經を譯したことが書いてないと云ふのである。

處が之に對して龍原寺の安譽智足は、一々會通をして居る。その意を取れば(一)諸錄中に載せざるは流布せざるが故である。例せば釋摩訶衍論が、七百年間漢土に流布しなかつたよふなものである(二)異譯にして文言全同なるは、亦例せば羅什所譯の阿彌陀經と、求那跋陀羅譯出の小無量壽經と、文言同くして異ならざると同じく、又眞諦と摩多との譯せる起信論の文言異ならざると同じい(三)龍樹や耶舍が之を得なかつたのは、梵本の種類が澤山あつた爲で、龍樹、耶舍が用ひ無いから全く無いと

は云へない。況んや外國(支那)には來ないと云ふが、之が印度に在つたことは明である(四)外國不來といふ語は、不得を以て之を未渡に屬したものである(五)流支傳中に擧げないのは、所譯の經論は廣汎であるから、悉く之を載することが出來ない。されば流支傳には、流支房内の經論梵本萬枚あるべし、所翻の新文、筆受の藁本、一間屋に滿つといふてある。その萬枚滿屋の中に此の經が在つたのであると云ふてゐるが、知足の論は薄弱である。

四　傍明淨土の經幷に論集目次

往生淨土を明せる經に正明傍明の別あり。正明の經は卽ち無量壽經、觀無量壽經及び阿彌陀經の三部にして、人の善く熟知する所なり。無量壽經に十二譯あり、觀無量壽經に二譯あり、阿彌陀經に三譯あることは、予の亦曾て本誌に記載せし所にして、既に讀者の高閲を經しことならん。但だ傍明淨土の經、幷に論集に至ては、其の數甚だ多しとのみ聞き傳へて、未だ其の目次をだも詳にせざる者少からず。予も實に久しく其の一人たりしが、頃日阿彌陀佛說林を讀みて、始めて其の部數の頗る衆多にして、指讚の甚だ慇懃なるに喫驚せり。大藏經を精讀する者に非れば、素より能はざる所の偉業にして、吾人は深く阿彌陀佛說林の作者繼成に向つて衷心の謝意を表明する者なり。但だ其の中の記載は、正明傍明の別を設けず、又經及び論と西土聖賢撰集とを區分せざるのみならず、普通藏錄の排列の次第を用ゐたるを以て、翻譯年代の前後を知ること甚だ難し。是の故に今此等の諸點を整正し、讀者をして一目了し易からしめんことを努めたり。加之、浩瀚なる藏經に就きて之を拔萃せし者なれば、五三の遺脫あるは固より免かれざる所なり。惟ふに淨土の經名及びその內容を記載せる者は、獨り阿彌陀佛說林に限らず、宋宗曉の樂邦文類、明大佑の淨土指歸、袁中郎の西方合論、幷に吾が邦に於ける覺明の長西錄、定仙の海藏念佛典決、及び文雄の蓮門經籍錄等あり。今此等の諸書を參照し、又嘗て一二の經論を讀誦せし際、私錄せしものを加へて、一併して左に之を表示することゝなせり。庶幾くは宗學攻究の一助たることを得む乎。但し譯本の亡失して傳はらざる者、その數甚だ多し。無量壽經の十二譯の如き、七本は既に缺けて存する者唯五譯のみ。今若し古錄に依りて傍

明淨土の諸經の既に缺本せるものをも併せ列ねば、其の數、下に倍する者あるや必然なり。唯存するものゝみを記するに尙次の如し。誰か其の過多なるに驚かざる者あらんや。中に於て、傍明とは一經の宗とする所に非ざれども、而かも因みに往生淨土を明せる經をいひ、論とは印度諸論師の製作にして、集は印度及び西域に於ける諸賢の著述せしものをいふ。選擇集には、論の中に就きて亦正依傍依を分ち、天親の無量壽經優婆提舍を正依とし、餘の十住毘婆沙等を傍依となせり。されど今唯だ姑く其の別に關せず、總じて翻譯の次序を以て之を列ぬ。論の正依は唯だ一部にして、之を別出するに足らざればなり。（左表は明藏の卷數に依る）

大般舟三昧經三卷第一　後漢支婁迦讖譯
般舟三昧經一卷　同譯
後出阿彌陀佛偈經一卷　後漢失譯
作佛形像經一卷　後漢失譯
拔陂菩薩經一卷　後漢失譯
維摩詰經二卷全經散說　吳支謙譯

慧印三昧經一卷　同譯
無量門微密持經一卷　同譯
老女人經一卷　同譯
菩薩生地經一卷　同譯
舊雜譬喻經二卷第二　吳康僧會譯
文殊師利佛土嚴淨經二卷全經散說　西晉竺法護譯
生經第五十五佛說譬喻經　同譯
太子刷護經一卷　同譯
方等般泥洹經二卷第二　同譯
正法華經十卷第四第九　同譯
賢劫經八卷第一第八　同譯
阿惟越致遮經三卷第三　同譯
持心梵天所問經四卷第一　同譯
決定總持經一卷　同譯

寶網經一卷　西晉竺法護譯
濟諸方等學經一卷　同譯
海龍王經四卷第三　同譯
賴吒和羅所問德光太子經一卷　同譯
三曼陀颰陀羅菩薩經一卷　西晉聶道眞譯
菩薩受齋經一卷　同譯
太子和休經一卷　西晉失譯
大灌頂神呪經十二卷第十一第十二　東晉帛尸梨蜜多羅譯
大方廣佛華嚴經六十卷第三十一（第四十七第六十）　東晉佛陀跋陀羅譯
出生無量門持經一卷　同譯
觀佛三昧海經十卷第九　同譯
大般泥洹經六卷第一第二第六　東晉法顯譯
造立形像福報經一卷　東晉失譯
請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪經一卷　東晉難提譯

七佛所說神呪經一卷　晉代失譯
十住斷結經十卷全經散說　姚秦竺佛念譯
菩薩瓔珞經二十卷第十六　同譯
菩薩處胎經五卷第二第三第四第五　同譯
中陰經二卷第二　同譯
妙法蓮華經七卷第三第六　姚秦鳩摩羅什譯
維摩詰所說經三卷第二第三　同譯
思益梵天所問經四卷第一　同譯
諸法無行經二卷第一　同譯
大方等陀羅尼經四卷第二第三　北涼法衆譯
大般涅槃經四十卷第一第三第十第廿四　北涼曇無讖譯
大方等大集經六十卷第二十第廿一　同譯
悲華經十卷第一第二第八第十　同譯
大乘悲分陀利經八卷第一第三第六　北涼失譯

大方等無想經六卷第六　北涼　曇無讖譯
金光明經四卷第一第二　同　譯
合部金光明經八卷第一第二　北涼　曇無讖譯、隋寶貴合
不退轉法輪經四卷第四　北涼　失　譯
南本涅槃經三十六卷第一第十第廿第三第二　劉宋　慧嚴等依泥洹經加之
法華三昧經一卷　劉宋　智嚴譯
廣博嚴淨不退轉法輪經六卷第四　同　譯
出生無邊門陀羅尼經一卷　同　譯
菩薩內戒經一卷　劉宋　求那跋摩譯
阿難陀目佉尼訶離陀經一卷　劉宋　求那跋陀羅譯
央掘魔羅經四卷第三　同　譯
大法鼓經二卷第一　同　譯
老母女六英經一卷　同　譯
拔一切業障根本得生淨土神呪一卷　同　譯

觀世音菩薩得大勢至菩薩受記經一卷　劉宋　曇無竭譯
菩薩念佛三昧經五卷第二第四　劉宋　功德直譯
如來智印經一卷　劉宋　失　譯
無量門破魔陀羅尼經一卷　劉宋　功德直共玄暢譯
老母經一卷　劉宋　失　譯
舍利弗陀羅尼經一卷　梁　僧伽婆羅譯
阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經一卷　梁　失　譯
過去莊嚴劫千佛名經一卷　梁　失　譯
現在賢劫千佛名經一卷　梁　失　譯
未來星宿劫千佛名經一卷　梁　失　譯
虛空藏菩薩問七佛陀羅尼經一卷　梁　失　譯
稱揚諸佛功德經三卷第三　元魏　吉迦夜譯
入楞伽經十卷全經散說　元魏　菩提留支譯
無字寶篋經一卷　同　譯

謗佛經一卷　元魏　菩提留支譯
佛名經十二卷（全經散說）　同　譯
勝思惟梵天所問經六卷（第一）　同　譯
阿難陀目佉尼訶離陀鄰尼經一卷　元魏　佛陀扇多譯
僧伽吒經七卷（第一）　元魏　月婆首那譯
不思議功德諸佛所護念經二卷（第二）　曹魏　失　譯
大悲經五卷（第二）　高齊　那連提黎耶舍譯
月燈三昧經十卷（第一第三第五第七第八）　同　譯
大乘同性經二卷（全經散說）　宇文周　闍那耶舍譯
十一面觀世音菩薩神呪經一卷　宇文周　耶舍崛多譯
大乘方廣總持經一卷　隋　毘尼多流支譯
百佛名經一卷　隋　那連提黎耶舍譯
大方等大集賢護經五卷（第一）　隋　闍那崛多等譯
添品妙法蓮華經七卷（第三第七）　隋　闍那崛多共笈多譯

諸法本無經三卷（第一）　隋　闍那崛多譯
一向出生菩薩經一卷　同　譯
如來方便善巧呪經一卷　同　譯
東方最勝燈王如來助護持世間神呪經一卷　同　譯
大法炬陀羅尼經二十卷（第十一第十七）　隋　闍那崛多等譯
五千五百佛名神呪除障滅罪經八卷（第三第五第七）　隋　闍那崛多譯
觀察諸法行經四卷（第二第三）　同　譯
月上女經二卷（第一）　同　譯
出生菩提心經一卷　同　譯
發覺淨心經二卷（全經散說）　同　譯
大乘三聚懺悔經一卷　同　譯
大方等大集經菩薩念佛三昧分十卷（全經散說）　隋　闍那崛多共笈多等譯
藥師如來本願經一卷　隋　達摩笈多譯
寶星陀羅尼經十卷（第四第六）　同　譯
傍明淨土の經并に論集目次　唐　波羅頗蜜多羅譯

大般若波羅蜜多經六百卷第一第四百七十一　唐　玄奘譯
顯無邊佛土功德經一卷　同譯
說無垢稱經六卷第四第五　同譯
不空羂索呪心經一卷　同譯
十一面神呪心經一卷　同譯
千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經二卷全經散說　唐　智通譯
觀自在菩薩怛嚩多唎隨心陀羅尼經一卷　同譯
清淨觀世音菩薩普賢陀羅尼經一卷　同譯
陀羅尼集經十二卷全經散說　唐　阿地瞿多譯
千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經一卷　唐　伽梵達摩譯
離垢慧菩薩所問禮佛法經一卷　唐　那提譯
證契大乘經二卷全經散說　唐　地婆訶羅譯
大乘離文字普光明藏經一卷　同譯
大乘徧照光明藏無字法門經一卷　同譯
佛頂最勝陀羅尼經一卷　同譯
最勝佛頂陀羅尼淨除業障經一卷　同譯
大乘密嚴經三卷第一　同譯
佛頂尊勝陀羅尼經一卷　唐　杜行顗譯
佛頂尊勝陀羅尼經一卷　唐　佛陀波利譯
大方廣佛華嚴經不思議境界分一卷　唐　提雲般若譯
大方廣佛華嚴經修慈分一卷　唐　提雲般若等譯
大方廣佛華嚴經八十卷第四十五第六十三第八十　唐　實叉難陀譯
大方廣如來不思議境界經一卷　同譯
大乘入楞伽經七卷第六　同譯
觀世音菩薩祕密藏神呪經一卷　同譯
不空羂索陀羅尼經一卷　唐　李無諂譯
無垢淨光大陀羅尼經一卷　唐　彌陀山譯

不空羂索心呪王經三卷第一第三　唐　寶思惟譯
觀世音菩薩如意摩尼陀羅尼經一卷　同　譯
大陀羅尼末法中一字心呪經一卷
金光明最勝王經十卷第一第三第五第八　唐　寶思惟等譯
藥師瑠璃光七佛本願功德經二卷全經散說　唐　義淨譯
觀自在菩薩如意心陀羅尼呪經一卷　同　譯
大金色孔雀王呪經一卷　同　譯
佛頂尊勝陀羅尼經一卷　同　譯
莊嚴王陀羅尼呪經一卷　同　譯
香王菩薩陀羅尼呪經一卷　同　譯
一切法功德莊嚴王經一卷　同　譯
無常經附臨終方訣一卷　同　譯
大寶積經百二十卷第七第六十第七十六第八十一第九十一第九十二第百二第百六　唐　菩提流志等譯
不空羂索神變眞言經三十卷除第廿三第廿四第廿五及第廿九餘卷散說　唐　菩提流志譯

千手千眼觀世音菩薩姥陀羅尼身經一卷　同　譯
如意輪陀羅尼經一卷　同　譯
廣大寶樓閣善住祕密陀羅尼經三卷第一第三　同　譯
一字佛頂輪王經六卷第四　同　譯
文殊師利寶藏陀羅尼經一卷　同　譯
大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經十卷第五第七　唐　般剌蜜帝共懷廸譯
大毘盧遮那成佛神變加持經七卷第三第五　唐　輸波迦羅譯
金剛頂瑜伽中略出念誦經四卷第一第三　唐　金剛智譯
觀自在如意輪菩薩瑜伽法要一卷　同　譯
金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經一卷　同　譯
大吉祥天女十二名號經一卷　唐　不空譯
大吉祥天女十二契一百八名無垢大乘經一卷　同　譯
葉衣觀自在菩薩經一卷　同　譯

觀自在菩薩說普賢陀羅尼經一卷	唐 不空譯	
八大菩薩曼荼羅經一卷	同 譯	
瑜伽集要救阿難陀羅尼焰口軌儀經一卷	同 譯	
一髻尊陀羅尼經一卷	同 譯	
不空羂索毘盧遮那佛大灌頂光眞言經三卷 全經散說	同 譯	
一字奇特佛頂經三卷 第三	同 譯	
出生無邊門陀羅尼經一卷	同 譯	
阿唎多羅陀羅尼阿嚕力經一卷	同 譯	
大寶廣博樓閣善住祕密陀羅尼經三卷 第三	同 譯	
菩提場所說一字頂輪王經五卷 第三	同 譯	
金剛頂瑜伽念誦經一卷	同 譯	
普徧光明焰鬘淸淨熾盛如意寶印心無能勝大明王大隨求陀羅尼經二卷 第二	同 譯	
大乘瑜伽金剛性海曼殊室利千臂千鉢大敎王經十卷 第一 第三 第四	同 譯	

金剛恐怖集會方廣軌儀觀自在菩薩三世最勝心明王經一卷	唐 不空譯	
大方廣曼殊室利經觀自在多羅菩薩儀軌經一卷	同 譯	
十一面觀自在菩薩心密言念誦儀軌經三卷 第一	同 譯	
瑜伽集要焰口施食起敎阿難陀緣由一卷	同 譯	
大方廣佛華嚴經四十卷 第六 第三十九 第四十	唐 般若譯	
守護國界主陀羅尼經十卷 第二	唐 般若共牟尼室利譯	
聖虛空藏菩薩陀羅尼經一卷	宋 法天譯	
毘俱胝菩薩一百八名經一卷	同 譯	
一切如來烏瑟膩沙最勝總持經一卷	同 譯	
聖寶藏神儀軌經二卷 第一	同 譯	
校量一切佛刹功德經一卷	宋 法賢譯	
鉢蘭那賒嚩哩大陀羅尼經一卷	同 譯	

無量功德陀羅尼經一卷　宋　法賢譯
十八臂陀羅尼經一卷　同　同譯
觀自在菩薩母陀羅尼經一卷　同　同譯
無量壽大智陀羅尼一卷　同　同譯
一切如來名號陀羅尼經一卷　同　同譯
瑜伽大教王經五卷（第一第二第四第五）　同　同譯
最上根本大樂金剛不空三昧大教王經七卷（第七）　同　同譯
一切佛攝相應大教王經聖觀自在菩薩念誦儀軌經一卷　同　同譯
幻化網大瑜伽教十忿怒明王大明觀想儀軌經一卷　同　同譯
讚揚聖德多羅菩薩一百八名經一卷　宋　天息災譯
聖觀自在菩薩一百八名經一卷　同　同譯
觀想佛母般若波羅蜜多菩薩經一卷　同　同譯
大摩里支菩薩經七卷（第五第七）　同　同譯
一切如來大祕密王朱曾有最上微妙大曼拏羅經五卷（第一第二第四第五）　同　同譯

大乘莊嚴寶王經四卷（全經散說）　同　同譯
大方廣菩薩藏文殊師利根本儀軌經二十卷（第一第十一第十五第十六第十八）　同　同譯
守護大千國土經三卷（第三）　宋　施護譯
佛頂放無垢光明入普門觀察一切如來心陀羅尼經二卷（第二）　同　同譯
護國尊者所問大乘經四卷（第二）　同　同譯
發菩提心破諸魔經二卷（全經散說）　同　同譯
金身陀羅尼經呪語一卷　同　同譯
大集會正法經五卷（第二）　同　同譯
聖觀自在菩薩不空王祕密心陀羅尼經一卷　同　同譯
一切如來眞實攝大乘現證三昧大教王經三十卷（第五第六第七第八第十八）　同　同譯

一切如來金剛三業最上祕密大教王經七卷（全經散說）　宋　施護譯
無二平等最上瑜伽大教王經六卷（第三第四第五第六）　同　譯
大悲空智金剛大教王儀軌經五卷（第一第二第三第五）　宋　法護譯
大乘智印經五卷（第三第四）　宋　智吉祥等譯
妙吉祥平等祕密最上觀門大教王經五卷（第一第三第四第五）　宋　慈賢譯
大白傘蓋總持陀羅尼經一卷　元　唧嗟銘得哩連得曬磨寧等譯
聖妙吉祥眞實名經一卷　元　釋智譯
聖救度佛母二十一種禮讚經一卷　元　安藏譯
阿彌陀佛說呪一卷　失譯
（以上經通計二百十五部）
文殊師利發願經一卷　東晉　佛陀跋陀羅譯
思惟要略法一卷　姚秦　鳩摩羅什譯
十住毘婆沙論十七卷（龍樹造第五）　同　譯
大智度論百卷（龍樹造第四第八第九第十第二十一第二十九第三十二第三十四第三十六第三十八第四十等）　同　譯

大乘起信論一卷（馬鳴造）　梁　眞諦譯
究竟一乘寶性論四卷（第一第四）　元魏　勒那摩提譯
無量壽經優婆提舍一卷（婆藪槃豆造）　元魏　菩提流支譯
攝大乘論二卷（無著造卷上）　元魏　佛陀扇多譯
寶髻經四法優婆提舍一卷（世親造）　東魏　毘目智仙譯
攝大乘論三卷（無著造第二）　陳　眞諦譯
攝大乘釋論十五卷（世親造第十五）　同　譯
攝大乘論釋十卷（世親造第五）　隋　笈多、行矩等譯
十二禮文（龍樹造）　禪那崛多譯
大乘莊嚴經論十三卷（無著造第六）　唐　波頗譯
攝大乘論三卷（無著造第二）　唐　玄奘譯
攝大乘論釋十卷（世親造第五）　同　譯
攝大乘論釋十卷（無性造第五）　同　譯
大乘阿毘達磨雜集論十六卷（安慧造第十二）　同　譯

大乘起信論二卷 馬鳴造 第二　唐　實叉難陀譯
龍樹菩薩勸誡王頌一卷 龍樹造　唐　義淨譯
金剛頂經瑜伽觀自在王如來修行法一卷　唐　金剛智譯
金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大敎王經三卷 第一　唐　不空譯
金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩修行儀軌經三卷 全經散說　同譯
金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦法經一卷　同譯
無量壽如來修觀行供養儀軌一卷　同譯
大樂金剛薩埵修行成就儀軌一卷　同譯
成就妙法蓮華經瑜伽觀智儀軌一卷　同譯
金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌一卷　同譯
觀自在菩薩如意輪念誦儀軌一卷　同譯
大樂金剛不空眞實三昧耶經般若波羅蜜多理趣釋二卷 第二　同譯
金剛王菩薩祕密念誦儀軌一卷　同譯
瑜伽蓮華部念誦法一卷　同譯

金剛頂經觀自在王如來修行法一卷　同譯
金剛頂蓮華部心念誦儀軌一　同譯
金剛頂瑜伽護摩儀軌一卷　同譯
陀羅尼門諸部要目一卷　同譯
金剛頂瑜伽三十七尊禮一卷　同譯
受菩提心戒儀一卷　同譯
百千頌大集經地藏菩薩請問法身讚一卷　同譯
金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論一卷　同譯
一切祕密最上名義大敎王儀軌二卷 第一　宋　施護譯
大乘集菩薩學論二十五卷 法稱造 西藏本云寂天 第一 第十一　宋　法護譯
大乘寶要義論十卷 第二 第六　宋　法護等譯
妙吉祥平等瑜伽祕密觀身成佛儀軌一卷　宋　慈賢譯
妙吉祥平等觀門大敎王經略出護摩儀軌一卷　同譯
（以上論集通計四十五部）

五　無量壽經の成立年代私考

一

現存せる漢譯大藏經に就て之を撿するに、彌陀若くは極樂淨土を散說せる所の經凡そ二百數十部あり。之を大小乘經通計九百四十余部に比例する時は、實に其の四分の一に當り、若し小乘經中には他方淨土を說かざるが故に(僅に一二經あり)姑く之を控除し、單に大乘經約六百數十部に比例する時は、其の三分の一强に當る。實に諸經所讚、多在彌陀なり。況や龍樹、馬鳴、無著、世親、堅慧、安慧の徒、竝に悉く彌陀を唱說し、西土聖賢撰集に屬する二十余部の著作中にも、亦皆彌陀の供儀若くは極樂往生を記載するを見るに於ては、彌陀崇拜の思想が、實に豫想以上の隆盛を以て印度、及西域諸國に傳播せしことを知るべし。支那、朝鮮、西藏、竝に本邦に於ける淨土敎の傳通は、時に盛衰ありと雖も、概して之を論すれば、民間に於ける信仰卽人生の實際的指導として、實に佛敎中の第一位を占めたるの觀あり。阿彌陀佛の東洋諸國に於ける思想上の勢力は、決して基督敎の神の泰西諸國に於けるものより劣等なるべからず。嘗て以爲らく、東洋の文明を研究せんと欲する者は、其の力の一半を佛敎の研究に貸さゞるべからず、隨て佛敎を研究せんと欲する者は、亦其の力の一半を彌陀思想の研究に費さゞるべからずと。然るに基督敎の神の思想は、泰西の諸學者に依りて、既に餘蘊なき迄に研究せられたりと雖も、阿彌陀佛問題は未だ多く東洋學者の案頭に上らざるが如し。予輩は近年以來淨土敎大史の編纂を志し、目下研究の半途に在り。本論の如きは未定稿にして、臆說妄斷固より取るに足らずと雖も、之に由りて聊かにても彌陀思想の何たるかを學界に介することを得ば則ち足れり。

蓋し上にいへる彌陀所讚の二百數十部の經中、一部を通じて專ら往生淨土を說けるものと、傍ら之に言及せしものとの別あり。法然上人の選擇集には、前者を淨土正依の經と名けて、無量壽經、觀無壽量經、及び彌陀經の三部を之に配屬し、後者を傍依の經と名けて、華嚴、法華等を類攝せり。明袁中郎の西方合論には、經緯の四句を作りて汎く諸經を分類し、無量壽等の三部を經中の經とし、鼓音聲王及び後出阿彌陀偈を經中の緯とし、華嚴、法華、般舟三昧等を緯中の經とし、淨名、涅槃、文殊般若等を緯中

の緯となせり。迦才の淨土論、慈恩の彌陀經疏、惠心の往生要集、雲栖の彌陀經疏鈔等に、亦各其の說ありと雖も、無量壽等の三部を淨土主要の聖典となすことに於ては互に一致せり。蓋し此等の三部は、主として彌陀及び其の淨土竝に之に生ずべき行法を說けり。本邦、竝に支那、朝鮮諸國に現に行はれつゝある彌陀崇拜の思想は、皆此の三部の聖典より發源せしにあらざるはなく、今日淨土敎徒が尊敬頂戴して、其の一文一句といへども、之を金科玉條視するを見るに至て、轉た其の勢力の偉大なるに驚かざらんと欲するも得ざるものあり。然るに此等三部の聖典に就き、予輩の臆測する所によれば、觀無量壽經の出現は恐らくは最も遲く、阿彌陀經は無量壽經の抄出ならざるかを疑ふべきのみならず、其の內容の根元的ならざるは一讀明了なるを以て、今特に無量壽經の成立年代に就て多少の想像を試み、之に由りて彌陀思想の發源を探窮し、兼ねて淨土敎義の變遷歷程及び其の地理的位置を考察して以て大方の叱正を乞はんと欲するなり。

若し古來一般の學者が確信せし如く、大小乘諸經を以て悉く釋迦の說法其儘の筆錄にして一毫の訛謬もなきものとせば、彌陀思想は勿論、彌勒思想、觀音思想より、有ゆる祕密部の中に顯はれたる諸天崇拜の思想に至るまで、悉く金口に出でたるものといふべく、隨て其の敎義は、釋尊說法の當時に既に成立すといはざるを得ずと雖も、然れども近代印度宗敎史研究の結果、祕密部の諸經を始め、大乘經の多くは、佛滅以後數百年間に於て漸次に編成せられたる產物にして、決して釋尊の直說にかかるものに非ざることを論證するに至れり。蓋し大乘非佛說の所論は、敢て今に始めたるにあらず、龍樹の當時よりして既に小乘敎徒が盛に之を唱道せしことは大智度論等に出でゝ明かなり。延ゐて無著の大乘莊嚴經論、竝に顯揚聖敎論、堅意の入大乘論、護法等の成唯識論等皆悉く大乘佛說を立證するに努めつゝあるを見ば、此の時に至るも、猶ほ外道小乘の輩が、頑然として大乘非佛說の議を鏞へさゞりしことを知るに足るべし。近代に及で非佛說の論亦頗る盛なり。佛者の之に對する態度一ならずと雖も、歷史的事實を擧げて之を否定することの困難を訴ふる點に於ては盡く一致せり。固より非佛說論といへども、確乎たる論證を提供し得る迄に進めるものに非ず、佛滅數百年間の歷史否な印度の全歷史は、殆ど暗黑にして、其の眞相を知ること極めて難く、何れの問題を捉へ來るも、異說紛綸として容易に決定すべ

からざるは學者の毎に熟知する所なる以上、非佛說論の如き大問題に向て、輕々に論斷を加ふるの不可なるは言ふ迄もなき所なり。されど今公平に斯の問題を判斷する時は、恐くは最後の勝利は非佛說論者の頭上を飾るに至らん乎。是れ一方より見れば甚だ悲むべきに似たれども、他方より觀察すれば、必ずしも之を以て憂ふべきものと爲すを要せざるが如し。之に由りて若し果して大乘經の多くが釋尊の直說に係るものに非ずとせば、其の作者は如何、其の製作の年代は如何、其の思想の由來する所は如何。隨て是の如き問題を生ずるは必然の結果なり。

彌陀思想の起源に關しては學者の說く所一ならず。松本博士の極樂淨土論に依れば、阿彌陀經に於ける極樂淨土の思想は、大善見王經より脫化し來りたるものにして、阿彌陀佛は、卽ち彼の莊嚴世界の主たる大善見王の一轉したるものに外ならずといへり。而して氏は更に此の轉輪聖王たる大善見王を以て日輪の擬人となし、之を太陽神話なりと論定し、阿彌陀佛は、其の日輪の擬人卽ち大善見王の轉化したるものに外ならざれば、其思想は亦言ふまでもなく太陽神話に起源するものなりと斷じて、其の論證として、阿彌陀の文字的意義は光明無量なることを擧示せり。蓋しリスダヴキヅ、ケルン等の諸學者は、頻りに太陽神話を以て印度の諸神を解釋せんと努めつゝあり。松本氏の今の所論も亦恐くは是れに過ぎずと雖も、予輩を以て之を見るに、氏が立論の根底は頗る薄弱を免れざるを覺ゆ。何となれば、氏は大善見王經を以て釋迦牟尼の自ら說述し給ひし所なりと斷定するも、而かも其の斷定の由來を明かにせず。リス、ダヴキヅ氏が、此の經を以て佛經古典中の一となし、恐らくは紀元前四世紀より三世紀の後半に至る間に成れるものならんと曰ひしを、氏は反駁して、是れ此の時に於て始めて世に出でたるをいふに非ず、唯其の完成の時期を示すに過ぎざるなりと論ずれども、然かも何の證左ありて、大善見王經が紀元前四世紀以前に既に世に在りしことを知るや。又若し氏の細說を聞かば此の疑問は氷解し去るとするも、予輩は氏が一途に阿彌陀經竝に平等覺經に說ける極樂淨土の思想を大善見王經より脫化し來れるものと斷定するを訝らざる能はず。婆羅門の理想國たる北俱盧洲が、極樂思想の淵源をなしたりといふは或は可なり。されど轉輪聖王の所住處たる拘尸那羅城が、彌陀淨土の根元を作したりといふは聊か怪むべし。阿彌陀經と大善見王經との類似の點は、氏の列擧せる如く實に之れ有り。然れ

ども斯かる類似は、他の諸經にも亦常に見出され得る所に非ざるなきか。予輩を以て之れを見れば、所謂彌陀思想の根本觀念とも目すべきものは來世救濟に在り。人生は苦患にして無常を免れず、是に於てか來世に於ける永久の樂土を希求し、隨て他力救濟の教義を成立するに至る。北俱盧洲が娑羅門の理想國たりし事實にして若し疑ふべからずんば、そは或は極樂淨土の起因に多少の助勢を與へたるやも未だ知るべからずと雖も、來世の觀念を含まず、救濟の意義を有せざる大善見王經が、如何にして彌陀思想の起元をなしたるべきや。且や極樂淨土は永久の樂國にして、阿彌陀佛は常恆の存在なるに、如何にして諸行無常の拘尸那羅城が其の極樂の起源をなし、又諸妃をして流涕禁じ得ざらしめし死せる善見王が、其の阿彌陀佛の元因をなしたるべきや。尾鰭は互に似たりと雖も、胴體の相類せざること既に是の如くなる以上は、予輩は大善見王經を以て阿彌陀經の發源と迄は信ずる能はざるなり。

されど松本博士が阿彌陀佛を以て太陽神話に基因する者なりといへる說は、稍〻有力なるを覺ゆ。ケルン、セナル等の如きは、釋尊さへ歷史上の人物に非ずして日輪の擬人なるべしと唱道し、一時珍說として學者を驚かしめたることあり。今は其の珍說も全く顧みられずなりしと雖も、元來印度固有の宗教思想には、光明を神格として崇拜するの風尤も盛に、太陽神話に起因する諸神亦甚だ少からず。阿彌陀の文字的意義は、氏もいへる如く光明無量にして、而も其の光明は諸佛の及ばざる所なりといへば、宛ながら太陽の光明が宇宙に獨尊なると一般なるが如く、又彌陀の淨土が西方に在りといへることは、太陽が西方に沒するより起れる思想と見られ得ざるにあらず。加之轉輪聖王といへる觀念が、果して太陽神話に基因する者とせば大善見王は兎に角、悲華經を始め、如來智印經等に阿彌陀佛の前身を轉輪聖王となし、舍利弗陀羅尼經、鼓音聲王經等に轉輪聖王の子となせる本生譚は、蓋し阿彌陀佛が太陽神話に關係を有するものたることを證明するに似たり。然れども飜て復之を考察する時は、阿彌陀の文字的意義は、獨り光明無量に止まらずして同時に壽命無量の意味を有す。南條博士の說に從へば、梵文無量壽經は唯一處を除くの外、始終無量光 Amitābha の佛名を用ひたるも、梵文阿彌陀經は之に反して只無量壽 Amitāyus の佛號を擧ぐといへり。餘の諸譯の無量壽經は、梵本今に存せざるを以て原語の意

味を知る能はずといへども、譯本に就て之を見ば、亦唯無量壽の佛號を用ひたるは人の識る所なり。若し然らば阿彌陀の語義は、寧ろ壽命無量を主とするものに非ざるか。果して然りとすれば、光明の本體たる太陽より壽命無量の阿彌陀佛を發源すとは考ふる能はざるに非ずや。又西方淨土の說は一見する處、日沒の事實より導かれたるが如しと雖も、言語學者の說に依れば、パーリ語にては、未來といへる意義を、時としては西方といへる文字にて顯はすことありといへり。是れ東方を過去とし西方を未來とするの觀念に基づく。若し然らば西方に淨土ありといふも、必ずしも之を以て太陽神話に基くものと斷定する能はざるべし。松本博士は觀無量壽經の日想觀の說を以て其の證に供すれども、後に論ずるが如く、此の經の成立は遙に無量壽經の後に在るべければ、之を以て原本の思想を解釋せんとするは未可といはざるを得ず。轉輪聖王の解說の如きも、其の文字は日輪の形容より來りしやも知るべからざれども、天下一統、四海統一などいへる思想は、何れの國民にも普通にして、必ずしも之を以て印度固有の太陽神話より轉化したるものとのみ謂ふべからざるが如し。果して然らば太陽神話說も亦猶ほ薄弱なるを免れざるものと謂ふべし。

ビールの支那佛教連鎖 Catena of Buddhist scriptures from the Chinessには、無量光天を以て阿彌陀佛の最初の所住處となし、此の天と阿彌陀佛と深大の關係あるかの如く論述せり。こは惟ふに阿彌陀婆 Amitābha と無量光天の梵名 Aprāmāhas と其の語義相同きより考察せし所なるべく、多少の價値を有せざるに非ずと雖も、而れども色界諸天の中に於て、唯此の無量光天が、如何にして來世救濟の觀念を胚胎し、遂に阿彌陀佛の如き人格的教主を發源せしめたるべきや。同じ無量光の觀念を以て阿彌陀佛の基源を說明せんとならば、予輩は寧ろ太陽神話說に左袒せんと欲するなり。氏は又紅海の門に横はれるソコトラ島を以て極樂の梵名 Sukhāvati より轉化せる名稱となし、依て此の島を西方淨土の起源なるべしと論じ、彌陀思想を亞剌比亞輸入となせど、予輩はソコトラなる文字が、果してスクハーヴチーより轉化せしや否やを知らず。但だ西儒の言語學者と稱する者が、時に一二古語の類似を將ち來りて、往往にして極めて大膽なる判斷を下すことあるを憐むのみ。

二

又前田博士の大乘佛教史論に依れば、淨土往生は中天竺佛教たる大衆部の思想な

らんといへり。蓋し氏は異部宗輪論に大衆部の佛身觀を出だして、如來の色身は實に邊際なく、如來の威力及び其の壽量亦邊際なしと記せるを、慈恩の述記に依りて、之を以て修得の報身を言ひあらはせるものとなし、既に報身を立つる以上は、必ず其の所居の處たる報土を立てざるべからずと論じ、而も氏は明言せずと雖も、此の大衆部の報身報土說を以て彌陀淨土の思想の由漸となせる者の如し。又同書の末段に、世親の無量壽經優婆提舍は、馬鳴、龍樹の先蹤を追ふて著作せし所にして、十地經論と其の軌轍を同ふし、淵源は華嚴經に在りと記せり。此の文を一見すれば、單に無量壽經優婆提舍の淵源を華嚴に歸したるが如くなれども、博士の直話に依れば、馬鳴、龍樹が記述せる彌陀思想も、亦華嚴に淵源すとなせるの意なりといふ。予輩は未だ博士の詳細の解說を聞かず、故に華嚴經と無量壽經とが果して如何なる程度に於て相互的關係を有すとなすの意なるかを知らず。されど氏は既に淨土往生は大衆部の思想なりといふ以上は、華嚴を以て原本的發源となすの意にあらざるや明かなり。恐らくは大衆部の敎義が一大發展を經て、大乘經典として、最初に成立せしものを華嚴經となすにはあらざる歟。若し然らば其の所論は、宗輪論の佛身說を以て淨土往生の起因となすものと見て可ならん。

蓋し惟ふに現今の大乘經典と稱するものは、多くは大衆部の敎義の發達變遷せし者に外ならざるべきが故に、大抵の大乘的思想は大衆部に發源すといふも固より不可を見ず。されど宗輪論の佛身說が、如何なる過程を經て彼れが如き彌陀思想を生起せしめたるか。且つ氏は此の佛身を以て報身と見做し、而して報身を立つる以上は、必ず其の所居の處たる報土を立てざるべからずといへるも、宗輪論の此の文は果して報身を言ひ顯はせるものなりや否や。更に一段の考察を要すべし。氏は大衆部に於ては丈六應身の外に、無量無限の實體卽ち報身ありと立つるのみならず、四無色界が空無邊處等の四無爲を所依の理體となすが如く、擇滅無爲を所依の理體として、佛陀微妙の身體(卽ち報身)を生ずるの意に非ざるかを疑へり。若し此の說に從はゞ、大衆部の所立の中に既に早く法報應三身の說を有するが如く見ゆるも、こは恐らくは後世の成立的敎義を以て原始的混沌の思想を解剖せし結果なるべし。色身無邊の說は報身に似たり、擇滅無爲は法身と其の義相近かし。後世の三身說は、必ず此の邊に胚胎せしこと敢て疑ふを要せざるべしと雖も、然れども佛滅二百

年未滿に分裂せし大衆等の四部の本宗同義に、既に報身若くは法報應三身說の唱道せられたりといふ如きは、予輩の信ずるに難しとする所なり。且つや報身は必ず報土に居せざるべからずといへる如き、亦卽ち後世の思想に非ざるなきか。但だ大衆部が佛陀を以て丈六灰滅のものとなさずして、之を超人間的存在と說破したる思想が、展轉發達して遂に阿彌陀佛を產出する起源をなしたりといふは、蓋し動かすべからざる推論ならん。されど是のみにては固より完全の說明となす能はず。如何にして釋迦に就ての佛身論が、轉じて彌陀を生ずるに至りしか。又其の佛身論が如何にして轉じて極樂淨土を生ずるに至りしか。他に誘因はなきか。若し之れあらば、そは果して何物なるか。其の成立の年代は如何。敎義の變遷歷程は如何。此等の諸問題は、他日博士の高見を聞かんことを希望する所なり。

又博士は大衆部を以て中天竺佛敎となすが故に、隨て淨土往生を中印の思想となし、之に對して上座部を北天竺佛敎となして、兜率往生を同地方の產物なりといへり。上座、大衆の二部を地理的に大別すれば、卽ち是の如くなるべしと雖も、彌勒と彌陀との二種の思想が、必ずしも中北兩印に個々に發生せしものなりや否や、聊か疑

なき能はず。說の如く無著は夙に彌勒信仰を其の頭腦中に有したり。されど、こは恐らくは彼れが北天竺に生れたるが故にはあらざるべし。何となれば、世親は其の肉弟にして同じ北天竺に生れながら、無量壽經優婆提舍を作りて彌陀に歸命したればなり。若し世親は後に中印に來りて其の地方的佛敎を宣揚したるが故に、淨土往生を唱道するは固より其の所なりといはゞ、無著も亦夙に中印に到りたるに、何を以て彼れは西方を願求せざりしや。若し無著は始終北天竺佛敎を信奉し、世親は中北兩印を兼ねたるに由ると言はんか、是れ或は然るべし。然れども予輩の見る所を以てすれば、世親の無量壽經優婆提舍なるものは、所謂北天竺佛敎の精髓たる攝大乘論十八圓淨の說より脫化したるものなりと想像するを以て、彼れが往生淨土の思想は、寧ろ北印佛敎より導かれたるには非ざるかを疑はんと欲するなり。要するに猶ほ幾多の材料を提供するにあらざれば、氏の所說は恐らくは定論となすに足らざるべし。

アイテル氏の說に依れば、阿彌陀佛の思想は元と印度に發生せしものに非ずして、卽ち波斯摩尼敎の思想たり。南方諸國に傳播せざりし事實を以て之を見ば摩尼敎

の思想が迦濕彌羅及び尼波羅の佛教に浸漸して、遂に後世の淨土教義を產出するに至りたるならんといへり。蓋し氏の論據とも稱すべきものは、千佛名經中に彌陀の名號あり。然るに此の經は、波斯摩尼教の聖典たるツアラシトラ一千名經に模作せしものなるを以て、彌陀思想は同地方の輸入なるを斷言し得べしとなすに在り。然れども是れ言ふに足らざるの論なり。何となれば、若し說の如く果して千佛名經は波斯の一千名經に模作せしものとするも、こは唯だ形式の模倣に過ぎざるべく、隨て其の事實が毫も彌陀思想の波斯輸入を證明するに足らざればなり。加之、千佛名經の成立は果して何年代に在るべきや。無量壽經の成立と其の前後如何。思ふに釋迦一佛に對する信仰が、轉じて彌陀等の數佛を生じ、後更に展轉して一千若くは數千の多佛崇拜を生ずるに至るべきは、乃ち思想開展の當然の徑路なるを以て、予輩は千佛名經の成立が無量壽經の後に在るべきこと多辯を要せざるべしと信ずるなり。若し然らば彼の經中に阿彌陀佛の名號を存するも、素より之を以て彌陀思想の原本的發源となすに足らず。隨て波斯輸入の說は、其の根據を失へりと謂はざるを得ず。

但だアイテル氏が、彌陀崇拜は北方迦濕彌羅及び尼波羅地方に於て成立せりといへるは、聊か注意を要すべし。松本博士も、極樂竝に彌陀の思想が西北印度に於て成りしものたるは爭ふべからざる事實なりといへり。是れ前田博士の所謂淨土往生を中天竺佛敎なりといへるものと相容れざる所なり。されど兩者とも史的事實を擧げて其の說を作すに非ず、概然論にして殆ど想像に過ぎざるの觀あり。予輩は其の孰れにも肯定的贊同を表する能はずと雖も、淨土敎傳通の史實を精査する時は、寧ろアイテル氏の所見の比較的眞に近かゝるべきを信ずるなり。試みに二三の事實をあげて之を論ぜん。

起信論が迦膩色迦王時代に生存せし馬鳴の著作なりや否やは、今尙ほ疑問の中に在りといへども、姑く舊來の說の如く之を馬鳴の著作とせば、此の書は彼れが北印に移りし後、起稿せしことは恐らく事實ならん。若し然らば專念彌陀の敎義は初めて記載として北印に現はれたるものと謂はざるを得ず。世親の無量壽經優婆提舍が北印の思想と見られ得べきことは、前に述ぶる所の如し。若し夫れ翻經三藏の生國に就て之を撿する時は、更に有力の論證を得べし。開元錄に依れば、安世高は無量

壽經の第一譯を出だすといへり。然るに道安錄、僧祐錄等に此の事を記せざれば、予輩は其の信否を疑ふ者なりと雖も、若し姑く舊說に從ひて世高の出だす所とせば、彼れは實に印度の西北境外なる安息國の產なり。般舟三昧經及び無量壽經の第二譯を出だせる支婁迦讖、同第三譯を出だせる支謙、同第六譯、竝に般舟經、觀音授記經、及び悲華經を出だせる竺法護は俱に月支國の產なり。無量壽經の第四譯を出だせる康僧鎧は康居國の人にして、第五譯の帛延、第七譯の竺法力、觀經初譯の畺良耶舍は竝に皆西域の出なり。羅什亦龜茲より來りて阿彌陀經の初譯を出だせる等の事實に徵するに、早き淨土經典の翻譯三藏は、率ね印度境外の西北方の地に產せしことを見るべし。況や無量壽經の第十譯及び觀經の第二譯を出だせる曇摩蜜多は、罽賓(卽ち迦濕彌羅)より來り、無量壽經優婆提舍を傳譯し、加之曇鸞に長生不死の法として觀經を授けたる菩提流支は北印度より到り、賢護經を譯出せし闍那崛多は犍陀羅國の產なるを見るに於ては、北印地方が彌陀思想に少からざる關係を有するを知るべきに非ずや。素より西來の三藏なる者は、幾多の邦國を巡歷して梵經を蒐集し來りしものなるが故に、其の譯本の總てを必ずしも悉く生國より齎らせるものと見るは不可なり。されど之に由りて生國と其の譯本と些の關係だもなしと言はゞ、更に大に不可なり。是の故に、予輩は彌陀思想の起源及び其の變遷歷程を考ふるには、是非とも譯經三藏の生國竝に其の翻譯の年時を精査せざるべからざるを公言せんと欲するなり。尙一個の旁證として引用すべきは、慈愍三藏が北印度犍陀羅國の山中に於て、觀音より往生極樂の法を聞けりといへること是なり。此の記事は慈愍三藏が、主觀上に偶〻感得せし所のものを錄せしに過ぎずと雖も、而かも之に依りて當時犍陀羅地方に彌陀崇拜の流行しつゝありしことを推知する必ずしも不可ならず。近代梵文無量壽經が尼波羅國に於て發見せられたる事實も、亦淨土教義が北方印度に存留せし一例と見ることを得べし。然れども彌陀思想の發源地なるものは、其の先決問題たる彌陀思想そのものゝ發源を探究するに非ざれば、固より決定する能はざるは論を要せず。後世の傳通が縱ひ印度の西北地方に盛んなりしにせよ、予輩は之のみを以て直に彌陀思想が西北印度に發源せりとまで輕信することを能はず。但だ彌陀思想そのものゝ發源を究明せんとするに當りて、自ら上に掲ぐる所の事實が、幾多の暗示を與ふるものなることを茲に一言するに過ぎざ

るのみ。

三

凡そ彌陀思想の發源を探究するには、自ら內外兩面の觀察あるべし。內面の觀察とは、佛敎の敎義が時代を追ふて變遷發達せし事實より推測して、其の發源の果して那邊に在るべきかを觀察するをいひ、外面の觀察とは、當時印度に於ける一般の宗敎狀態より推測して、斯かる淨土往生てふ思想が、如何に發生せざるべからざりしかを觀察するをいふ。若し此の內外兩面の觀察にして遺漏なからんか、彌陀思想の發源は自ら明らかなるを得べきは勿論なりと雖も、前にもいへる如く印度の宗敎史は暗黑にして、其の眞相を捉ふること頗る難く、特に佛滅數百年間は大乘敎に關する史實全く缺乏して、唯だ想像を運らすの外、如何なる斷案をも適確に下す能はざるは、亦止むを得ざる所なりと謂ふべし。予輩は彌陀思想の起源に關して、多少の時日を費し之が研究を試みたりと雖も、實に茫洋として其の端を得るに難く、若干の書冊を讀破し沙中の金を拾ふが如くして、而かも獲たる所は左の管見に過ぎず。慚愧せざるべけんや。

試みに佛敎敎義の變遷發達せる史的事實に就て、內面の觀察を下さんか。釋尊が過去諸佛の嘗て此の土に出現せしことを說かれたるは、恐らく疑ふべからざる事實ならん。四阿含經を始め、諸律等に、毘婆尸佛等の七佛を列ねたるもの五三にして止まらず。而かも其の中の第七は卽釋尊なれば、佛陀は自己以前に既に自己の如き六佛の世に出現せしことを認められたる者と謂はざるを得ず。既に斯く自己以前に自己の如き佛陀の出世を認められたる以上は、隨て自己以後に亦自己の如き佛陀の出世を認めらるべきは必然の論理なり。されば四阿含等の中に處々に當來彌勒出世の事を記載せられたり。其の出現の時刼等は設ひ後世の附加とするも、彌勒成佛の信仰は、釋尊の當時に既に成立せるものと見て敢て不可なからん。是の如く過去七佛竝に當來彌勒出現に關する大體の所說は、思ふに釋尊の直話にかゝるものにして、佛敎に於ける佛陀論の基礎と云ふことを得べし。

然るに有る時期を經て、斯の佛陀出現に關する思想は漸次に轉進せり。卽ち增一阿含等に、過去世に寶藏佛、錠光佛等の出世せしことを記載せり。是れ過去七佛以外なり。同經第四十五に、當來彌勒出現の後、更に師子應佛、承柔順佛、光焰佛、無垢佛、及び寶

光佛等の相次で出世すべきことを說けり。智度論第四に、小乘敎徒は十方佛あるを信せざれども、唯過去釋迦文尼、拘陣若等の一百佛、未來彌勒等の五百佛あることを信ずといへり。又增一阿含、雜阿含等に、處々に過去世佛無量恆河沙數の如く、未來世佛亦無量恆河沙數の如しと記載せり。惟ふに過去に既に佛ありと謂はゞ、過去世無限なり、如何ぞ六佛七佛に局るべけんや。未來に既に佛ありと謂はゞ、未來世亦實に無限なり、如何ぞ彌勒一佛の出世に止まらんや。されば隨て過去佛無量恆沙、未來佛亦無量恆沙の思想を生出すべきは、また必然の論理なり。

智度論第三十八に、是の一劫中に千佛興ることあり、諸天歡喜するが故に名けて跋陀劫 Bhadrakalpa と爲すといへり。此跋陀劫卽ち賢劫なる文字は、四阿含の中に既に有り。加之、彼の經の中に、過去七佛中の第四拘留孫已下を卽ち此の賢劫中の出世と說ける所稍〻多しと雖も、未だ其の中に於て千佛相紹いで出現すと云はず。西晉竺法護所譯の賢劫經を執て之を見るに、賢劫千佛の名號、及び其興立竝に發心の相を詳說せり。千佛とは拘留孫已下の過去の四佛を始めとし、向きに擧げたる增一阿含第四十五に出す所の彌勒以下の數佛を次第に列記し、樓至に終る。梁代失譯の三千佛名經には、見在賢劫千佛の外に、更に過去莊嚴劫千佛、未來星宿劫千佛の名號を逐一列擧せり。此に三世といふは世界の成壞に就て論ずるなり。今日見在の世界に成住壞空あり、今は住劫二十中劫中の第九劫なり。此世界の未だ有らざる以前に嘗て世界あり、是れ過去莊嚴劫なり。此世界の既に壞せる以後に亦世界あり、是れ未來星宿劫なり。又賢劫經第八に依るに、賢劫千佛出現の後に大名稱劫あり、其中に又千佛出現す。大名稱劫の後に喩星宿劫あり、八萬佛出現す。喩星宿劫の後に重淸淨劫あり、其の中に亦八萬四千佛出現すと。此の如く過去未來に互りて漸次に多佛の出現を豫想し、終に極まる所を知らざらんとす。是れ過去七佛當來彌勒出現の原本的思想より、時代を追ふて次第に展轉發達したるものなるは、何人も認め得る所ならん。

蓋し佛陀論發展の徑路を攻究するに、三世多佛論先づ興り、十方多佛論次で出たるが如し。過去七佛(實は六佛)當來彌勒てふ時間的出現の觀念は、前說せる如く、之を原本的思想と見ることを得べし。錠光佛等の信仰も、或は釋尊の當時に既に成立し在りしやも未だ知るべからず。過去及未來に無數の諸佛を豫想するに至りたるは、遙か後世の出來事とするも、七佛已外に多少の過去佛を描出し、彌勒以外に多少の未

來佛を期望したるは、思ふに早き時代に在らん。斯の如く時間的出現の思想は、最初より成立せりと雖も、空間的出現の思想たる十方多佛論は、有る期間を經て後始めて唱出せられたるものゝ如し。四阿含等を撿するに、釋迦一佛の外、同時に多佛の出世あることを說かず。長阿含第十二に依るに、世尊言く、過去の三耶三佛、我れと等し、未來の三耶三佛、我れと等し、現在に二佛出世あらしめんと欲せば、是の處あることなしと。同經第廿四にも、一時に二佛出世せずと說き、中阿含第四十七には、世中に二轉輪王竝治することなし、亦世中に二如來竝出することなしと云へり。是れ蓋し佛敎に於ける佛陀論の原本的思想ならん。然るに智度論第四に、聲聞の人、龍樹に問ふて曰く、師子鼓音王佛、阿彌陀佛等の現在出現のことは摩訶衍經には有り。されど我が法の中には十方佛なく、唯だ過去釋迦文尼等の一百佛、未來彌勒等の五百佛あるのみと。龍樹答て曰く、摩訶衍論の中に種々の因緣を以て三世十方佛を說く。所謂十方世界に老病死嬈怒癡等の諸の苦惱あり、是の故に佛其の國に出づべし。何となれば、經に老病死煩惱なくんば、諸佛は則ち出世せずと說けばなり。復汝等は汝等が尊信せる長阿含經に「稽首去來、現在諸佛、亦復歸命、釋迦文佛」の偈あるを知らん（今の長阿含に此の文見當らず）。既に三世諸佛に稽首し、後別に釋迦文佛に歸命するを以て見るに、聲聞法の中にも現在に餘佛あることを說けるものにあらずや。經に一時に二佛出づることなしと云ふは、一の三千界に就て之を言ふのみ。猶ほ一四天下に一時に二轉輪王出づることなしと雖も、餘の四天下には更に別の轉輪王あるを妨げざるが如しといへり。顯揚聖敎論第二十には、六個の理由を擧げて、一時の間に多如來、世に出現することあるべきを說き、又俱舍論第十二に依れば、小乘の中にも、後には亦多佛出現論を生じたるが如く、卽ち薩婆多諸論師の一佛出現論に對して、有餘部の師は、一界の中には同時に二佛出現することなきも、他界には別に佛あり、同時に出現するを妨げずと云ふを記し、而かも論主世親は十方多佛論に左袒せり。

惟ふに一佛出現論の原初の意味は、南閻浮等の四洲、卽ち一須彌四天下の世界に、釋迦一佛のみ獨り出現して、同時に餘佛竝出することなきを言ふの意なるや殆ど疑を容るべからず。何となれば中阿含第四十七に、佛を一四天下の治者なる轉輪王に比して、一時に竝出することなしといへばなり。其の意、佛の敎化が南閻浮等の四洲に普及して、更に餘佛の出世を借るを要せざるに在り。然るに宇宙に對する考察が

次第に擴大して、一四天下の世界の外に、更に多數の四天下を案出し、千の四天下を合して小千世界、千の小千世界を合して中千世界、千の中千世界を合して大千世界と名け、而して之と同時に此の大千世界卽ち一大三千界を一佛所化の範圍と定むるの說を生じ、而も早き時代の佛敎徒は卽之に滿足したりと雖も、空想は終に底極する所を知らず。有る時期に及んでは、斯かる廣大の三千界も亦此の宇宙を充たすに足らず、卽此の宇宙の間には、斯かる三千世界が無數に存在すとの觀念を生ずるに至れり。是に於てか隨て十方多佛論を生じ、無量恆沙の諸佛は、現在に於て十方無量無數不可思議の世界に出現して、同時に說法度生しつゝありとの信仰を抱くに至るべきは、亦必然の結果なりと云ふべし。

斯くして十方多佛論は發生せり、無數の世界に無數の諸佛ありとの觀念は成立せり。試に大藏經に就て之を檢するに現在出現の諸佛、及其國土の相狀を說けるもの甚だ多し。無量壽經には、西方極樂世界に阿彌陀佛現在せりと說き、阿閦佛國經には、東方妙喜世界に阿閦佛現在せりと說き、受持七佛名號經には東方七佛、八吉祥經等には東方八佛、十吉祥經には東方十佛、藥師本願經には、東方淨瑠璃世界に藥師瑠璃光佛現在說法せりと記し、金光明、觀佛三昧等の經には、東方阿閦、南方寶相、西方無量壽、北方微妙聲の四方四佛を擧げ、稱揚諸佛功德經には、東南西北及上方に百數十佛現在せりと說き、阿彌陀經、大般若、寶網經等には六方、法華經には八方、隨願往生經、滅十方冥經、稱讚如來功德神呪經、不思議功德諸佛所護念經、寶月童子問法經、稱讚淨土經、佛名經、十二佛名神呪校量功德經、五千五百佛名經等の諸經には、十方現在の諸佛を列ぬ。其の數實に衆多にして、今一々に之を列擧すべからず。是の如く空間出現論は、時代を追ふて次第に發展し、諸種の崇拜供養雜然として興隆せり。蓋し以ふに是の如き多佛の思想は、決して一朝にして成立するものに非ず。必ずや外間の事情と相待つて、幾多の年月の間に漸次其の數を增加せし者ならん。若し然らば、其の中に於て自ら史的發達の徑路歷程なかるべからず。試に予輩の管見を說かん。

四阿含の中に、釋迦一佛の外、現在の餘佛を說かずとは小乘敎徒の公言する所なり。然るに增一阿含第二十九を見るに、目連、神力を現じて東方七恆河沙佛土に往詣し、奇光如來に面謁して、其の佛の弟子五百人を拉して此の娑婆に來りしことを記載せり。旣に目連が其の佛土に往詣して、親しく彼の如來に面謁せりと云ふ以上は、奇

光佛は現在出現の如來たること言を待たざるべし。若し然らば、阿含中に全く他の現在佛を說かずと謂ふべからず。されど此の一段の記事が、果して原初の阿含に存在せしや否や疑なき能はず。龍樹が現在多佛の證として、前掲の如く長阿含の偈を出だすも、而かも一言此の增一の記事に及ばざるのみならず、現今南方所傳のパーリ原文の阿含經にも此文を載せずと云へば、早き時代の阿含には、此の一段の文字を缺如せしやも未だ知るべからざればなり。若し然らば十方多佛論の第一歩は、果して之を何處に求むべきか。

印度の歷史は漠として捉ふべらず。今支那翻譯の年代より之を推測するに、阿閦、彌陀二佛の觀念は、比較的早き時代に成立せしものゝ如し。支那翻經の嚆矢は、迦葉摩騰、竺法蘭の二人にして、其の入洛は西曆紀元六十七年に在り。それより八十年を經て、支婁迦讖漢土に來る。之を譯經三藏第二次の渡來となす。而るに支讖は阿閦佛國經及平等覺經を出せり。平等覺經は、彌陀及其の淨土たる極樂を詳說し、阿閦佛國經は、阿閦及其の淨土たる妙喜世界を委悉せり。是に依て彌陀竝に阿閦に關する思想は、西曆紀元第二世紀の半以前に既に成立せしことを知るべし。又梁高僧傳第一等

に、迦葉摩騰は天竺に在りて金光明經を講せしことを載せり。然るに此の經の中には、東方阿閦、西方無量壽の說あり。又同傳第一、歷代三寶紀第四等に依るに、竺法蘭は十住斷結經を譯すといへり。此の經今傳はらずと雖も、開元錄第一に記する所によれば、姚秦竺佛念所譯の十住斷結經と同本なりしが如し。之に由りて今試に竺佛念の經を執りて之を讀むに、其の中に西方無量壽世界の淸淨なることを說き、又此の經の對告衆たる最勝菩薩が、此の間より沒して無怒佛土に生ずべきことを說けり。無怒佛とは阿閦 Akshobhya の翻名なり、又無動と譯す。若し是の如く其の中に、阿閦、彌陀の二佛を說き、而かも此の經が竺法蘭の出だす所と同本なりとせば、摩騰が金光明經を講せりといふ傳說に併せ考へ、阿閦、彌陀二佛の思想が、早くも西曆紀元第一世紀半以前に既に存立せしことを想像するを得べし。又前田博士の大乘佛敎史論には、婆沙論第七十九に「佛以一音演說法、衆生隨類各得解」の頌を擧げ、而かも此の頌は、三藏に非ざれば必ずしも通ずるを須いずと言ふを引いて、現に此の頌を有しつゝある維摩經が、婆沙編纂已前既に世に在りしことを論證せり。是れ一種の考案なり。されど一音說法の文は獨り維摩に止まらず、亦涅槃經第十に出たり。加之、異部宗輪論

に、大衆部に在りては佛一音を以て一切を說くと明かすも、薩婆多部に在りては之を許さゞることを記せり。若し然らば、婆沙の所謂非三藏の頌は、大衆部敎徒の所誦の文に過ぎざりしやも未だ知るべからず。況や羅什及玄奘の譯せる維摩經には、則ち此の頌ありといへども、支謙が出だせる最古の維摩詰經には適〻之れなきに於ておや。是の故に前田氏の所論は薄弱なるを免れずと雖も、今姑く多少の道理を存するか故に、試に其の說を採用せんか、若し然る時は、彼の維摩經には阿閦佛國及び阿彌陀佛を叙說するのみならず、其の主人公たる維摩其の人は、實に阿閦の淨土たる妙喜世界より此土に來生せしものなることを說けり。且つ其の經の說述を見るに淨土に關するもの多く、妙喜世界を叙する處の如き、全く阿閦佛國經の說と相同じ。思ふに此の經以前に、既に無量壽、阿閦佛國等の經成立し在りしならん。若し說の如く此の維摩經が、婆沙編纂以前に實に世に在りたりとせば、佛滅三四百年の印度の佛敎界は、淨土に關する議論方に酣にして、盛に十方現在の諸佛を描出しつゝありしことを想見するを得べし。

惟ふに阿閦、彌陀二佛の思想は、早き時代より成立して、一般の崇拜供養する所となりたるは粗〻事實ならん。此の二佛が、多くの大乘經中に引說せられたるのみならず、彌陀に關する幾多の本生譚は、多くは阿閦と其の因緣を交結せざるはなし。後世の祕密經中に、四方四佛、又は五方五佛の說を生せり。而かも其の中、東方阿閦、西方彌陀の觀念が、自ら中心思想となりたるに徵するも、亦此の二佛が久しく一般崇拜の對象となりしことを見るを得べし。予輩は此の二佛に關して、尙多くの材料を有す。若し委細に之を列擧せば、或は此の二佛が、他の諸佛の崇拜に先だちたることを充分に論證し得ん。されど今一一に之を細論すべからず。

四

佛陀論發展の徑路は、前文に於て略〻之を述べたるが如く、去來多佛論卽ち時間出現論先づ起り、現在多佛論卽ち空間出現論次で出でたるものならん。而して此の二種の佛陀論は、各特殊の發展をなし、去來多佛論は、過去七佛當來彌勒の原本的思想より、延ゐて過去佛無量恆沙、未來佛亦無量恆沙の觀念を生出するに至り、現在多佛論は、釋迦一佛の原本的思想より、宇宙に對する考察の進步發達すると共に、遂に現在佛無量恆沙の觀念を發生するに至れり。斯くして三世十方に各々無量恆沙の諸

佛の出現を豫想し、佛敎に於ける佛陀論は方に完成の域に達せり。中に就て阿彌陀佛は現在出現の佛にして、釋迦が此の娑婆世界に住せしが如く、居を西方極樂世界に、占めて、極めて長壽を有し(原初の阿彌陀佛は永久不變のものに非ずして、或る長年月の後には終に涅槃するものと想像されたるならん)、說法度生しつゝありと信ぜられたるものなるを以て、其の思想の成立は、去來多佛論に後るゝこと言を俟たず。されど予輩は阿彌陀佛なる觀念は、阿閦佛と共に比較的早き時代に成立して、恐らくは現在多佛論の劈頭に唱出せられたるものならんと想像する者なり。乞ふ略してその理由を說かん。

大藏經に就て之を檢するに、他方諸佛及び其の淨土を說けるの經實に多々なりと雖も、概ね唯その名を列ぬるに非ざれば、少しく其の相狀を明すに過ぎず。委細に淨土の莊嚴竝に成佛の緣由等を記述せるものは、予輩の知る所を以てすれば、藥師、文殊、觀音、彌陀、阿閦及び彌勒等の數佛を出でざるが如し。今此等の諸佛を明せる經を執りて之を比較するに、彷彿として其等經典の成立の前後を想像するに足るものあるを覺ゆ。蓋し釋迦既に沒し遺弟交ゝ逝いて、佛滅一二世紀の敎團は轉た落寞の感に堪えざるの時、一方に於ては、釋迦の法身不滅論を生ずると同時に、他方に於ては、釋迦の候補者たる彌勒が、八相の化儀に准じて、現に兜率天に住すべきことを信ずるの說起り、遂に其處に往生して彌勒に値遇せんことを希ふ者あるに至るべきは、思ふに自然の徑路ならん。故に予輩は兜率往生は淨土往生に先ちて發したる思想にして、亦此の思想は現在多佛論の由漸をなしたるものならんと推斷する者なり。兜率天國は第二の佛陀たる彌勒の現住所として、佛滅一二世紀間の佛敎徒をして、渴仰措く能はざらしめたるべきが、幾くもなくして、敎團の中に於て現在多佛論を生じ、釋迦は沒せりと雖も、他方の世界には、釋迦の如き佛陀が現に出現して說法度生しつゝありとの信仰流行するに及で、玆に淨土往生の端を啓きたるものならん。然るに淨土往生の說甚だ多し。中に就き、阿閦佛の觀念先づ發し、次で彌陀の崇拜起り、文殊、觀音、藥師等は、此の二佛の思想成立の後、亦相紹いで生じたるものならんと想像すべき理あり。

西晉竺法護所譯の文殊師利佛土嚴淨經には、文殊當來成佛の緣由幷に其の淨土の相を委說せり(大寶積經文殊師利授記會と同本)。今此の經を執りて之を讀むに、其の

中に阿閦、彌陀の二佛を引說すること二三にして止まらず。特に文殊の淨土と彌陀の淨土とを比較して、阿彌陀佛刹の莊嚴は一滴水の如く、普見如來卽ち文殊佛刹の莊嚴は大海水の如しといひ、又文殊佛刹の菩薩衆は摩竭國量一斛の油麻の如く、阿彌陀佛國の聲聞菩薩は一粒の如しといへり。是れ豈に文殊の淨土なるものは、明に彌陀淨土の後に成立せしことを證明するものに非ずや。況や此の經編纂の體裁は、頗る平等覺經(卽無量壽經の異譯)に酷似するのみならず、其の翻譯の年次も、亦百數十年の後に在るに於ておや。是の故に予輩は文殊師利佛土嚴淨經なるものは、彌陀崇拜の敎義成立後、更に一段の工夫を用ひて編纂せられたるものならんと想像する者なり。觀音授記經の中に記載せる觀音の淨土なるものが、彌陀思想成立の後に起りたることは多言を要せずして明かなり。何となれば、釋迦の候補として彌勒の豫想せられし如く、觀音は實に彌陀の候補として豫想せられたる者なるが故に、其の淨土及び成佛等の所說は、素より彌陀の敎義成立以後に在らざるを得ざればなり。加之、彼の經の中に、阿彌陀佛國所有の嚴淨の事は毛端の水の如く、金光師子遊戯佛國は大海の水の如く、而して觀音の淨土莊嚴の事は實に亦金光師子遊戯佛國に勝さること百億萬倍なりといへり。是れ豈に富永仲基の所謂加上說なるものに非ざらんや。但し觀音補處の事は初めて平等覺經に出づ。次で西晉竺法護は光世音授記經を翻じ、宋曇無竭、再び觀音授記經を出だす。又當時北凉曇無讖は悲華經十卷を翻じて、其の中に彌陀の本生を轉輪聖王となし、王に千子あり、觀音は卽其の長子にして當來彌陀の處を補ふて成佛すべきことを叙說せり。思ふに悲華經の所說は極めて大仕掛にして、獨り觀音、勢至のみならず、阿閦、寶相、文殊、普賢等を以て亦皆彌陀因地の子となし、彌陀を以て殆ど諸佛淨土の根元となせるものゝ如し。是れ卽ち大乘入楞伽經第六の十方諸刹土所有の法報佛化身及び變化は、皆無量壽極樂界中より出づといへる說と其の軌を一にするものにして、頗る留意すべき問題なりと雖も、而も此等は恐らくは遙か後代に成立せし思想ならん。予輩の想像する所に依れば、觀音の崇拜は最初獨立的に發生せしも、或る時代より彌陀と關係を有し、遂に其の候補者として勢至と共に其の左右に侍するに至りたるものならん。又觀音が補陀落山を以て其の居所となし、佛敎中の愛の神として現世の疾苦を治すといふが如きは、文殊の五臺山淨土の說と同く、殆ど之を支那的思想と見るを得べし。藥師本願

經等に記載せる藥師瑠璃光佛の思想も、亦彌陀教義成立の後に出でたること言を俟たず。何となれば、彼の經編纂の體裁は頗る無量壽經に似同するのみならず、其の中には、若し西方極樂世界に生せんと願ずる者にして、一たび藥師如來の名號を聞かば、命終の時、八菩薩をして其の道路を指示し、彼れをして極樂界中に生せしめんと誓ふの文あるを見ば、此の經が無量壽經に後れて編纂せられたること極めて分明なればなり。蓋し藥師經を始めて翻傳したるものは、東晉帛尸梨蜜多羅にして、平等覺經の渡來に後るゝ百六七十年の後に在り。次で隋達磨笈多、唐玄奘及び義淨は各々一本を譯出せり。然るに前の三本は、藥師因地の發願として唯だ十二願を列ぬるに過ぎざるも、義淨の經には、七佛を出だして總じて四十四願を擧げたり。之に依りて亦藥師一佛の思想の變遷を見ることを得べし。そは兎に角、藥師、觀音、文殊等の淨土が、彌陀淨土の教義に後れて成立したるものなることは、略ゝ前說によりて之を解するを得ん。加之、一概して之を言はゞ、大藏中、彌陀若くは極樂の事を散說せる二百數十部の經は、悉く彌陀思想成立の後に編纂せられたるものと見て敢て不可なからん。前田博士は、淨土往生の思想は華嚴經に淵源せりと言はると雖も、予輩は彼の舊華嚴經第三十一壽命品に、娑婆の一劫を極樂世界の一日一夜となし、極樂の一劫を聖服幢世界の一日一夜となし、乃至百萬阿僧祇世界の最後世界の一劫を勝蓮華世界賢首佛刹の一日一夜となすの文を讀みて、恐らくはこは、彌陀思想成立の後、數多の年月を經、淨土に關する教義が幾變遷をなしたるの時に於て、方に編纂せられたる經典ならざるなきかを疑はんと欲するなり。入法界品の中には、彌陀を引說せる所少からず。況や善財童子、五十三知識を訪ふて最後に普賢に至るに、彼れ示すに西方往生の事を以てするを見るに於ては、彼の品の結歸は、彌陀を指導するに在るやも未だ知るべからず。若し然らば華嚴と彌陀思想とは素より多大の關係を有すべきも、而れども予輩は之を以て淨土往生の淵源と見んよりは、寧ろ彌陀教義成立後に於ける一種の西方鼓吹說と見るを允當とすと考ふるなり。

多數の諸佛淨土の說は、恐らくは皆彌陀思想成立以後に發生したるものと見て可ならん。唯だ阿閦佛國の思想のみは、彌陀に先ちて發生したるに非ざるなきかを疑ふべきものあり。前文にもいへる如く、此の二佛の淨土を詳說せる阿閦佛國經竝に平等覺經は、西曆紀元第二世紀の半以前に既に支那に翻譯せられ、加之、此の二佛の

記事を有せる金光明、十住斷結、維摩等の數經が、西暦紀元第一世紀の半以前に既に世に在りたる證左ある以上、阿閦及び彌陀の觀念が比較的早き時代に成立しありしことを知るに足るべし。今阿閦佛國經を執りて之を無量壽經の異譯なる平等覺經に比較するに、說述の體裁に於て、二者殆ど相同きものあるが如し。固より表面の記事に就ては其の前後を判定すべき何等の資料をも得ずといへども、然れども深く其の內容を考察する時は、阿閦經の思想は比較的原始的にして、平等覺經は頗る整成に近きものあるを覺ゆ。詳細の比較は之を他日に讓り、今は唯一二の要點に就て之を論ぜんに、平等覺經には初に菩薩多數の聽衆を列ねたるも、阿閦經には唯聲聞を出だして菩薩を出ださず。是れ些事に類するが如しと雖も、阿含等に菩薩を列ねざるを見る時は、阿閦經の編纂が古き時代に在りしことを想像するに足るべし。又平等覺經には、具さに彌陀の因願二十四種を列ねたるも、阿閦經には唯處々に阿閦の要誓を散說せるのみにして、之を一段に集記せず。以て其の體裁の純朴なるを見るを得べし。然れども平等覺經及無量壽經に顯はれたる因願果成の思想は、自ら皆阿閦經の中に蘊畜せられたるを覺ゆ。阿閦佛國の中には、三惡道あることなく、一切皆善事を行じ、其の地平正にして山陵溪谷なく、不寒不熱にして微風あり、世間の音樂は彼の國の樹木の音聲に如かず、浴池あり八味の水を湛え、蓮華を以て其の國を莊嚴す。阿閦佛の光明は三千大千世界を照らして罣礙する所なく、聲聞の弟子無數にして、集會して其の說法を聞き、諸菩薩衆は佛の威神を承けて他方諸佛を供養し、又彼の佛の名を聞く者は阿閦佛刹に生ずることを得、彼の經を諷誦する者は、命終の時、阿閦佛其の人を念じて魔をして便を得せしめざる等、及び彼の佛涅槃の後、衆香手、金色蓮華の二菩薩相次で其の處を補ふて成佛するが如き、概ね皆平等覺經の所說と殊ならざるを見るべし。但だ中に於て、平等覺經には、彌陀の淨土には女人あることなく一切化生すと說けるに、阿閦經には女人ありて卽ち姙產の事を行ふと記し、又彌陀佛國は衣服自然にして意に隨つて卽ち得るに、阿閦佛刹は衣服は樹木より之を取つて用て着るといふが如き、阿閦の思想の如何に素朴にして現實的に、彌陀の思想の如何に巧微にして理想的なるかを察するを得ん。加之、阿閦佛國經の中には、阿閦の授記及び其の因行を明かすに、一々に之を釋迦の授記及其の因行と對比せるのみならず、彼の佛國中に國王なきを叙して、之を轉單越の國王なきに

比せり。然るに平等覺經の中には、釋迦及薺單越の對比を擧げず、却て之を諸佛の淨土に比して、彌陀佛國は無央數佛國中の雄國なり、最快明好甚樂無極の廣大佛國なり等と讃揚するを見ば、阿閦經の思想は、釋迦及薺單越に對して興り、平等覺經の思想は、諸佛(實は阿閦?)に對して起りたるものに非ざるなきかを疑ふに足るものあらん。薺單越卽ち北俱盧洲に關しては、松本博士の極樂淨土論に既に細說あり。予輩は婆羅門の理想國として、氏が此の北俱盧洲を摘示したるを謝す。されど之を以て直に極樂淨土の淵源となすに至ては、未だ輙かに左袒すること能はざるなり。何となれば北俱盧洲と極樂淨土との間には、餘まりに大なる溝洫あるを信ずればなり。

既に是の如く阿閦經の記事は、平等覺經に比して頗る原始的なるものあり。予輩は阿閦なる思想が、如何にして彌陀てふ觀念を發生すべき由漸をなしたるやを知らず。故に必ずしも阿閦を以て彌陀思想の發源と斷定する者にあらずと雖も、而かも阿閦佛國經が平等覺經に先つて編纂せられ、平等覺經が阿閦佛國經に後れて世に出でたる者なるを想像すべき理由あるを信せんと欲するなり。蓋し諸佛淨土の說

に就て討究するに、女人及び二乘の有無を以て其の優劣殿最を判定し得べきが如し。言ふ迄もなく釋迦の出生したる娑婆世界は穢土なり、故に其の世界には三惡道あり、不善事あり、魔あり、外道あり、好醜あり、疾病あり、山陵起伏あり、現前見る所の如し。淨土と稱せらるゝものに、總て此等の缺陷を有せずとは、諸說の殆ど一致する所なるも、而かも女人及二乘に至ては其の有無大に同からず。彌勒の住所たる兜率天には無數の天女あり、阿閦の淨土たる妙喜世界には女人及二乘あり。然るに彌陀の淨土たる極樂世界には、女人及其の名字だもあることなく、一切化生すといへり。唯だ此の一事を以てするも、彌陀の淨土は、彌勒若くは阿閦の佛國より優勝なることを知るべく、隨て其の成立年代の前後を想像するに足るものあらん。無量壽等の三經諸譯、竝に文殊師利佛土嚴淨經卷下、智度論第三十四、十住毘婆沙論第五等に依るに、彌陀の淨土には二乘あり。然るに悲華經第三、如來智印經、往生論等に依れば、彼の國には二乘あることなく、純ら菩薩のみ住すといへり。是れ豈に彌陀淨土の所說に關する一種の變遷と見らるべきものに非ずや。文殊の淨土には女人は勿論、二乘も亦有ることなく、觀音の淨土も亦聲聞緣覺の名あることなく、純諸菩薩其の國に充滿す

といふを以て見れば、淨土の住民に關する觀念が、時を追ふて次第に發達したることを認むるを得べく、之に依りて亦彷佛として各淨土成立の前後を想像するに足るものあるを覺えずんばあらざるなり。蓋し諸佛の身土に法報應化の別を論ずるの說今古甚だ盛なり。然れどもこは遙か後代の學說にして、思想發達の史實に盲目なる者は、斯かる複雜なる諸種の淨土論が、一時に發作したる如く考ふべきも、そは固より取るに足らざる陋見なり。

五

前來の所論によりて粗〻佛教中に顯はれたる主なる諸佛淨土の成立の前後を推知するに足るものあらん。然るに唯其の成立の前後を推知すといふと雖も、而かも問題は猶依然として殘れり。彌陀思想の發源は果して那邊に在るべきかとふ疑案卽ち是なり。

素より佛教の原初の思想たる苦惱解脫なる觀念、卽ち或る意味に於ての厭世的觀念が、往生淨土の教義の根元をなしたるや疑を容れず。又印度在來の思想たる輪廻轉生の觀念が、其の基本的土臺をなしたることも言を要せざる所なり。されど是等は遠因に過ぎず。若し試に其の近因を求めば如何。予輩は恐くは生天の思想なるものが、淨土往生の教義の興起せし近因ならざるなきかを疑はんと欲するなり。蓋し生天の思想は、殆ど各國民に通有にして、特に印度人民は上古より夙に其の考を有し、釋尊の當時及其以前に在りて盛に流行せしもの〻如し。天國が地上の國土よりも樂しく且莊嚴なりといへることは、何れの國民にも一般の信仰として成立する所なり。惟ふに此の信仰一轉せば、隨て西方極樂の說を生じ來るべきこと敢て想像に難からず。唯だ天國なるものは上方に在り、極樂は西方に在り。如何にして上方の天國が西方極樂の由漸をなしたるべきか。是れ疑問なり。或る學者の說によれば、パーリ語に於ては、過去と譯すべきPubbaなる文字は亦東方と訓じ得べき義あり、未來と譯すべきPacchāなる文字は西方と訓じ得べき義ありと。若し然らば東方出現の阿閦は、その原初の意味に於ては、過去出現の佛陀なることを意味し、西方出現の彌陀は未來の佛陀なることを意味せしやも知るべからず。委しく言へば、彌陀は吾人の死後卽ち吾人の未來に於て遭遇すべき佛陀なることを意味せしやも知るべからず。果して然りとすれば、西方極樂は卽ち吾人が死後に於て生ずべき樂國を意

味するに過ぎずして、必ずしも方位に關するものに非ざるべきが故に、生天の思想と西方往生の思想とは、斯の意味に於て卽ち一致するものありといはざるを得ざる可きか。極樂淨土論には、西方極樂といへることは、太陽が西に沒するより起れる思想にして、卽ち彌陀の教義が太陽神話なることを證明するものなりといへり。これ亦一說なり。予輩といへども絕待に太陽神話說を否認せんとするものにあらず、否な寧ろ印度上古の光明崇拜なる思想が、展轉して、阿彌陀卽無量光てふ觀念を助成するに力ありたるべきを想像するものなり。然れども之あるが爲に直に彌陀を日輪の擬人なりとは速斷するを欲せず。その旨、略して前に述べたるが如し。

予輩が淨土往生の教義を生天思想の一轉化ならんと想像したるには別に多少の理由あり。前文にも論じたる如く、兜率往生は淨土往生に先ちて發したる思想にして、又恐らくは後者は直接前者の爲に誘發せられたるものならんかを疑ふべきものあり。而して其の所謂兜率往生の思想は、言ふ迄もなく印度在來の生天思想に、彌勒てふ觀念を加味したるものに外ならざるが故に、隨て淨土往生は生天思想の一轉化なりといふを得べし。且や增一阿含の中に、處々に十念を修行する者は天に生

することを得べしと說けり。卽ち其の第四十三に、若し人あり、此十法を行せば卽ち天上に生ず、十法とは所謂十念なり。云云。又第三十四に、若し衆生あり、牛を擊る頃の如きだも、信心絕せず十念を修行する者は其福量るべからず、閻浮里地の人を供養するよりも其福更に多しと。又同卷に、阿難、毘羅先に敎へて十念を修行せしむ。彼れ其法を修行し已りて卽日に命終し、四天王中に生ずと云云。之によりて見るに、十念は所謂小乘佛敎中の重要なる修行にして、又卽ち生天の法なることを知るなり。然るに平等覺經、無量壽經等によるに、彌陀の淨土に往生せんと欲する者は、十念を具足すべきことを說けり。此の無量壽經等に說く所の十念に關しては古來異說あり。或は十たび佛を觀念するを十念となすといひ、或は十たび佛名を稱ふるを十念となすといひ、或は大寶積經第九十二彌勒發問經にいふ所の慈心等の十心を起すを十念となすといへり。固より經文には自ら明了の解釋を出さざるが故に、果して何を以て十念と名くるの意なるやは知るべからず。善導等の諸祖は、十念は卽十聲なりといへり。予輩は今善導等の教義を確信し、現に之を遵奉しつゝありと雖も、嘗試に研究の立場より之を考ふる時は、或は此の十念は、增一阿含の所謂十念と同義な

らざるなきかを疑はんと欲するなり。

然るに論者若し無量壽經の十念は、十聲稱佛なり。增一の十念と各別にして全く雷同すべからずと云はんか。予輩も亦有力の反證を有せざるが故に必ずしも其說を固執せじ。然れども今たとひ二者の十念は互に各別にして何等の交涉なしとするも、淨土往生の敎義が、此の比較的原始的なる增一の十念に淺からざる關係を有することは、恐らく否定すべからざる事實ならん。增一の十念とは、念佛、念法、念比丘僧、念天、念戒、念施、念休息、念安般、念身、念死是なり。餘の九は措き、第一の念佛は、卽後世の所謂淨土念佛と殆ど徑庭なきを覺ゆ。增一の廣演品に念佛を解して云く、若し比丘あり、正身正意結跏趺坐、繫念前に在りて他想あることなく、專精に佛を念じ、如來の形を觀じて未だ曾て目を離さず、便ち如來の功德を念ず。云云。是れ豈に淨土家の所謂觀佛三昧の行と同義なるにあらずや。又雜阿含の處々に六念を說けり。六念とは、十念の中の初の六をいふ。雜阿含第二十に、念佛を說いて云く、聖弟子、如來應等正覺の所行の法淨を念ずるが故に、貪欲覺を離れ瞋恚覺を離れ害覺を離るゝと。云云。若し現今の大藏經を以て悉く佛陀釋尊の直說といはゞ則ち止む。苟も史的發達を其間

に認むることを許さば、予輩は阿含の中の生天の行たる念佛、若くは十念等の敎義が、一轉して今日の所謂淨土往生の法門となりたるに非ざるなきかを疑はんと欲するなり。ピール氏が、無量光天を以て阿彌陁(卽無量光)の發源といへるもの、是に於て多少の趣味あるを覺ゆ。素より氏は唯原語の類同を以て此推測を試みしものならんも、而かも念佛が元と生天の行なりしことを併せ考ふる時は、此の無量光天と阿彌陀佛若くは極樂淨土との間に、何等かの交涉ありしやも未だ知るべからざるを以てなり。加之、增一の十念品等に依るに、十念の法を行ずる者は、卽神通を成じ諸の亂想を去り、沙門果を獲て自ら涅槃を致すべしと說き、雜阿含第二十等にも、六念を行ずる者は正しく涅槃に向ふことを記せり。是に依て見るに、十念は必ずしも生天の行に限らず、延いて涅槃に趣向するを得べき行法なるを以て、隨て其間に大乘的成佛を意味する淨土往生の敎義を胚胎するに至るべきは寧ろ自然の徑路ならん。

予輩は前來佛敎々義の變遷發達せる史的事實より推測して、聊か內面的觀察を下しき。次に今少しく當時印度に於ける一般の宗敎狀態に就て外面的觀察を試み、彌

陀崇拜の思想が外間の信仰と何等かの關係を有せざるかを見る所あらんとす。蓋し印度太古の神話たる吠陀中に毘溼拏 Visnu なる神あり。此の神は元と太陽を神格として崇拜するに名けたる別號にして、天上に居り、日光を以て時を正し、天時の進歩を整ふるを業となせるものなりといふ。然るに婆羅門教時代に至るに及で、此の毘溼拏なる神は、一方溼婆 Siva と名くる猛威ある神と相對して、慈悲溫和を代表するに至り、延いて此の二神は、他の主要なる婆羅吸摩 Brahma と三身一體の說を生ずるに至れり。外道小乘涅槃論に、摩醯首羅論師(卽大自在天外道)の說を出して云く、果は是れ那羅延の所作、梵天は是れ因なり。摩醯首羅は一體三分なり、所謂梵天、那羅延、摩醯首羅と。この中、摩醯首羅は卽溼婆にして、佛教の法身佛に當り、那羅延は卽毘溼拏にして應身佛に當り、婆羅吸摩は卽梵天にして化身佛に當るといへり(摩醯首羅論師は摩醯首羅卽大自在天を他の二神の本體となし、梵天外道は梵天を以て、草紐論師は那羅延天を以て、各々他の根元となすが故に、一體三分は互に同じと雖も、本末の配當は自ら異なれる如し)。此の三種現體の說が、果して何の年代に起りたるやは明ならず。或る學者は、之を西曆紀元前一二世紀頃に在りとなして、範を佛教の三身に取りたるものならんといへるも、或る學者は、之を釋尊出世以前の出來事となし、佛教の所謂三身論は之を遠因として發展したるものならんといへり。三種現體說の興起に關しては異說ありと雖も、毘溼拏の崇拜が釋尊の以前に旣に成立しありたるを認むるに於ては、互に一致する所あるが如し。

今試に多少の史實を蒐集して之を考ふるに、此の毘溼拏なる神は、婆羅門教及印度教中に於て慈悲溫和を代表せる主要の神格にして、其の教條は頗る現今の他力淨土教に類似するものあるが如し。後代に及では、溼婆派と共に此の毘溼拏派も亦幾多の分派を生じ、其の中には肉欲放逸を恣まゝにする者も出で來れりと雖も、上世に在りては印度國民の慈悲の本尊として、通俗的崇拜の一般の對象たりしことは疑ふに足らず。固より此の神の觀念に就ての精細なる研究、及其の傳播の地方、竝にその年代等に關して充分の論證を擧ぐるに非ざれば、速斷し易からずといへども、予輩は此の毘溼拏と阿彌陀佛との間に或は何等かの關係を有せざるかを常に疑ひつゝあり。蓋し原始佛教が力行主義にして、唯だ寂滅爲樂の消極的涅槃を目的となし、一般に通俗的趣味に乏しかりしは掩ふべからざる事實なり。之を以て佛陀及

その聖弟子が漸次入滅するに及んで、教團の勢力復た舊の如く盛なる能はず。此の時に當りて一方毗溼拏の信仰外間に流行し、無智の凡俗を驅りて爭ふて其の像前に跪かしめんとする形勢あるを看取し、佛教々團の中に於ても、恐くは其對抗の一策として、茲に他力救濟の教義を唱出するに至りたるものならざるか。

之を要するに、一方佛教々義の內面的發達の形勢が、自ら淨土往生の教義の勃興を促がし、同時に他方外間に於ける毘溼拏の崇拜が教內の團衆を誘發して、茲に彌陀救濟の信條を成立せしめたるにはあらざるか。而して其の信條の基礎となりたるものは、恐らくは原始佛教の經典たる阿含中に含める十念若くは念佛の行法にして、所期の目的は元と生天に在りしも、未來の樂國てふ思想より遂に西方極樂の說を生ずるに至りたるものにはあらざるか。されど是の如きは素より妄斷妄推にして、識者の叱正を被るべきは予輩の豫め期せる所なり。

彌陀思想の起源及其の成立に關して、予輩の今日想像しつゝある所のものは、粗〻上に述ぶるが如し。然るに無量壽經は、言ふ迄もなく彌陀思想成立の際に於て編纂せられたるものにして、縱ひ其の以前に多少の信條ありたりとするも、そは唯斷片に過ぎざるものならん。是故に彌陀思想成立の年代は、卽自ら無量壽經の成立年代を意味するものなりといへども、而かも前來縷述する如く、其の年代は今より殆ど全く之を確定すべからず。若し概然論によりて之を言はゞ、恐らくは佛滅第二三世紀の頃に在らんか。

蓋し彌陀思想一たび成立せりと雖も、而かも時代を經、處を易ふるに隨て、亦多少の變遷を免れざりしもの〻如し。支那に傳譯せる無量壽經に古來十二本ありといへり、中に於て現存の五本を比較するに、頗る變遷の事跡を考ふるに足るものあるを覺ゆ。予輩の思考する所によれば、平等覺經(後漢支婁迦讖譯)の編纂は最も古く、大阿彌陀經(吳支謙譯)之に次ぎ、無量壽經(曹魏康僧鎧譯)大寶積經無量壽如來會(唐菩提流志譯)及梵文無量壽經は、恐らくは最後に完成したるものにして、かの無量壽莊嚴經(宋法賢譯)の如きは、邊土に傳へたる支缺の經に過ぎざるべし。又小本阿彌陀經は、兩譯及び梵文共今に現存し、內容互に少異ありと雖も、こは恐らくは無量壽經の一部の抄出ならん。觀無量壽經に至ては、其の編纂最も遲く、思ふに佛滅六七世紀以後に在らんか。詳細の說述は、事冗長に涉るを以て之を他日に讓り、今は唯彌陀思想成立

以後といへども、猶幾多の變遷改易を免れざりしことを一言して已まんのみ。

案ずるに、歴史的研究輓近漸く酣にして、未聞の解説日を追ふて開く所あらんとす。是れ學界の爲に甚だ慶すべきなり。然るに研究は動輒もすれば、舊説と異なれる結果を生ず。特に宗教上の問題に至ては、往々にして信念と相容れざるものあり。これ宗教學者たるものゝ自ら深く用意すべき所なりと雖も、然かも鑽れども彌〻堅きものに非ずんば、曷ぞ金剛の信念を發起するに足らんや。法然上人曰く、凡は後學畏べしと云て、學生はかならずしも、先達なればといふことはなきなり。かの如來滅後五百年に五百の羅漢あつまりて、婆沙論を造りしに、九百年に世親いでゝ俱舎論をつくりて、さきの義を破し給き。義の是非を論ぜんことは、あながちに上古にもおそるまじきものなりと。予輩至愚なりと雖も、乞ふ且此慈訓を服膺せんのみ。

六　讀餘雜筆

佛教の經典が、餘程詩的に文學的に編纂せられてゐることは、佛教研究者の深く注意を要すべきところである。維摩經や法華經や華嚴經などの書き方が、その著しき例で、芥子の内に須彌を納れるとか、維摩の方丈に八萬四千由旬の高さの師子座を三萬三千個も容れて、それで何の妨礙もないとか、地面が裂けて其の裂口から澤山な菩薩が涌き出して、其菩薩が釋尊を取り卷いて説法を聽いたとか、一毛孔の中に十方無邊の國土が在つて、其の一々の國土に亦無量の佛があつて説法をしてゐるとか、すべて斯樣な書き方は、眞理の無礙自在なることを詩的に言ひ顯はしたまでのもので、釋尊の説法中に、實際こんな事實が起つたと云ふ譯ではない。

六種震動と云ふことは無論地震のことである。地震學が當時開けて無かつたから、偶然釋尊の説法中に地震が搖るとそれを直樣天地が感動した證據だと詩的に書いたものである。天より妙華を雨らすとか、曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華等を雨らすとか云ふのは、霰若くは雹などの雨つたことを形容した言葉である。光宅の法華義疏に、曼陀羅華を白團花、曼殊沙華を赤團花、摩訶曼殊沙華を大赤團花と譯してあるが、其白團花と云ふのは疑もなく霰か雹のことだ。梵語の意味からは、曼殊沙と云ふ言葉は、石球の意味に解せらるゝと云

ふ話だから、雹のことを形容して天から華が雨つたと書いたものであらう。

須彌山が雪山卽ち比馬剌亞山のことであることは言ふ迄もない。印度は比馬剌亞山の南であるから、印度のことを南閻浮提と言つたことも少しも疑は無い。阿耨達池は比馬剌亞山脈の中に在て、それが恆河などの源であることも今日解つてゐる。

俱舍論等に閻浮提に四大河があつて、阿耨達池の四方の口から流れ出ると書いてあるが、それが卽ち今も印度を流れてゐる四大河である。

比馬剌亞山の北方に、クルと云ふ人種が今も生存してゐると云ふ話だが、それが卽ち須彌四洲中の北俱盧洲であつて、印度人が餘程樂しい世界だと想像して居つた處である。西俱耶尼洲は牛を通貨としてゐるから牛貨洲と稱したと云ふことであるが、昔し印度の西方に牛を賣買した國は無からうか。亞剌比亞地方で、盛に駱駝を使用してゐたことなどを言ひ傳へたものでもあらうか。駱駝のことを昔しは封牛、牛、物牛など稱したこともある。

比馬剌亞山を中心として種々想像が描かれた。此の山の四方に東西南北の四洲が在ると云ふ想像などは、まだしもだが、其の山の高さが十六萬由旬で、水の中に八萬由旬、水を抜くこと亦八萬由旬、周圍に八山八海があり、第一海の中に須彌の四洲があり、南閻浮提の下、二萬由旬にして無間地獄があり、又その須彌山の半腹に四王天があり、頂に忉利天があり、其の上に覆ひ重つて夜摩天等があり、また其の上に色界の諸天がある。實に印度人の詩的文學的想像力と云ふものは驚くべきものである。

一の比馬剌亞山を土臺として宇宙の構造、日月の運行までも說明をしてゐる。

四禪八定などは素より禪定の階級である。禪定の法を修して欲惡の法を離れ、心に喜樂を生じた有樣が初禪で、覺觀の動散を離れ、澹然凝靜にして勝定の喜樂を生じた有樣が二禪、進で極妙の樂を身にまで感じた有樣が三禪、喜樂を超絕したが四禪、それから無色空處を觀じて、遂に主觀の心識までを滅するのが四無色定である。元とは斯樣に單に禪定の階級であつたものが、初禪を得た人は初禪天に生ぜざるべからず、二禪三禪、乃至非想非々想定を得た者は、二禪天、三禪天、乃至非想非々想處天に生ぜざるべからずと云ふ因果論が起つて、遂に色界、無色界の建立が出來たものであらうと思はれる。

話は少し違ふが、私が先年「無量壽經成立年代考」と云ふ論文を本誌に續載して、極樂

往生の教義は、上天の思想に起源しては居まいかと疑つたことがある。此頃になつて其れに就て少し考へたは外でもない、今述べた色界の第三禪天は、離喜妙樂地と稱して、三界九地の中、最も勝妙の樂を受くる處だとしてあつて、一名極樂地とも云はれてある。其の下の初禪天や二禪天はまだ覺觀の動散があり、喜受の踊動があつて眞の極樂を感じない。其の上の四禪天は捨受相應の地と稱して、平等に喜も樂も無い。四無色界は無論無色で、形が無いから喜も樂も感ずることが出來ぬ。欲界は五趣相雜であるから、言ふまでもなく極樂地でない。して見れば三界中、極樂の境界を感じ得るのは唯だ第三禪ばかりである。處が此の第三禪に三天あつて、其の中に無量淨天と云ふのがある。此の無量淨天が或は阿彌陀佛に關係がなからうかと疑はれる。古い無量壽經の翻譯たる平等覺經には、阿彌陀佛のことを悉く無量淸淨佛と言つて、無量壽とも無量光とも譯してゐない。地が極樂地であつて、其處に住する天を無量淨と名づくるところから考へると、或は極樂往生の思想は、此の第三禪天から發源したものでは無からうかと鳥渡思はれるのである。莫疑論などに極樂は三界の內か外かの議論があつて、內とすれば色界の攝と云はねばならぬと書いてあるが、趣意は無論違ふけれど多少面白味が無いでもない。但し是れはビールの無量光天の考とは全く別である。

何にしろ今日傳つてゐる經典と云ふものは、釋尊のお弟子達や後世の佛陀崇拜家が、詩的文學的に、餘程其の說法を潤飾した書き物が多いことは明かであると言はねばならぬ。

七　諸經に顯はれたる彌陀本生譚

本生とは梵語闍陀伽 Jātaka の翻にして、元と釋迦牟尼の前生に關する說話をいふ。十二部經の第九に在り。然るに藏經を見るに、獨り釋迦牟尼に止まらず、諸佛の前身前生に關する說話を載するもの甚だ多し。既に成佛には無數の歲時を要すといへば、其の間、展轉更生して、何の佛も齊しく種々の本生譚を貽すべきは當然の事と謂ふべし。今藏中に就き彌陀の本生に關するものを求むるに、凡そ十五種四十一經あり。中に於て轉輪聖王と作せるもの二種六經、國王と作せるもの四種九經、轉輪聖王

の王子又は單に王子と作せるもの三種十五經、菩薩若しくは比丘となせるもの六種十一經あり。無量壽經卷上に依るに、彌陀因地に在りし時、或は長者居士豪姓尊貴となり、或は刹利國君轉輪聖王となり、或は六欲天主乃至梵王となりて、常に諸佛を供養し衆生を敎化せりと言へり。故に此等諸經に顯はれたる種々の本生譚は、悉く彌陀因位の多劫の間に於ける種々の前身を語るものにして、所謂兆載永劫の積功累德に關する說話なりと謂ふべし。

就中、無量壽經と悲華經とは、出家發願の起盡大に同じと雖も、而も前者は、發願までの事蹟を序すること甚だ略にして、其の以後を序すること稍〻密なるに反し、後者は發願已後を全く省略して、其の以前を說くこと頗る詳悉を極む。加之、無量壽に在りては、單に世自在王佛の勸によりて發心出家すとなせるも、悲華には、釋迦の前身なる寶海梵志及び其の子なる寶藏佛の敎に由りて、始めて菩提を求め淨土を取るの心を發せりと記し、且つ彌陀の前身なる無諍念王には、觀音、勢至、文殊、普賢及び阿閦等の千子ありて、此等の諸子亦皆同じく寶海梵志の勸に由て發心修行せることを說けり。之を無量壽等に比するに、悲華の本生譚は、頗る大仕掛にして、且つ釋迦本位と謂はざるを得ず。如來智印經は、亦悲華に同く、彌陀の前身を轉輪聖王となし、千子ありと說けるも、能化の如來は釋迦の本生に關係なく、且つ其の千子を賢劫中に出世すべき千佛の前身となせり。觀察諸法行經第三に、彌陀の本生を說法者となし、而して此の說法者は、阿閦の前身なる多人無憂普欲喜音と名くる轉輪聖王及び賢劫千佛の前身なる其の王の千子を敎化せりと說くは、記事は如來智印經と相似たりと雖も、彼れは轉輪聖王を彌陀の前身となし、是れは阿閦となすの點に於て異なれり。大寶積經護國會に、釋迦を彌陀の前身たる焰意王の子となし、護城神を阿閦とし、彌陀は其の子福焰卽ち釋迦の指導に由りて聽法得果すとなせるは、寶海梵志の敎に由りて發心すと言へる悲華經の說に稍〻相類するも、彼れには寶海梵志を王の大臣とし、阿閦を王の千子の一となせる點に於て、互に同じからざるを見るべし。又妙法蓮華經には、阿閦、彌陀及び釋迦等を竝に大通智勝佛十六王子の隨一となし、觀佛三昧海經には、彌陀因位に比丘たりし時、阿閦、寶相及び微妙聲と同學たりと云ひ、其の交誼頗る親密なるが如きも、濟諸方等學經には、彌陀は淨命比丘たりし時、釋迦の前身なる爲法比丘の爲に謗せらるると說き、生經には、釋迦の前身首達比丘は、彌陀の

前身惟先比丘を謗じて地獄に墮すと云へり。又悲華經竝に如幻三摩地無量印法門經には、觀音、勢至を彌陀の子とし、彌陀般涅槃の後、其の後を襲ふて成佛すと云ふも、決定總持經には、觀世音如來の時、彌陀の前身たる月施國王は、阿閦の前身たる辯積法師を供養せりと說き、又無量壽經等には、錠光如來の後、五十三佛を經て、世自在王佛出世すと說けるも、舍利弗陀羅尼經には、彌陀、轉輪聖王の子たりし時、錠光如來の前身なる長者の子月蓋を度せりと云へり。是の如く諸經に說く所、區々にして互に乖角ありと雖も、是れ皆諸佛因地の間に於ける種々の本生を記述したるものにして、或は師となり弟となり、骨肉となり同學となり、或は信じ或は謗じ、以て各々其の功を積み德を累ねたるを見るべし。但し此の中、彌陀は阿閦及び釋迦の本生と特に其の因緣の深きものあるを看取するを要す。彼の金光明經、觀佛三昧海經、陀羅尼集經等に、四方に四佛を配し、又金剛界曼荼羅等に於て、五方に五佛を配し、東方を阿閦に、西方を彌陀に、北方を釋迦に對するが如き、皆其の由來するところ極めて遠きものあるを察すべし。今左に彌陀の本生に關する諸經の文を撮略し、之を援引すべし。

一　無量壽經卷上（平等覺經第一、大阿彌陀經卷上、大寶積經第十七無量壽如來會、無量壽莊嚴經卷上、梵文無量壽經、此六經同本）

佛、阿難に告ぐ、乃往過去久遠無量不可思議無央數劫に、錠光如來（吳英二譯には提恕竭羅、唐宋二譯には然燈に作る）世に興出して、無量の衆生を敎化し、皆得道せしめて乃ち滅度を取る。次に如來あり名けて光遠と曰ふ。次に月光、次に栴檀香、次に善山王、次に須彌天冠、次に須彌等曜、次に月色、次に正念、次に離垢、次に無著、次に龍天、次に夜光、次に安明頂、次に不動地、次に琉璃妙華、次に琉璃金色、次に金藏、次に炎光、次に炎根、次に地動、次に月像、次に日音、次に解脫華、次に莊嚴光明、次に海覺神通、次に水光、次に大香、次に離塵垢、次に捨厭意、次に寶炎、次に妙頂、次に勇立、次に功德持慧、次に蔽日月光、次に日月琉璃光、次に無上琉璃光、次に最上首、次に菩提華、次に月明、次に日光、次に華色王、次に水月光、次に除癡冥、次に度蓋行、次に淨信、次に善宿、次に威神、次に法慧、次に鬱音、次に師子音、次に龍音、次に處世と名く（以上五十三佛あり。然るに此の名數各譯互に等しからず。又唐宋二譯は、然燈佛を過去最近の出現とし、次第に逆に溯りて世自在王佛を過去久遠の出現とせり。此の如きの諸佛、皆悉く已に過ぎき。爾の時次に佛あり、世自在王（漢は世饒王、吳は樓夷亘羅、唐は世間自在に作る）如來應供等正覺明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊と名く。時に國王（梵本及唐宋二譯は國王たりしことを說かず、直に比丘となせり）あり、佛の說法を聞きて心に悅豫を懷き、尋ち無上正眞道意を發し、國を棄て王を捐てゝ行じて沙門となり、號して法藏（漢は法寶藏、吳は曇摩迦、唐は法處、宋は作法に作る）

と曰ふ。高才勇哲にして世と超異せり。世自在王如來の所に詣でゝ、佛足を稽首し、右繞三帀し、長跪合掌して、頌を以て佛を讃し、次で白して言く、世尊、我れ無上正覺の心を發せり、願はくは、佛、我が爲に廣く經法を宣べ給へ。我れ當に修行して、佛國清淨莊嚴無量の妙土を攝取すべし。我れをして世に於て速に正覺を成じ、諸の生死勤苦の本を拔かしめ給へと。時に世自在王佛、法藏比丘に告ぐ、所修の行、莊嚴佛土の如き、汝自ら當に知るべしと。比丘、佛に白さく、斯の義弘深にして我が境界に非ず。唯願はくは世尊廣く爲に諸佛如來の淨土の行を敷演し給へ。我れ此を聞き已りて、當に說の如く修行して所願を成滿すべしと。爾の時、世自在王佛、其の高明にして志願の深廣なるを知り、卽ち爲に廣く二百一十億（漢吳二譯今に同じ、餘は不同）の諸佛刹土の天人の善惡と國土の麤妙とを說き、其の心願に應じて、悉く現じて之を與ふ。時に彼の比丘、佛所說の嚴淨の國土を聞き、皆悉く觀見して、無上殊勝の願を超發す。其の心寂靜にして志、所著なく、一切世間能く及ぶものなし。五劫（漢吳二譯には五劫思惟の文なし）を具足して、莊嚴佛國清淨の行を思惟し攝取し、後、世自在王佛の所に詣り、稽首して足を禮し、佛を繞ること三帀し、合掌して白して言く、世尊、我れ已に莊嚴佛土清淨の行を攝取せりと。佛、比丘に勸めて其の願を說かしむ。法藏比丘是に於て、佛前に在りて四十八（各譯不同）の大願を說く。爾の時法藏比丘、其の願を說き已りて、更に頌を說く時、普地六種に震動し、天より妙華を雨らして、以て其の上に散じ、自然の音樂ありて、空中に讚じて言く、決定して必ず無上正覺を成ぜんと。法藏比丘、彼の佛所に於て、斯の弘誓を發し此の願を建て已りて、一向に志を專にして妙土を莊嚴す。所修の佛國は、開廓廣大にして超勝獨妙に、建立常然にして衰なく變なし。不可思議兆載永劫に於て、菩薩の無量の德行を積植し、欲覺瞋覺害覺を生ぜず、欲想瞋想害想を起さず、色聲香味觸法に著せず、忍力成就して衆苦を計せず、少欲知足にして染恚癡なく、三昧常寂にして智慧無礙なり。虛僞諂曲の心あることなく、和顏愛語、意に先つて承問し、勇猛精進して志願倦むことなく、專ら淸白の法を求めて以て羣生を惠利し、三寶を恭敬し師長に奉事し、大莊嚴を以て衆行を具足し、諸の衆生をして功德成就せしむ。空無相無願の法に住して、作もなく起もなく、法は化の如しと觀じ、麤言と自害と害彼と彼此俱害とを遠離し、善語と自利と利人と人我兼利とを修習し、國を棄て王を捐て、財色を絕去して、自ら六波羅蜜を行じ、人を敎へて行せしめ、無央數劫に功を積み德を累ね、其の生處に隨て意の所欲

に在りて、無量の寶藏自然に發應し、無數の衆生を敎化し安立して、無上正眞の道に住せしむ。或は長者居士豪姓尊貴となり、或は刹利國君轉輪聖帝となり、或は六欲天主乃至梵王となりて、常に四事を以て一切の諸佛を供養し恭敬しき。乃至、佛、阿難に告ぐ、法藏菩薩今已に成佛して、現に西方に在り。此を去ること十萬億刹（唐譯今に同じ、餘の諸譯不同）なり。其の佛の世界を名けて安樂（漢吳二譯には須摩提、唐宋二譯は極樂に作る）と曰ふ。成佛已來凡そ十劫を歷たり。

二　悲華經第二第三第四第五（大悲分陀利經第二第三第四梵文悲華經此三經同本）

往昔過恆河沙等の阿僧祇劫に、此の佛世界を刪提嵐と名く。是の時の大劫を名けて善持と曰ふ。彼の劫中に轉輪聖王あり、無諍念（大悲分陀利經に離諍に作る）王と名く。四天下に主たり。一の大臣あり、寶海（海濟作る）と名く、梵志種なり。時に寶海、一子を生む、三十二相八十種好あり。因て字を立てゝ寶藏（海藏作る）と號す。其の後、此の寶藏出家して阿耨多羅三藐三菩提を證し、寶藏如來應供正徧知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊と號す。此の寶藏如來卽ち法輪を轉じて諸の衆生を度し、次第に城邑聚落に遊行し、遂に安周羅城に到る。此の安周羅城は無諍念王所治の城なり。寶藏如來斯くて此の城を去る遠からざる所の一の園林に止まりき。此の園林を閻浮林と名く。無諍念王は、寶藏如來が其の弟子と俱に閻浮林に來れるを聞き、自ら大衆を率ゐて、閻浮林に至り、其の說法を聽く。聽き已りて、王は如來及び諸の聖衆に、三月の間、此の園に住して其の供養を受けんことを請ふ。時に如來默然としてこれを許す。王乃ち閻浮林に於て、七寶の樓を造り、七寶の行樹を植え、種々奇妙の莊嚴繒幡天蓋香華牀榻を設けて、如來及び弟子を供養し、又每日淸旦、躬ら佛所に往詣して食をさゝげ、手に寶扇を執りて如來及び一一の聲聞を扇ぎ、夜に入りては百千無量億那由陀の燈を燃し、別に亦自ら頂に一燈を頂き、肩に二燈を荷ひ、左右の手に四燈を持し、其の兩膝及兩足の趺上に各々一燈を置き、是くして終夜供養を怠らず。王の千子及び八萬四千の諸の小王等も、亦轉輪聖王のなせるが如く、等しく如來に供養し奉る。三月を過ぐる時、無諍念王は、更に如來に達覩として八萬四千等の種々の珍寶を奉施し、且つ白して曰く、我が國多事にして諸の及ばざるものあり、今我れ悔過に堪えず。唯願はくは、如來久しく此の園に住し給へと、爾の時、佛默然として此を許す。王の千子の第一太子を不眴と名く、復た三月の間、如來及び比丘僧を供養すると一に父王の如くす。第二

の王子を尼摩尼摸作るにと名く、亦三月の間、如來及び比丘僧を供養すると不眴太子の如く異なるとなし。第三已下、王の千子は、次第に是の如く各々三月の間、如來及び比丘僧を供養し、一切の所領衣服飲食臥具醫藥、皆亦第一太子の如く悉く此を奉施す。其の間二百五十歳(3×1000＝3000÷12＝250)を經。然るに是等の千子は、悉く如上所施の功德に由りて、或は忉利天王たらんとを願ひ、或は梵王、或は魔王、或は轉輪聖王たらんとを求むるの心を發したるも、其中、一人として未だ大乘佛果を志求する者なく、無諍念王も亦其の所施の功德を以て、來世に復び轉輪聖王たらんとを望みて、更に無上菩提を志樂せず。時に寶海、夢想を感じて、是の如き人天有漏の果の深く愛するに足らざるを覺悟し、因て無諍念王に說て種々に曉諭し、遂に王をして阿耨多羅三藐三菩提心を發し、菩薩の道を行じ、大乘を修行して淸淨佛土に於て成佛せんとを求むるの心を起さしめき。爾の時、寶藏如來、神通力を以て大光明を放ち、十方微塵數の諸佛世界を現じ、無諍念王をして悉く此を見せしむ。其の所現の世界の中に、或は五濁弊惡のものあり、或は淸淨微妙のものあり、或は壽命無量なるあり、或は壽命短促なるあり、王は此等の諸土を見已りて、寶藏如來に問て曰く、諸の菩薩等、何の業を以て淸淨世界を取り、不淨世界を取るや。又何の業を以て壽命無量若しくは壽命短促なるやと。佛、王に告ぐ、諸の菩薩は願力を以て淸淨土を取り、願力を以て五濁惡を求むと。是に於て王は城に歸り、閑靜處に於て端坐し、專心思惟す。寶海梵志は、復次に太子不眴に勸めて、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめ、尋で第二王子、乃至次第に餘の千子をして悉く無上菩提心を發さしむ。是に於て是等の諸子、皆本宮殿に歸り、屏處に在りて一心に所願を思惟す。無諍念王及び王の千子等は、心に貪瞋癡等の諸欲なく、唯一心に上妙淸淨の佛土を取らんことを願じ、七歳の後、俱に安周羅城を出でゝ閻浮林に到る。爾の時寶藏如來三昧力を以て、大光明を放ち、無量の世界を照すに、十方の諸大菩薩各々佛光を蒙り、佛力を以ての故に悉く佛所に來至す。時に寶海梵士、無諍念王に告げて曰く、大王今先づ誓願を發して妙淨土を取るべしと。是に於て王は卽ち起て合掌長跪し、寶藏如來に白して言く、我れ今眞實の菩提を得んと欲す。我れ先きに三月の間、諸の所須を以て、佛及び比丘僧を供養しき。今我れ其の善根を以て阿耨菩提に廻向し、終に不淨佛土を取らんことを願はず。世尊、我れ既に七歳の間、端坐して種々の莊嚴淸淨佛土を思惟しき。我今發願すべしと。斯くて王は次

第に四十八の大願を說き已りて、更に佛に白して言く、世尊、我が所願の佛土是の如く、衆生是の如し。若し世界淸淨にして、衆生是の如くならば、然る後乃ち阿耨多羅三藐三菩提を成せんと。爾の時、寶藏如來、無諍念王に語て言く、善哉善哉、大王今は所願甚深にして已に淨土を取り、其の中の衆生其の心亦淨し。大王汝見よ、西方百千萬億佛土を過ぎて世界あり、尊善無垢（帝無塵に作る）と名く。彼の界に佛あり、尊音王（帝明自在に作る）如來と名く。今現在して諸の菩薩の爲に正法を說く。彼の界に聲聞辟支佛の名なく、亦小乘法を說く者あることなく、純一大乘にして淸淨無雜なり。其の中の衆生、等一化生し、亦女人及び其の名字なし。彼の佛の世界所有の功德淸淨莊嚴は、悉く大王の今の所願の如く等くして差別なし。是の故に今汝の字を改めて無量淸淨（無量淨に作る）とな すべしと。爾の時、佛復た無量淸淨に告ぐ。彼の尊音王佛は、一中劫を過ぎて當に般涅槃すべし。次で如來あり、彼の土に出現す、不可思議功德王（不可思議德王に作る）如來と號す。其の佛の壽命六十中劫にして亦滅度し、寶光明如來、寶尊音王（寶幢自在鳴に作る）如來、相次で出現し、復無量無邊の諸佛是の如く次第に出世し、各悉く滅度し已りて、復た一過恆河沙等の阿僧祇劫を過ぎ、第二恆河沙等の阿僧祇劫に入る。是の時、彼の世界を轉じて安

樂と名く。汝是の時に於て當に作佛を得て、無量壽（阿彌陀に作る）如來應供等正覺明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊と號すべしと。王は是の語を聞き已りて、因て種々の事を問ひ、更に前んで白して言く、世尊、我が所願、佛の所記の如く果して成就せば、十方世界六種に震動し、諸佛亦我が爲に記を授くべしと。王是の語を作す時、十方世界六種に震動し、諸佛卽ち同く記を授く。時に無諍念王卽ち心に歡喜を生ず。復た寶藏如來は、第一太子不眴に記を授け、其の字を改めて觀世音と號し、無量壽佛般涅槃の後、其の處を補ふて成佛すべし。次に復第二の王子尼摩に記を授け、其の字を改めて得大勢と號し、亦前佛の處を補ふて成佛すべし。乃至、是の如く次第に餘の千子に授記し、皆同く成佛すべきことを說く。佛（卽迦釋）時に宜べて言く、爾の時の寶海梵志は豈に異人ならんや、卽ち我れ釋迦牟尼是なり。

三　如來智印經（慧印三昧經、大乘智印經第三第四、此三經同本）

然燈佛より八十億劫（大乘智印經には百千億劫に作る）を過ぎて佛あり、月髻（大乘智印には髻幢に作る）と名く。此の三昧を演說して三會に無量の菩薩を度す。時に轉輪王あり、號して慧起（慧印には慧上に作り、大乘智印には福上に作る）と名く。閻浮提七十千由旬を領し、竝に四天下に主たり。婇女六十億あり、其

の王に千子あり、所住を樂光（大乘智印に光慧に作る）と名く。百千の城、莊嚴園觀悉く具足し、皆豐樂熾盛にして猶ほ忉利天の如し。其の王、夢に月髻佛興世すと聞き、百六十億の衆と俱に佛所に行詣す。時に王、此の經の甚深法身定を聞き、卽ち國を捨てゝ佛に奉じ、諸城に精舍を起し、妙栴檀を以て衆僕に施し、金を經行の地に布かしむ。時に王、佛を供養して八萬歲を具滿し、專精にして眠臥せず。一日に設くる所の供養、其の數無量なり、悉く佛に奉施す。是れ卽ち此の三昧を求めんが爲なり。三昧は甚深妙にして有相を以て獲ず、亦巧便の所得に非ず。卽ち國を捨てゝ出家し、被るに舍那服を以てし、繫念三千歲（大乘智印に八萬歲に作る）思定倚臥せず。佛、此の中間に於て說法して彼を開解せしめき。月髻佛滅度の後、王乃ち塔を起すこと六萬四千億なり。塔毎に各々五百の蓋を施し、七寶を以て莊嚴し、一一に百の妓樂あり、照すに八千の燈を以てす。麁垢の衣を被ること七萬三千歲、常に此の三昧を說く。其の心所欲なく、不著名を稱嘆し、世の勝智を求めず、乞匄して請を受けず。八萬億那由陁の佛所に淨戒を持し、悉く上の如く供養す。此の三昧を具足し、若し菩提を得んと欲せば、當に佛の如く學すべし、非道論を修すること勿れ。爾の時の慧起王は阿彌陀佛是なり、王の千子は卽ち賢劫の千佛是なり。

四　大寶積經護國會（護國尊者所問大乘經第二、頞吒和羅所問德光經此三經同本）

爾の時、佛復た護國（頞吒和羅經に頞吒和羅に作る）に告ぐ、我れ念ふに、往昔阿僧祇劫に復た阿僧祇劫を過ぎて、稱量すべからず思惟すべからず譬喩あることなく計算すべからず得て說くべからず。是の時に佛あり、名けて成利慧（頞吒和羅には吉義、尊者所問には成義意に作る）如來と曰ふ。爾の時、王あり、名けて焰意（頞吒和羅には頻眞無尊者所問には發光に作る）といふ。彼の焰意王治化の時、此の閻浮提の縱橫一萬六千由旬（頞吒和羅には廣長六十四萬里に作る）あり。彼の時、此の閻浮提の內に二萬の諸城あり、其の一一の城に千俱致の家あり、焰意王所住の城を寶光明（頞吒和羅に寶照明に作る）と名く。東西十二由旬、南北七由旬あり。彼の國の衆生の壽命、十俱致那由陁歲なり。彼の王に一子あり、名けて福焰（頞吒和羅に德光、尊者所問に福光に作る）と曰ふ。別に勝喜樂城を立てゝ之に居らしむ。時に福焰王子、淨居天の勸めによりて深く無常を觀じ、竊に宮を出でゝ成利慧如來の許に至りて、其の法を聞き、卽ち陀羅尼を得。時に父焰意王、王子の在らざるを聞き、啼哭懊惱して此を索む。護城神告げて曰く、大王知らずや、此を去る東方に佛あり、成利慧と曰ふ。王子今彼の處に在りて承事供養すと。時に父王、神告を聞き、直に佛所に至り。

るに、成利慧佛、王の深信心なるを知り、應の如く說法して不退轉地に住せしむ。爾の時、王子、勝喜樂城を以て佛及び比丘衆に奉施し、三億俱致歲の間之を供養す。福焰比丘此の如く次第に九十四俱致の諸佛を供養す。佛（卽釋迦）曰く、其の焰意王とは豈に異人ならんや、卽ち今の無量壽如來是なり。福焰王子は我が身是なり。護城天神は卽ち阿閦佛是なり。

五　決定總持經（誘佛經（此二經同本））

乃往過去久遠世の時、更に三十二劫を歷て、饑氣世界に佛あり、名けて光世音如來（誘佛經に觀世自在に作る）と曰ふ。彼の佛の世に一の菩薩（法師に作る）あり、辯積と名く。總持を逮得して一切を開化す。彼の世界に國王あり、名けて月施（月德に作る）と曰ふ。道法を愛樂し經義を渴仰し、法を以て自ら娛む。時に國王、法師辯積菩薩を供養し、其の中宮貴人婇女五百の衆と與に大に妓樂を作し、寶を以て其の上に散じ、栴檀香に和して用て其の體に塗り、五百の蓋を以て其の上を覆ひ、五百の細妙衣服を以て供養し、晝夜七日、住して敢て坐せず。奉ずるに所安を以てし、其の宜き所に隨て時節を失はず、甚だ法師を敬ひき。時に長者の子、辯積菩薩を誹謗し、其の罪を以て地獄に墮す。爾の時の月施國王は今の現在阿彌陀佛是なり。其の辯積は阿閦如來是なり。

六　如幻三摩地無量印法門經第二第三

佛言はく、勝華藏よ、乃往過去阿僧祇阿僧祇劫の前に又廣大無量無邊不可思議の劫數を經、是の劫を過ぎ已りて、此三千大千世界を將て碎きて微塵となし、一塵を一劫とし、是の微塵の劫數を過ぐるの前に、時に世界あり、無量功德寶莊嚴普現妙樂（觀音受記經に無量德聚安樂示現に作る）と名づく。佛ありて出世し、師子遊戲金光王（金光師子遊戲に作る）如來應供正等正覺明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊と號す。乃至、彼の師子遊戲金光王如來の法中に王あり、勝威（威德に作る）と名く。其の王、千世界の中に於て、自在特尊、廣大富盛にして、正法世を化し、七萬六千の最上の園苑あり、王の受用する所。其の王の諸子には、各一萬の園林ありて受用す。其の王、子と與に八萬四千俱胝歲の中に於て、師子遊戲金光王如來を尊重し供養す。彼の佛世尊、王の深心にして淨信を起すを知り已りて、卽ち爲に無量印善巧法門を宣說す。乃至、爾の時、彼の師子遊戲金光王如來、彼の勝威王の爲に無量印善巧法門を宣說する時、其の王、一切法に於て覺了することを得たり。彼の勝威王は、佛法の中に於て禪定の行を修し、後一時に於て禪定に安處す

るに、忽然として左右の二脇より二の蓮華を生じ、殊妙にして愛すべく、清淨なること猶ほ龍實の栴檀香の如し。其の華中に於て二童子を生じ跏趺して坐す。一を寶嚴と名け、二を寶上と名く。二童子各々阿耨多羅三藐三菩提心を發す。勝華藏よ、汝が意に於て云何、彼の時の勝威王は豈に異人ならんや、卽ち今の無量光如來應供正等正覺是なり。彼の時の寶嚴童子は今の觀自在菩薩是なり。寶上童子は今の大勢至菩薩是なり。

（寶意に作る）

此の經は觀世音受記經の異譯にして、起盡說相互に同じきも、彼の受記經には、威德王を釋迦の前身となして彌陀の本生となさず。

七　舍利弗陀羅尼經

（無量門破魔陀羅尼經、無量門微密持經、出生無量門陀羅尼經、阿難陀目佉尼訶離陀鄰尼經、阿難目佉尼訶離陀經、出生無邊門陀羅尼經、出生無邊門陀羅尼經（此九經同本）、一向出生菩薩經、佛說出生無邊門陀羅尼經）

爾の時、佛舍利弗に告ぐ、乃往古昔無數阿僧祇劫に、是の時、佛あり、寶吉光王（破魔には寶勝火聚光明、微密には寶首燈王、無量門には寶首焰王、訶離陀鄰尼及訶離陀の二經には寶具足有德行王、出生菩薩經には寶功德威宿劫王、智嚴の無邊門には寶吉祥威光劫王に作る）如來應供正遍知と名く。世に出興して衆生を敎化す。此の佛滅度して轉輪聖王あり、持光明（破魔及び智嚴の無邊門には星持、微密には光乘、訶離陀鄰尼及び訶離陀には不空の無邊門に持光に作る。無量門は今と同じと名く。七寶具足す、彼の王に子あり、不可思議功德吉（破魔及智嚴の無邊門には不思議功德最勝、微密には無念德、無量門には無念名聞具足、一向出生菩薩經には不思議勝功德、不空の無邊門には不思議功德寶吉祥に作る）と名く。年十六歲、彼の佛の滅後に此の陀羅尼を說くを聞いて、卽ち七萬世の中に於て睡眠懈怠せず、七萬世の中に王位を貪らず、身命及び餘の財物を惜まず、七萬世の中に未だ曾て寢臥せずして一向に坐禪し、常に九十億萬那由陁諸佛諸說の法を聞く。既に法を聞き已りて佛記を受け、出家して九十萬世を過ぎ、陀羅尼を得、取無邊門と名く。得已りて衆生の爲に說き、一生の中に八十億百千萬那由陁の衆生を敎化し、不退地に住して當に阿耨多羅三藐三菩提を得べからしむ。是の時、衆中に長者の子あり、名けて月蓋（破魔、無量門及兩無邊門の四經には月幢、微密持に月行、訶離陀鄰尼及訶離陀の二經には月英、出生菩薩には月相に作る）と曰ふ。彼に從ふて取無邊陀羅尼を說くを聞き、聞き已りて隨喜す。隨喜の功德を以て九十億萬佛の爲に授記せらる、汝、受持陁羅尼の中に於て最も第一たり。一切の衆生、汝が所說を聞かば悉く皆愛樂し、有らゆる問難能く壞する者なからん。汝、來世に於て三阿僧祇劫を過ぎ、諸の衆生を敎化し、皆阿耨多羅三藐三菩提を得せしめんと。舍利弗、汝の意に於て云何、彼の時の不可思議功德吉王子は豈に異人ならんや、卽ち無量壽佛是なり、長者の子月蓋は卽然燈佛（破魔、微密持等に定光に作る）是なり。

八　妙法蓮華經第三（正法華經第四、譬喻品、妙法蓮華經第三、梵文法華經、此四經同本）

乃往過去無量無邊不可思議阿僧祇劫に、爾の時、佛あり、大通智勝（正法華經に大通衆慧に作る）如來と名く。其佛未だ出家せざる時十六子あり。其の第一者を名けて智積と曰ふ。諸子各々種々珍異の玩好の具あり、父、阿耨多羅三藐三菩提を成せりと聞き、皆所珍を捨てゝ佛所に往詣す。其の祖轉輪聖王、一百の大臣等と亦佛所に到る。時に十六王子、偈を以て佛を讚し法輪を轉せんことを請ふ。乃至、爾の時十六王子、皆童子を以て出家して沙彌となり、諸根通利智慧明了なり。已に曾て百千萬億の諸佛を供養し、梵行を淨修して、阿耨多羅三藐三菩提を求む。俱に智勝佛に白して言く、世尊、亦我等の爲に阿耨多羅三藐三菩提の法を說き給へ。我等聞き已りて皆共に修學せんと。爾の時、彼の佛、沙彌の請を受けて妙法蓮華經を說く。十六沙彌、悉く信受して、共に其の經を受持し諷誦し通利す。佛此の經を說き已りて後、卽ち靜室に入りて禪定に住すること八萬四千劫なり。是の時、十六沙彌各法座に昇り、亦八萬四千劫の間、四部衆の爲めに妙法蓮華經を廣說分別して、一々に皆六百萬億那由他恆河沙等の衆生を度す。乃至、諸比丘よ、我れ（卽釋迦）今汝に語る、彼の佛の弟子十六沙彌は、今皆阿耨多羅三藐三菩提を得、十方國土に於て現在說法し、無量百千萬億の菩薩聲聞を以て眷屬となせり。其の二沙彌東方に作佛す、一を阿閦と名く、歡喜國にあり。二を須彌頂と名く。東南方に二佛あり、一を師子音と名け、二を師子相と名く。南方に二佛あり、一を虛空住と名け、二を常滅と名く。西南方二佛、一を帝相と名け、二を梵相と名く。西方二佛、一を阿彌陁と名け、二を度一切世間苦惱と名く。西北方二佛、一を多摩羅跋栴檀香神通と名け、二を須彌相と名く。北方二佛、一を雲自在と名け、二を雲自在王と名く。東北方の佛を壞一切世間怖畏と名く。第十六は我れ釋迦牟尼佛なり。娑婆國土に於て阿耨多羅三藐三菩提を成ず。

九　觀察諸法行經第二（賢劫經第二、此二經同本）

又喜王よ、先過去世不可數劫過不可數廣遠無量不可思不可量、彼の時節に於て辯才瓔珞莊嚴雲鳴出吼顯音（賢劫經に辯嚴淨と作る、雷音吼に作る）と名くる如來あり。其の佛刹土を無邊寶功德莊嚴と名く。時に菩薩の說法者あり、無邊功德辯幢遊戲鳴音（無量德辯幢英變音に作る）と名く。四部衆の爲に廣く此の決定觀察諸法行三摩地を說く。喜王、又彼の時節に於て王子あり、福報淸淨多人所愛鳴聲自在（淨福報衆音に作る）と名く。彼れ妙形端正にして觀つべく、最勝の

淨色成滿具足し、無上正覺の中に於て久しく已に發行す。王子、時に無邊功德辯幢遊戲鳴音の邊に於て、此の決定觀察諸法行三摩地を聞き、歡喜踊躍愛悅滿意して善意更に生じ、卽ち所著の衣を以て之を奉覆し、是の言をなすらく、諸の衆生に此の三摩地の寶を得せしむること、此の菩薩說法者の如くならんと。彼れ彼の說法者に於て施捨する所の善根を以て、現法の中に於て八十恆伽河沙（八十億江河に作る）諸佛世尊に承事し、彼の邊に於て此の三摩地を聞き、最勝供養をなし、又彼の敎法の中に於て出家して、未だ聞かざる千俱致の修多羅を攝受して、而も能く此を辯說し、變化生を受けて五通智及陁羅尼無著辯才を得、諸の助菩提法を行じ、無邊功德莊嚴佛刹の中に於て、阿耨多羅三藐三菩提を證覺し、壽命無量、聲聞無量、菩薩衆無量、光明無量、願功德莊嚴無量ならん。喜王、彼の無邊功德辯幢遊戲鳴音は天眼如來是なり。福報淸淨多人所愛鳴聲自在王子は、卽ち彼の無量壽如來是なり。喜王、彼の王子、此の三摩地を聞き已りて、七十千劫の業障皆悉く滅盡し、卽ち分別諸法句品出無邊門名陁羅尼を得、三摩地を遠離せずして乃ち菩提場に至りき

十　觀察諸法行經第三（賢劫經第三　此二經同本）

先過去世、不可數劫、復無數無量廣不可量不可思惟を過ぎ、彼の時節に於て、廣淨厚金普無疑光威王（賢劫經に金龍決光に作る）と名くる如來あり。此の佛の滅後、正法沒せんとする時、說法者あり。無邊寶振聲淨行聚（無限量寶音行に作る）と名く。五通智を得、總持自在、不斷辯才、法行に順入す。彼れ村城坊邑王都に入りて、衆生の爲に此の決定觀察諸法行三摩地を說き、六十俱致那由多百千の衆生を無上正覺に建立しき。爾の時、多比丘あり、外道の法に著して此の三摩地を用ひず、妬慳を以て遂に彼の說法者を村邑より驅出す。彼れ驅出せらるゝも、怯避の心なく、小劣の心なく、瞋動の心なく、厚濁の心なく、雜汚の心なく、唯正法を順護して身命を惜まず、林中に遊行して諸天の爲に說法す。喜王、彼の時節に轉輪聖王あり、多人無憂普欲喜音（使衆無憂悅音に作る）と名く。彼の王に千子あり、皆悉く化生なり。爾の時、說法者無邊功德寶振聲淨行聚は、彼の王の心を知り、卽方便を用て其の王の所に詣り、爲に三摩地を說く。王聞き已りて、踊躍愛悅して卽ち此の三摩地を得、彼の千子皆亦不斷辯才を順得す。爾の時、彼の王、無價の衣を以て彼の說法者を奉覆し、有らゆる諸物皆此を喜捨す。次いで彼の說法者、王の請を受けて都城に入り、半劫の間、無量の衆生をして三乘の中に於て皆已に成熟せしむ。彼の王及び千子等、皆

其の給使たり。彼の說法者無邊功德寶振聲淨行衆は卽ち無量壽如來是なり。多人無憂普欲喜音王は不動如來（阿閦に作る）是なり。王の千子は賢劫中出世の千佛是なり。

十一　大法炬陀羅尼經第十七

阿難、爾の時、放光如來復た天帝釋に告げて言く、我れ憶ふに過去無量世の時、一大劫あり、善行路と名く。彼の劫に佛あり、號して山上如來應供正徧覺と曰ひき。其の佛の壽命は、彼の劫數の四分の一たり。是を過ぎて已後、般涅槃に入る。佛滅度し已りて一の菩薩あり、其の刹に出生す、名けて明相と曰ふ。諸根を成就し身漸く長大にして、山上如來の入涅槃を聞き、後此の三千大千世界の一切の住處に於て、皆悉く舍利寶塔を興す。彼の菩薩、是の事の爲に躬自ら閻浮中を徧行して海際を盡くし、閻浮提より次で第二洲の處に往詣せんと欲するに、諸の海難多く、過ぐることを得るに由なし。卽ち復た停住して思惟すらく、我今發趣して大利益を求め、將に徧く大千國土を觀んとす。然るに甫めて此の洲間の少許の留難すら尙ほ度る能はず。況や餘の天下の無量の洲渚及び大鐵圍の所有の巨難、云何にして過ぐべけんや。且亦世間の衆生、輕微の身力をもて率爾として卽ち能く此より彼に至る者あることなく、亦能く彼れより來る者あることなし。今日是の如き自餘の洲渚の如來の寶塔、云何にして彼に往て之を供養するを得べきと。復た是の念をなすらく、我れ今神通を以て此の洲中の懈惰の衆生を移して餘洲に安置し、諸の寶塔を觀せしめん。又此の三千大千世界の所有の如來の舍利寶塔は、我が三昧神通力を以て皆瑠璃衆寶莊嚴と成らしめ、又此の世界をして皆悉く平正に、衆生をして功德樂事皆悉く忉利天宮の如くならしめんと。時に彼の菩薩是の如く念じ已りて、彼の洲間に於て卽火住三昧に入るに、彼の界の所有、悉く心願の如く一切成就しき。時に諸の衆生此の事を見已りて皆歡喜を生じ、一比丘の敎によりて、卽共に彼の菩薩の所に至り大尊重を生じ、頂禮して其の前に住す。時に彼の菩薩、三昧より起ちて大衆に告げて言く、汝等今來て我と與に遊歷して此の三千大千世界を行き、徧く如來の舍利寶塔を觀るべしと。斯くて彼の菩薩は、諸の大衆を將ゐて洲より洲に至りて、如來の塔を觀て禮敬供養し、亦三千世界の所有の衆生をして皆悉く無上菩提を趣求し、乃至壽を盡くすまで菩薩行を修せしめき。憍尸迦、彼の菩薩に是の如き等の大願威力あり。此の佛土を去る千億世界を過ぎて、佛世尊あり。娑羅王と號す。衆に處して說法す。彼の明相菩薩今現に彼に在

り。然るに是の菩薩亦將來に於て四十阿僧祇劫を過ぎて正覺を成ずることを得て、無量壽如來應供正徧覺と名く。時に彼の菩薩、菩提を得已りて、諸有の衆生、其の名を聞くことを得る者をして、皆悉く意に隨て般涅槃を得、皆各彼の所住の世界に於て、本願を成就し、阿耨多羅三藐三菩提を證せしむ。

十二　濟諸方等學經（大乘方廣總持經此二經同本）

佛、阿逸に告ぐ、過去久遠不可計劫に、爾の時、佛あり、離垢焰成就功德如來至眞等正覺と名く。世に出現して八十姟歲、諸の衆生の爲に經道を頒宣す。時に比丘あり、淨命と名く。法の都講をなし、若干教を宣ぶ。言辭柔和、辯才至眞にして、無央數の人を勸助し、歡悅せしむる所多し。時に離垢焰成就功德如來、淨命比丘に正法を囑累し已て、乃ち滅度を取る。是に於て彼の比丘、億歲に於て法品を執り佛教を宣べ、因て普く濟諸方等經典の要に入ることを得せしめ、八萬の城邑に周旋往返して、衆生を觀察し法施に飽滿せしむ。彼の世の時に於て大國城あり、名けて仁賢と曰ふ。八十億の衆民あり。爾の時、彼の比丘、爲に說法教化するに、一億の家は菩薩の意を發し、七十九億は聲聞の意を發す。時に比丘あり、名けて爲法（方廣總持經に達磨に作る）と曰ふ。遠く他鄉より來りて仁賢城に入る。此の比丘、方等經を奉持すること唯だ千餘卷なるも、淨命比丘は十四億の方等經及び六百萬の餘經を學す。時に爲法比丘、彼の城に在りて唯だ一品の空經を講說して、臨機に諸經を敷演することを知らず。且つ己が言を稱して悉く佛說となし、淨明比丘の所說は雜碎にして、人を穢濁ならしむるものとなして此を誹謗し、且つ言く、誰か本と彼の比丘の爲に字を立てゝ淨命と號したる。彼れ實には不淸淨なり。彼れは愚冥にして知る所なく、放逸にして自恣なり、衆人此を信ずること勿れと。是の如く彼の比丘、毒心を懷き、智士を誹謗したるが故に、壽終の後、地獄の中に墮し、乃至人間に生ずるも、常瘂にして舌なし。佛、阿逸に告ぐ、爾の時、淨命比丘は豈に異人ならんや、卽ち阿彌陀佛是なり。爲法比丘は卽ち我が身是なり。我れ過去愚癡無知に由りて、他を誹謗するが故に苦を受ること是の如し。我れ此の業因緣を以ての故に、五濁世に處して等正覺を成ず。

十三　生經第五譬喩經

首達は耆年尊く、五十人を教化す。惟先は年少なれども、其の智深遠にして、諸の國土に行き、六萬人を教化し、展轉して首達と共に會す。首達の弟子、惟先の智慧勇猛なる

を見て、悉く往て之を崇めんと欲す。首達、諸の學者に謂ふ、惟先は年幼にして其の慧薄少なりと。惟先、竊に其の言を聞て曰く、菩薩の法は、當に相供養して諸の國土を行き、覩ること佛を見るが如くなるべし。今我れ護なきも、而かも同法の意を起さんと。惟先、其の夜默然として其の國土を去る。所以は何ぞ、學者をして首達を供養せしめんと欲すればなり。首達は惟先を誹謗するを以ての故に、摩訶泥犂中に墮すること六十劫、既に出でゝ人となることを得るも、舌なきこと六十劫なり。所以は何ぞ、身口意を制せざるが故に菩薩法を失へばなり。罪盡きて已後、前の功德を逮ひ、自ら成佛して釋迦文と字す。佛、諸の學者に告ぐ、其の首達は則我が身是なり。惟先は今現に阿彌陀佛是なり。

十四　學智方廣經大乘寶要義論第六所引

佛、大目乾連に告ぐ、過去に佛あり、名稱高顯と號す。彼の佛刹の中には、唯聲聞衆のみあり。是の時、一の苾芻あり、等觀諸所緣と名く、大乘行に住す。是の人、曾て無量俱胝那庾多の佛所に於て善根を種植し、阿耨多羅三藐三菩提心に於て曾て退轉なく、無上大乘法の中に安住し、不可說不可說の佛刹を嚴淨ならしめんと欲す。是の如く彼の苾芻、廣く善根を植ゆと雖も、甚深法中に於て輕慢の心を生ずるを以て、當に長壽天に生ずべし。時に名稱高顯如來、其の刹土の中を觀見するに、一苾芻あり大乘行に住し、是れ菩薩の機なりと雖も、然かも彼の苾芻は障難の事ありて、當に長壽天に生ずべきを以て、彼をして菩提善根を種植せしむるに堪任する能はず。復た是の人、彼に於て命壽の後、當に阿鼻大地獄中に墮すべきを以て、亦菩提善根を種植するに堪任する能はず。地獄より出でゝ人中に生ずるも、而も聾瘂たるを免るゝ能はず。是に於て名稱高顯如來は、彼の苾芻を化度せんと欲するが爲に、善方便を以て六十俱胝那庾多の生中に於て、捍勞忍苦して諸の佛事をなし、其をして終に成熟せしむ。佛言く、大目乾連、汝且く觀せよ、彼の如來は、大悲心の故に、一有情の爲に是の如きの時を經て其の勞苦を受けし事を。乃至、彼の苾芻機緣成熟して、不退轉地に安住す。大目乾連、汝が意に於て云何、彼の名稱高顯如來は豈に異人ならんや、現一切義如來是なり。彼の等觀諸所緣苾芻は卽ち無量光如來是なり。

十五　觀佛三昧海經第九

我れ卽釋　昔し曾て空王佛の所に出家學道せし時、四比丘共に同學たり。三世諸佛の

正法を習學するも、煩惱、心を覆ふて佛法の寶藏を堅持すること能はず。不善業多く、當に惡道に墮すべし。時に空中に聲あり言く、汝四比丘よ、空王如來復た涅槃すと雖も、汝が所犯は能く救ふ者なからん、汝等今當に塔に入りて佛を觀ずべし、佛の在世と等うして異あることなからんと。我れ空聲に從て塔に入り、像の眉間毫相を觀じ、卽ち是の念を作す、如來在世の光明色身と此れと何の異かあらん。佛大人相、願くは我が罪を除き給へと。是の語を作し已りて、大山の崩るゝが如く、五體を地に投じ、諸罪を懺悔す。乃至、東方に國あり、妙喜と名く。彼の土に佛あり、號して阿閦と曰ふ、卽ち第一の比丘是なり。南方に國あり、歡喜と曰ふ。佛を寶相と號す、卽ち第二の比丘是なり。西方に國あり、極樂と名く。佛を無量壽と號す、第三の比丘是なり。北方に國あり、蓮華莊嚴と名く。佛を微妙聲と號す、第四の比丘是なり。

阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經の說は、西方安樂世界の相を說けるものにして、本生の說話に非ざれば今之を載せず。

族姓	名稱	師佛	事緣	出所
國王	比丘名 法藏（法寶藏、曇摩迦、法處、作法）	世自在王（世饒王、樓夷亘羅、世間自在王）	世自在王佛の說法を聞き、國を棄て王を捐てゝ出家し、思惟發願、永劫修行して、十劫以前に成佛す	無量壽經（平等覺經、大阿彌陀經、無量壽如來會、無量壽莊嚴經、梵文無量壽經）
轉輪聖王	無諍念（離諍）	寶藏（海藏）	寶藏佛の父なる寶海梵志は、王及其千子を勸めて發心せしむ。王は發心の後、思惟發願して淨土を取る。寶海は釋迦、千子中の第一は觀音、第二は勢至、乃至第九は阿閦なり	悲華經（大乘悲芬陀利經、梵文悲華經）
轉輪聖王	慧起（慧上、福上）	月髻（髻幢）	月髻佛を供養し、及其佛滅度の後、塔を起す。王に千子あり、卽賢劫千佛なり	如來智印經（慧印三昧經、大乘智印經）
國王	焰意（發光、燄無眞）	成利慧（吉義、成義意）	王子燄燄先づ宮を出で出家す、王は護城神の告により、王子を索めて成利慧佛の所に至り、法を聽き、不退轉に住す。福燄は釋迦、護城神は阿閦なり	大寶積經護國會（護國尊者所問大乘經、賴吒和羅所問德光經）
國王	月施（月得）	光世音（觀世自在）	光世音如來の時、王は五百の蓋、五百の衣服を以て、法師辯積を供養す。辯積は阿閦なり	決定總持經（誘佛經）

國王	勝威（威德）	師子遊戯金光王（金光師子遊戯）	八萬四千倶胝歳中、子と共に師子遊戯金光王如來を供養す。左右の二脇より二童子を生む、觀音・勢至是なり	如幻三摩地無量印法門經（觀世音受記經）	
轉輪聖王子	不可思議功德吉（更有多譯）	寶吉光王（更有多譯）	取無漏門陀羅尼を持し、衆生の爲に之を說く。後長者の子月蓋を度す。月蓋は燃燈佛なり	含利弗陀羅尼經（無量門破魔陀羅尼經、無量門微密持經、出生無量門持經、阿羅陀目佉尼訶離陀鄔尼經、阿羅目佉尼訶離陀經、一向出生菩薩經、出生無邊門陀羅尼經、佛說出生無邊門陀羅尼經）	
王子	（不出名）	大通智勝（大通衆慧）	大通智勝佛未だ出家せざる時、十六王子あり、皆法華を廣說し、後作佛す。第一の王子は阿閦、第九は彌陀、第十六は釋迦なり	妙法蓮華經（正法華經、添品妙法蓮華經、梵文法華經）	
王子	福報清淨多人所愛鳴聲自在（淨福報衆音）	辯才瓔珞莊嚴雲鳴出吼顯音（辯嚴淨雷音吼）	說法者無邊功德辯才瓔珞莊嚴雲鳴出吼顯音に遊戯、鳴音に就て三摩地を聞き、之を供養し、後菩提に至る。說法者は天眼如來なり	觀察諸法行經第二（賢劫經第二）	
說法者	無邊寶振聲淨行聚（無限量寶音行）	廣淨厚金普無疑光威王（金龍決光）	多比丘、此の說法者を誹謗す。次で轉輪聖王多人無憂普欲喜音及其の千子を教化す。王は阿閦、千子は賢劫千佛なり	觀察諸法行經第三（賢劫經第三）	
菩薩	明相	山上	山上如來滅度の後、三千世界に塔を起し、大衆を率ゐて巡歷供養す。	大法炬陀羅尼經	

比丘	淨命	離垢燈成就功德	離垢燈成就功德佛の付囑を受け、說法教化す。後比丘爲法の爲に謗らる。爲法は釋迦なり	濟諸方等學經（大乘方廣總持經）
比丘	惟先（不出名）	首達（不出名）	首達、此の比丘を誹謗して地獄に墮す。首達は釋迦なり	生經
比丘	等觀諸所緣	名稱高顯	此の比丘、輕慢心を生ず、名稱高顯佛、方便して之を度し、終に成熟せしむ。佛は現一切義如來なり	學智方廣經
比丘	（不出名）	空王	四比丘同學し、後皆成佛す。阿閦、寶相、無量壽、微妙聲の四佛是なり	觀佛三昧海經

八　彌陀因位發願の異說

彌陀因位發願の數は諸經に異說あり。漢譯平等覺經、吳譯大阿彌陀經には二十四願を列ね、魏譯無量壽經、唐譯大寶積經無量壽如來會竝に悲華經及び其の異譯なる大悲芬陀利經には四十八願を列ね、宋譯無量壽莊嚴經には三十六願を列ね、梵文無量

壽經には四十六願を擧げたり。但し此の中、漢吳二譯には同じく二十四願を列ね、魏唐二譯竝に悲華經等に、同じく四十八願を列ねたるも、仔細に吟味する時は、啻に其の順次の一致せざるのみならず、願の內容も亦頗る出沒あり。加之、一經には立てゝ一願となせるも、他の經には之を分て二願若しくは三願となせるものあり。今試に一一に分析して之を數へば、漢譯は二十七願、吳譯は三十二願、魏唐二譯は共に四十九願、宋譯は三十九願、梵文無量壽經は四十七願、悲華經及び大悲芬陀利經は五十三願を成ずるが如し。卽ち魏唐二譯四十八願の外に、漢吳二譯には飲食自然の願あり。又吳譯に無有女人の願、悉皆化生の願、資具自然の願、諸行往生の願、敬愛無嫉の願、說經特勝の願等あり。又吳宋二譯に同じく眷屬光明の願あり。宋譯に別に善根周徧の願、二乘佛事の願、往他供佛の願、佛加供佛の願、二乘成佛の願、作服往生の願、隨意修習の願等あり。又宋譯及び梵文無量壽經には、此の外、更に不往供佛の願あり。梵文には別に又花雨樂雲の願あり。若し魏唐二譯の第二十二願の後半を、宋譯に准じて別に一願となし、之を佛加敎化の願と名けば、無量壽經の各譯を通じて凡そ六十六願あり。又悲華經及び大悲芬陀利經の中には、此等諸願の外、別に無諸山河の願、無煩惱聲願、無諸難名の願、樹下成道の願、菩薩無數の願、滅後得忍の願、滅後成男の願等あり。此の七願を前に合するに總じて七十三願を成ず。無量壽經等の願成就の文を以て之を推究するに、悉く此等諸願の意あるを看取するを得べし。

蓋し願文に就き諸經を比較するに、漢吳二譯は殆ど其の軌を同じくするを見るべく、其の成立最も早きにあるが如く、魏唐二譯竝に梵文無量壽經の三本は、亦粗〻其の系統を一にし、宋譯及び悲華經は、共に別種の結集者に依りて編纂せられたるが如く、又後出阿彌陀佛偈に、發願鑑諸佛、誓二十四章と云ひ、觀無量壽經に、亦說法藏比丘四十八願と云ふに依れば、其の中、二十四願と四十八願とは、印度以來、普通に行はれたる說なるを見るべし。今左に諸經の願文を譯載し、併せて之を表示すべし。

一　平等覺經二十四願

我れ作佛の時、我が國中をして地獄禽獸餓鬼蜎飛蠕動の類あることなからしめん、是の願を得ずんば終に成佛せじ（第一無三惡趣）

我れ作佛の時、我が國に來生せし者をして、我國より去るも、復更に地獄餓鬼禽獸蠕動に更らざらしめん、若し其の中に生ずる者あらば我れ作佛

せじ第二不更惡趣

我れ作佛の時、人民の我が國に來生するある者、一色類の金色ならずんば我れ作佛せじ第三悉皆金色

我れ作佛の時、人民の我が國に來生するある者、天人世間人、異あらば我れ作佛せじ第四無有好醜

我れ作佛の時、人民の我が國に來生するある者、皆自ら從來する所の生の本末、從來する所の十億劫の宿命を推して、悉く從來する所の生を知念せずんば我れ作佛せじ第五宿命智通

我れ作佛の時、人民の我が國に來生するある者、悉く徹視せずんば我れ作佛せじ第六天眼智通

我れ作佛の時、人民の我が國に來生するある者、悉く他人心中の所念を知らずんば我れ作佛せじ第七他心智通

我れ作佛の時、我が國中の人民悉く飛ばずんば我れ作佛せじ第八神足智通

我れ作佛の時、我が國中の人民悉く徹聽せずんば我れ作佛せじ第九天耳智通

我れ作佛の時、我が國中の人民、愛欲あらば我れ作佛せじ第十漏盡智通

我れ作佛の時、我が國中の人民、盡般泥洹に住止せん、爾らずんば我れ作佛せじ第十一住正定聚

我れ作佛の時、(我が國の諸弟子)八方上下各千億佛國中の諸天人民蠕動の類をして、緣一覺大弟子たらしめ、皆禪一心に共に我が國中の諸弟子を數へて、住すること百億劫に至るも、能く數ふる者なからしめん、爾らずんば我れ作佛せじ第十二聲聞無數

我れ作佛の時、我が光明をして日月諸佛の明に勝らしむること百億萬倍にして、無數天下窈冥の處を照して皆常に大明ならしめ、諸天人民蠕動の類、我が光明を見ば慈心に善を作し、我國に來生せざることなからしめん、爾らずんば我れ作佛せじ第十三光明無量、觸光柔輭

我れ作佛の時、八方上下無數佛國の諸天人民蠕動の類をして、緣一覺果證弟子を得せしめ、坐禪一心に共に我が年壽を計知せんと欲して、千萬億劫すとも、能く壽の涯底を知ることなからしめん、爾らずんば我れ作佛せじ第十四壽命無量

我れ作佛の時、人民の我が國に來生するある者、我が國中の人民の所願を除いて、餘の人民の壽命は能く計る者あることなけん、若し爾らずんば我れ作佛せじ第十五眷屬長壽

我れ作佛の時、國中の人民皆惡心あることなからしめん、爾らずんば我れ作佛せじ（第十六無諸不善）

我れ作佛の時、我が名をして八方上下無數佛國に聞えしめ、諸佛各〻弟子衆の中に於て我が功德國土の善を歎せん、諸天人民蠕動の類、我が名字を聞かば、皆悉く踊躍して我が國に來生せん、爾らずんば我れ作佛せじ（第十七諸佛稱揚、并念佛往生）

我れ作佛の時、諸佛國の人民、菩薩道を作すことある者、常に我を念じて心を淨潔にせば、壽終の時、我れ不可計の比丘衆と與に飛行して之を迎へ、共に前に在りて立ち、即ち我が國に還生して阿惟越致たらしめん、爾らずんば我れ作佛せじ（第十八來迎引接）

我れ作佛の時、他方佛國の人民、前世に惡を爲すも、我が名字を聞き、及び正しく道をなして我國に來生せんと欲せば、壽終て皆復た三惡道に更らしめず、則ち我國に生して心の所願に在らしめん、爾らずんば我れ作佛せじ（第十九植諸德本）

我れ作佛の時、我が國の諸菩薩、一生等ならず、是の餘願の功德を置く、爾らずんば我れ作佛せじ（第二十必至補處）

我れ作佛の時、我が國の諸菩薩悉く三十二相ならずんば我れ作佛せじ（第二十一三十二相）

我れ作佛の時、我が國の諸菩薩、共に八方上下無數の諸佛を供養せんと欲せば皆飛行せしめん、萬種自然の物を得んと欲せば、則ち皆前に在りて持つて用て諸佛を供養し、悉く遍くして已後、日未だ中ならざるに則ち我國に還らしめん、爾らずんば我れ作佛せじ（第二十二供養諸佛、並供具如意）

我れ作佛の時、我が國の菩薩、飯せんと欲するときは、則ち七寶の鉢中に自然に百味の飲食を生じて前に在り、食し已れば鉢皆自然に去らん、爾らずんば我れ作佛せじ（第二十三飲食自然）

我れ作佛の時、我が國の諸菩薩、說經行道、佛の如くならずんば我れ作佛せじ（第二十四說一切智）

二　大阿彌陀經二十四願

某をして作佛せしむる時、我が國中をして泥犂禽獸蠕蠕動の類あることなからしめん、是の願を得ば乃ち作佛せん、是の願を得ずんば終に作佛せじ（第一悉無三惡趣）

某をして作佛せしむる時、我が國中をして婦人女人あることなからしめん、我が國中に來生せんと欲せば即ち男子とならん、無央數の天人民蜎飛蠕動の類我が國に來生せば、皆七寶水池蓮華の中に於て化生し、長大して皆菩薩阿羅漢となり、都べて

央數なからん、是の願を得ば乃ち作佛せん、是の願を得ずんば終に作佛せじ（第二無有女人轉女成男竝悉皆化生）

某をして作佛せしむる時、我が國土をして自然七寶、廣縱甚だ大にして曠蕩極りなく自ら輭好に、居る所の舍宅被服飲食都べて皆自然にして、比へば第六天王の所居の處の如くならしめん、是の願を得ば乃ち作佛せん、是の願を得ずんば終に作佛せじ（第三賞具自然）

某をして作佛せしむる時、我が名字をして皆八方上下無央數の佛國に聞へしめ、皆諸佛をして各〻比丘僧大座の中に於て我が功德國土の善を說かしめん、諸天人民蜎飛蠕動の類、我が名字を聞かば慈心歡喜踊躍せざる者なく、皆我が國に來生せしめん、是の願を得ば乃ち作佛せん、是の願を得ずんば終に作佛せじ（第四諸佛稱揚竝念佛往生）

某をして作佛せしむる時、八方上下の諸の無央數の天人民及び蜎飛蠕動の類、若し前世に惡を作すも、我が名字を聞て我が國に來生せんと欲して、卽ち反正して自ら過を悔ゐ、道をなし善を作し經戒を持して、我が國に生せんと願欲して斷絕せざれば、壽終て皆泥犂禽獸蓐荔に復らず、卽ち我が國に生じて心の所願に在らしめん、是の願を得ば乃ち作佛せん、是の願を得ずんば終に作佛せじ（第五植諸德本）

某をして作佛せしむる時、我が國中の諸菩薩をして他方佛國に到て生せんと欲すせじ（第六諸行往生）

某をして作佛せしむる時、八方上下無央數佛國の諸天人民、若は善男子善女人、我が道を作し六波羅蜜を奉行し、若は沙門となりて經戒を毀らず、愛欲を斷じ齋戒清淨にして一心に念じて、我が國に生せんと欲し晝夜斷絕せざれば、若し其の人壽終らんと欲する時、我れ卽ち諸菩薩阿羅漢と共に飛行して之を迎へて卽ち我が國に來生せしめ、阿惟越致の菩薩となりて智慧勇猛ならしめん、是の願を得ば乃ち作佛せん、是の願を得ずんば終に作佛せじ（第七來迎引接）

某をして作佛せしむる時、我が國中の諸菩薩をして他方佛國に到て生せんと欲す

るも、皆泥犂禽獸蒜荔に更らざらしめ、皆佛道を得せしめん、是の願を得ずんば終に作佛せじ（第八不更惡趣）

せん、是の願を得ずんば終に作佛せじ（第八不更惡趣）

某をして作佛せしむる時、我が國中の諸菩薩阿羅漢をして、面目皆端正、淨潔姝好にして悉く同一色に、都べて一種類にして、比へば第六天人の如くならしめん、是の願を得ば乃ち作佛せん、是の願を得ずんば終に作佛せじ（第九無有好醜）

某をして作佛せしむる時、我が國中の諸菩薩阿羅漢をして、皆同一心に念ずる所、言はんと欲する所は豫め意を相知らん、是の願を得ば乃ち作佛せん、是の願を得ずんば終に作佛せじ（第十他心智通）

某をして作佛せしむる時、我が國中の諸菩薩阿羅漢をして、皆婬泆の心あることなく、終に婦女を念ふの意なく、終に瞋怒愚癡あることなからしめん、是の願を得ば乃ち作佛せん、是の願を得ずんば終に作佛せじ（第十一漏盡智通）

某をして作佛せしむる時、我が國中の諸菩薩阿羅漢をして、皆心に相敬愛して終に相嫉憎する者なからしめん、是の願を得ば卽ち作佛せん、是の願を得ずんば終に作佛せじ（第十二敬愛無嫉）

某をして作佛せしむる時、我が國中の諸菩薩をして、共に八方上下無央數の諸佛を供養せんと欲せば、皆飛行して卽ち到らしめん、自然萬種の物を得んと欲せば卽ち皆前に在りて、持用して諸佛を供養し、悉く皆遍くして已後、日未だ中ならざる時卽ち飛行して我が國に還らしめん、是の願を得ば乃ち作佛せん、是の願を得ずんば終に作佛せじ（第十三供養諸佛竝供具如意）

某をして作佛せしむる時、我が國中の諸菩薩阿羅漢をして、飯せんと欲する時は卽ち皆自然に七寶の鉢中に自然百味の飯食ありて前に在り、食し已れば自然に去らしめん、是の願を得ば乃ち作佛せん、是の願を得ずんば終に作佛せじ（第十四飲食自然）

某をして作佛せしむる時、我が國中の諸菩薩の身をして皆紫磨金色にして、三十二相八十種好、皆佛の如くならしめん、是の願を得ば乃ち作佛せん、是の願を得ずんば終に作佛せじ（第十五悉皆金色竝三十二相）

某をして作佛せしむる時、我が國中の諸菩薩阿羅漢をして、語は三百の鐘聲の如く、說經行道皆佛の如くならしめん、是の願を得ば乃ち作佛せん、是の願を得ずんば終に作佛せじ（第十六說一切智）

某をして作佛せしむる時、我をして洞視徹聽して、飛行すること十倍諸佛に勝れしめん、是の願を得ばすんば終に作佛せじ（第十七天眼、天耳、神境、智通）

某をして作佛せしむる時、我が智慧說經行道をして十倍諸佛に勝れしめん、是の願を得ばすんば終に作佛せじ（第十八說經特勝）

某をして作佛せしむる時、八方上下無央數佛國の諸天人民蜎飛蠕動の類をして、皆人道を得せしめ悉く辟支佛阿羅漢となりて、皆坐禪一心に共に計數して我が年壽を知らんと欲して、幾千億萬劫歲數すとも、皆能く壽を極知する者あることなからしめん、是の願を得ばすんば終に作佛せじ（第十九壽命無量）

某をして作佛せしむる時、八方上下各千億佛國中の諸天人民蜎飛蠕動の類をして、皆辟支佛阿羅漢とならしめ、皆坐禪一心に共に我が國中の諸菩薩阿羅漢を計數して、幾千億萬人あるを知らんと欲するも、皆能く數を知る者あることなからしめん、是の願を得ばすんば終に作佛せじ（第二十聲聞無數）

某をして作佛せしむる時、我が國中の諸菩薩阿羅漢をして壽命無央數劫ならしめん、是の願を得ばすんば終に作佛せじ（第二十一眷屬長壽）

某をして作佛せしむる時、我が國中の諸菩薩阿羅漢をして、皆智慧勇猛にして自ら前世億萬劫時の宿命の所作の善惡を知り、却知すること無極にして皆洞視徹聽し、十方去來現在の事を知らしめん、是の願を得ばすんば終に作佛せじ（第二十二宿命智通）

某をして作佛せしむる時、我が國中の諸菩薩阿羅漢をして、皆智慧勇猛にして、頂中に皆光明あらしめん、是の願を得ばすんば終に作佛せじ（第二十三眷屬光明）

某をして作佛せしむる時、我が頂中の光明絕好にして、日月の明に勝るゝこと百千億萬倍ならしめ、諸佛の光明に絕勝して、諸の無央數天下の幽冥の處を焰照して皆當に大明ならしめ、諸天人民蜎飛蠕動の類をして、我が光明を見ば、慈心に善を作さざる者なく、皆我が國に來生せしめん、是の願を得ばすんば終に作佛せじ（第二十四光明無量、觸光柔輭）

三　無量壽經四十八願

設ひ我れ佛を得るも、國に地獄餓鬼畜生あらば正覺を取らじ（第一無三惡趣）

設ひ我れ佛を得るも、國中の人天、壽終の後、復た三惡道に更らば正覺を取らじ（第二不更

設ひ我れ佛を得るも、國中の人天、悉く眞金色ならずんば正覺を取らじ第三悉皆金色

設ひ我れ佛を得るも、國中の人天、形色不同にして好醜あらば正覺を取らじ第四無有好醜

設ひ我れ佛を得るも、國中の人天、宿命を識らずして、下も百千億那由他の諸劫の事を知らざるに至らば正覺を取らじ第五宿命智通

設ひ我れ佛を得るも、國中の人天、天眼を得ずして、下も百千億那由他の諸佛の國を見ざるに至らば正覺を取らじ第六天眼智通

設ひ我れ佛を得るも、國中の人天、天耳を得ずして、下も百千億那由他の諸佛の所說を聞て、悉く受持せざるに至らば正覺を取らじ第七天耳智通

設ひ我れ佛を得るも、國中の人天、見他心智を得ずして、下も百千億那由他の諸佛國中の衆生の心念を知らざるに至らば正覺を取らじ第八他心智通

設ひ我れ佛を得るも、國中の人天、神足を得ずして一念の頃に於て、下も百千億那由他の諸佛の國を超過すること能はざるに至らば正覺を取らじ第九神境智通

設ひ我れ佛を得るも、國中の人天、若し想念を起して、身を貪計せば正覺を取らじ第十

設ひ我れ佛を得るも、國中の人天、定聚に住して、必らず滅度に至らずんは正覺を取らじ第十一住正定聚

設ひ我れ佛を得るも、光明能く限量ありて、下も百千億那由他の諸佛の國を照さゞるに至らば正覺を取らじ第十二光明無量

設ひ我れ佛を得るも、壽命能く限量ありて、下も百千億那由他劫に至らば正覺を取らじ第十三壽命無量

設ひ我れ佛を得るも、國中の聲聞能く計量ありて、下も三千大千世界の聲聞緣覺、百千劫に於て悉く共に計校して、其の數を知るに至らば正覺を取らじ第十四聲聞無數

設ひ我れ佛を得るも、國中の人天壽命能く限量なからん、其の本願ありて脩短自在ならんをば除く、若し爾らずんば正覺を取らじ第十五眷屬長壽

設ひ我れ佛を得るも、國中の人天、乃至不善の名あることを聞かば正覺を取らじ第十六無諸不善

設ひ我れ佛を得るも、十方世界の無量の諸佛、悉く咨嗟して我が名を稱せざれば正

覺を取らじ（第十七諸佛稱揚）

設ひ我れ佛を得るも、十方の衆生、至心に信樂して我が國に生ぜんと欲し、乃至十念せんに若し生ぜざれば正覺を取らじ、唯五逆と正法を誹謗するとを除く（第十八念佛往生）

設ひ我れ佛を得るも、十方の衆生、菩提心を發して諸の功德を修し、至心に發願して我國に生ぜんと欲せんに、壽終の時に臨んで、もし大衆のために圍繞せられて、其の人の前に現ぜずんば正覺を取らじ（第十九來迎引接）

設ひ我れ佛を得るも、十方の衆生、我が名號を聞て、念を我が國に係け諸の德本を植へ、至心に廻向して我が國に生ぜんと欲せんに、果遂せずんば正覺を取らじ（第二十植諸德本）

設ひ我れ佛を得るも、國中の人天、悉く三十二大人の相を成滿せずんば正覺を取らじ（第十一三十二相）

設ひ我れ佛を得るも、他方佛土の諸の菩薩衆、我が國に來生せば、究竟して必ず一生補處に至らしめん、其の本願ありて自在の化する所、衆生の爲の故に弘誓の鎧を被て、德本を積累し一切を度脫し、諸佛の國に遊で菩薩の行を修し、十方の諸佛如來を

供養し、恆沙無量の衆生を開化して、無上正眞の道を立て、常倫諸地の行に超出し、現前に普賢の德を修習せんをば除く、若し爾らずんば正覺を取らじ（第二十二必至補處）

設ひ我れ佛を得るも、國中の菩薩、佛の神力を承けて諸佛を供養し、一食の頃に徧く無數無量那由他の諸佛の國に至ること能はずんば正覺を取らじ（第二十三供養諸佛）

設ひ我れ佛を得るも、國中の菩薩、諸佛の前に在りて其の德本を現ぜんに、諸の欲求する所の供養の具、若し意の如くならずんば正覺を取らじ（第二十四供具如意）

設ひ我れ佛を得るも、國中の菩薩、一切智を演說すること能はずんば正覺を取らじ（第二十一切說）

設ひ我れ佛を得るも、國中の菩薩、金剛那羅延身を得ずんば正覺を取らじ（第二十六那羅延力）

設ひ我れ佛を得るも、國中の人天、一切萬物の嚴淨光麗にして形色殊特に、微を窮め妙を極めたるを能く稱量することなけん、其の諸の衆生、乃至天眼を逮得するも、能く明了に其の名數を辨ずることあらば正覺を取らじ（第二十七所須嚴淨）

設ひ我れ佛を得るも、國中の菩薩、乃至少功德の者、其の道場樹の無量の光色ありて、高さ四百萬里なるを知見すること能はずんば正覺を取らし（第二十八見道場樹）

設ひ我れ佛を得るも、國中の菩薩、若し經法を受讀し諷誦持說して辯才智慧を得ずんば正覺を取らじ（第二十九 得辯才智）

設ひ我れ佛を得るも、國中の菩薩の智慧辯才、若し限量す可くんば正覺を取らじ（第三十 智辯無窮）

設ひ我れ佛を得るも、國土清淨にして皆悉く十方一切無量無數不可思議の諸佛世界を照見せんこと、猶ほ明鏡を以て其の面像を見るが如くならん、若し爾らずんば正覺を取らじ（第三十一 國土清淨）

設ひ我れ佛を得るも、地より以上、虛空に至るまでの宮殿樓觀池流華樹、國中の有ゆる一切の萬物、皆無量の雜寶百千種の香を以て共に合成し、嚴飾奇妙にして諸の人天に超え、其の香普く十方世界に熏して菩薩聞ぐ者は皆佛行を修せん、若し是の如くならずんば正覺を取らじ（第三十二 寶香合成）

設ひ我れ佛を得るも、十方無量不可思議諸佛世界の衆生の類、我が光明を蒙りて其の身に觸れん者は、身心柔輭にして人天に超過せん、若し爾らずんば正覺を取らじ（第三十三 觸光柔輭）

設ひ我れ佛を得るも、十方無量不可思議諸佛世界の衆生の類、我が名字を聞て菩薩の無生法忍、諸の深總持を得ずんば正覺を取らじ（第三十四 聞名得忍）

設ひ我れ佛を得るも、十方無量不可思議の諸佛世界に、それ女人ありて我名字を聞て、歡喜信樂し菩提心を發して、女身を厭惡せんに、壽終の後復た女像とならば正覺を取らじ（第三十五 轉女成男）

設ひ我れ佛を得るも、十方無量不可思議諸佛世界の諸の菩薩衆、我が名字を聞かば、壽終の後常に梵行を修して佛道を成ずるに至らん、若し爾らずんば正覺を取らじ（第三十六 常修梵行）

設ひ我れ佛を得るも、十方無量不可思議諸佛世界の諸天人民、我が名字を聞て五體を地に投じ稽首作禮し、歡喜信樂して菩薩の行を修せんに、諸天世人、敬を致さずといふことなからん、爾らずんば正覺を取らじ（第三十七 人天致敬）

設ひ我れ佛を得るも、國中の人天、衣服を得んと欲せば念に隨て卽ち至り、佛所讚の應法の妙服自然に身に在るが如くならん、若し裁縫擣染浣濯するとあらば正覺を取らじ（第三十八 衣服隨念）

設ひ我れ佛を得るも、國中の人天、受くる所の快樂、漏盡比丘の如くならずんば正覺を取らじ（第三十九 受樂無染）

設ひ我れ佛を得るも、國中の菩薩、意に隨て十方無量嚴淨の佛土を見んと欲せば、時に應じて願の如く寶樹の中に於て皆悉く照見せんこと、猶明鏡を以て其の面像を覩るが如くならん、若し爾らずんば正覺を取らじ（第四十見 諸佛土）

設ひ我れ佛を得るも、他方國土の諸の菩薩衆、我が名字を聞て、佛を得るに至るまで、諸根闕陋して具足せずんば正覺を取らじ（第四十一 諸根具足）

設ひ我れ佛を得るも、他方國土の諸の菩薩衆、我が名字を聞かば皆悉く清淨解脫三昧を逮得せん、是の三昧に住して一たび意を發する頃に、無量不可思議の諸佛世尊を供養して定意を失はざらん、若し爾らずんば正覺を取らじ（第四十二 住定供佛）

設ひ我れ佛を得るも、他方國土の諸の菩薩衆、我が名字を聞かば、壽終の後、尊貴の家に生れん、若し爾らずんば正覺を取らじ（第四十三 生尊貴家）

設ひ我れ佛を得るも、他方國土の諸の菩薩衆、我が名字を聞かば、歡喜踊躍して菩薩の行を修し德本を具足せん、若し爾らずんば正覺を取らじ（第四十四 具足德本）

設ひ我れ佛を得るも、他方國土の諸の菩薩衆、我が名字を聞かば皆普等三昧を逮得し、此の三昧に住して成佛に至るまで、常に無量不可思議の一切諸佛を見ん、若し爾らずんば正覺を取らじ（第四十五 住定敬佛）

設ひ我れ佛を得るも、國中の菩薩、其の志願に隨て聞かんと欲する所の法は自然に聞くことを得ん、若し爾らずんば正覺を取らじ（第四十六 隨意聞法）

設ひ我れ佛を得るも、他方國土の諸の菩薩衆、我が名字を聞きて卽ち不退轉に至ることを得ずんば正覺を取らじ（第四十七 得不退轉）

設ひ我れ佛を得るも、他方國土の諸の菩薩衆、我が名字を聞て卽ち第一第二第三法忍を得ず、諸佛の法に於て卽ち不退轉を得ること能はずんば正覺を取らじ（第四十八 得三法忍）

四　大寶積經四十八願

若し我れ無上菩提を證得せんに、國中に地獄、餓鬼、畜生趣あらば、我れ終に無上正覺を取らじ（第一無三惡趣）

若し我れ成佛せんに、國中の衆生、三惡趣に墮することあらば我れ終に正覺を取らじ（第二不更惡趣）

若し我れ成佛せんに、國中の有情、若し皆同眞金色ならずんば正覺を取らじ第三悪皆金色

若し我れ成佛せんに、國中の有情、形貌差別して好醜あらば正覺を取らじ第四無有好醜

若し我れ成佛せんに、國中の有情、宿念を得ずして、下も億那由陀百千劫の事を知らざるに至らば、正覺を取らじ第五宿命智通

若し我れ成佛せんに、國中の有情、若し天眼なくして、乃至億那由陀百千佛國土を見ずんば正覺を取らじ第六天眼智通

若し我れ成佛せんに、國中の有情、天耳を獲ずして、乃至億那由陀百千踰繕那外の佛の說法を聞かずんば正覺を取らじ第七天耳智通

若し我れ成佛せんに、國中の有情、他心智無くして、乃至億那由陀百千佛國土中の有情の心行を知らずんば正覺を取らじ第八他心智通

若し我れ成佛せんに、國中の有情、神通自在波羅蜜多を獲ずして、一念の頃に於て億那由他百千佛刹土を超ゆること能はずんば正覺を取らじ第九神境智通

若し我れ成佛せんに、國中の有情、少分我我所の想を起さば菩提を取らじ第十漏盡智通

若し我れ成佛せんに、國中の有情、決定して等正覺を成じて大涅槃を證せずんば菩

提を取らじ第十一住正定聚

若し我れ成佛せんに、光明限り有りて、下も億那由陀百千及算數の佛刹を照らさずんば菩提を取らじ第十二光明無量

若し我れ成佛せんに、壽量限り有りて、乃至俱胝那由陀百千及算數劫ならば菩提を取らじ第十三壽命無量

若し我れ成佛せんに、國中の聲聞其の數を知ること有る者なからん、假使ひ三千大千世界の中に滿てらん有情、及び諸の緣覺、百千歲に於て其の智算を盡すも亦知ること能はざらん、若し知ること有らば正覺を取らじ第十四聲聞無數

若し我れ成佛せんに、國中の有情壽量限齊あらば菩提を取らじ、唯願力をもて生を受くる者を除く第十五眷屬長壽

若し我れ成佛せんに、國中の衆生、若し不善の名あることを聞かば正覺を取らじ第十六無諸不善

若し我れ成佛せんに、彼の無量刹中の無數の諸佛、共に咨嗟して我が國を稱歎せずんば正覺を取らじ第十七諸佛稱揚

若し我れ無上覺を證得せん時、餘佛刹中の諸の有情類、我が名を聞き已りて、有ゆる善根をもて心心廻向して我國に生ぜんと願し、乃至十念せんに、若し生ぜずんば菩提を取らじ、唯だ無間の惡業を造ると正法及び諸聖人を誹謗するとを除く（第十八念佛往生）

若し我れ成佛せんに、他の刹土に於て諸の衆生ありて菩提心を發し、及び我が所に於て淸淨念を起し、復善根を以て廻向して極樂に生ぜんと願ぜば、彼の人命終の時に臨んで、我れ諸の比丘衆と與に其人の前に現ぜん、若し爾らずんば正覺を取らじ（第十九來迎引接）

若し我れ成佛せんに、無量國中の有ゆる衆生、我名を說くを聞て己が善根を以て極樂に廻向せんに、若し生ぜずんば正覺を取らじ（第二十植諸德本）

若し我れ成佛せんに、國中の菩薩皆三十二相を成就せずんば菩提を取らじ（第二十一三十二相）

若し我れ成佛せんに、彼の國中に於ける有ゆる菩薩、大菩提に於て咸な悉く位階一生補處ならん、唯だ大願ある諸菩薩等の、諸の衆生の爲に精進の甲を被て、利益を勤行し大涅槃を修し、諸佛の國に徧じて菩薩の行を行じ、一切の諸佛如來を供養し、恆沙の衆生を安立して無上覺に住せしめ、修する所の諸行復前に勝れ、普賢の道を行

じて出離を得んをば除く、若し爾らずんば菩提を取らじ（第二十二必至補處）

若し我れ成佛せんに、國中の菩薩、每に晨朝に於て、他方乃至無量億那由陀百千の諸佛を供養し、佛の威力を以て卽食前を以て還りて本國に到らん、若し爾らずんば菩提を取らじ（第二十三供養諸佛）

若し我れ成佛せんに、彼の刹中に於ける諸の菩薩衆、所須の種々の供具をもて、諸佛の所に於て諸の善根を植ゑんに、是の如きの色類圓滿せずんば正覺を取らじ（第二十四供具如意）

若し我れ成佛の時に當りて、國中の菩薩諸の法要を說て、善く一切智に順入せずんば菩提を取らじ（第二十五說一切智）

若し我れ成佛せんに、彼の國に生ずる所の諸の菩薩等、若し那羅延堅固力無くんば正覺を取らじ（第二十六那羅延力）

若し我れ成佛せんに、周徧せる國中の諸の莊嚴の具は、衆生の能く總て演說するものあること無く、乃至天眼を有する者も、有ゆる雜類形色光相を了知すること能はざらん、若し能く知り及び總て宣說する者あらば菩提を取らじ（第二十七所須嚴淨）

若し我れ成佛せんに、國中に具に無量色の樹ありて、高さ百千由旬ならん、諸菩薩中に善根劣れる者あるも若し了知する能はずんば正覺を取らじ（第二十八 見道場樹）

若し我れ成佛せんに、國中の衆生、經典を讀誦し敎授敷演せんに、若し勝辯才を獲得せずんば菩提を取らじ（第二十九 得辯才智）

若し我れ成佛せんに、國中の菩薩、無邊辯才を成就せざる者あらば菩提を取らじ（第三十 無窮辯才）

若し我れ成佛せんに、國土光淨にして徧く與に等しきもの無く、無量不可思議諸佛世界を徹照すること、明鏡の中に其の面像を現ずるが如くならん、若し爾らずんば菩提を取らじ（第三十一 國土清淨）

若し我れ成佛せんに、國界の內、地及び虛空に、無量種の香あり、復た百千億那由陀數の衆寶香鑪ありて、香氣普く熏じて虛空界に徧せん、其の香殊勝にして人天に超過し、如來及び菩薩衆に珍奉せん、若し爾らずんば菩提を取らじ（第三十二 寶香合成）

若し我れ成佛せんに、周徧せる十方無量無數不可思議無等界の衆生の輩、佛の威光を蒙りて照觸せらるゝ者は、身心安樂にして人天に超過せん、若し爾らずんば正覺を取らじ（第三十三 觸光柔軟）

若し我れ成佛せんに、無量不可思議無等界の諸佛刹中の菩薩の輩、我が名を聞き已りて、若し離生を證得し陀羅尼を獲ずんば正覺を取らじ（第三十四 聞名得忍）

若し我れ成佛せんに、周徧せる無數不可思議無有等量の諸佛國中の有ゆる女人、我が名を聞き已りて淸淨信を得、菩提心を發して女身を厭患する者、若し來世に於て女人の身を捨てずんば菩提を取らじ（第三十五 轉女成男）

若し我れ成佛せんに、無量無數不可思議無等佛刹の菩薩衆、我名を聞き已らば離生法を得ん、若し殊勝の梵行を修行して乃至大菩提に到らずんば正覺を取らじ（第三十六 常修梵行）

若し我れ成佛せんに、周徧せる十方無有等量の諸佛刹中の有ゆる菩薩、我名を聞き已りて五體を地に投じ、淸淨心を以て菩薩の行を修せんに、若し諸の天人禮敬せずんば正覺を取らじ（第三十七 人天致敬）

若し我れ成佛せんに、國中の衆生の須ゆる所の衣服、念に隨て卽ち至らんこと、佛、善來比丘と命ずるに、法服、自然に體にあるが如くならん、若し爾らずんば菩提を取ら

じ（第三十八 衣服隨念）

若し我れ成佛せんに、諸の衆生の類、纔に我國中に生せんに、若し皆資具を獲て心淨安樂なること漏盡を得る諸比丘の如くならずんば菩提を取らじ（第三十九 受樂無染）

若し我れ成佛せんに、國中の群生、心に隨て諸佛淨國の殊勝莊嚴を見んと欲せば、寶樹の間に於て悉く皆出現せんこと、猶ほ明鏡を以て其の面像を見るがごとくならん、若し爾らずんば菩提を取らじ（第四十見諸佛土）

若し我れ成佛せんに、餘佛刹中の有ゆる衆生、我名を聞き已りて乃至菩提まで、諸根闕くることありて德用廣からずんば菩提を取らじ（第四十一 諸根具足）

若し我れ成佛せんに、餘佛刹中の有ゆる菩薩、我が名を聞き已りて、若し皆善く勝三摩地の名字語言を分別せず、菩薩、彼の三摩地中に住し一刹那言說の頃に於て、無量無數不可思議無等諸佛を供養すること能はず、又現に六三摩地を證せずんば正覺を取らじ（第四十二 住定供佛）

若し我れ成佛せんに、餘の佛土中に諸の菩薩あつて、我名を聞き已りて、壽終の後、豪貴の家に生ずることを得ずんば正覺を取らじ（第四十三 生尊貴家）

若し我れ成佛せんに、餘の佛刹中の有ゆる菩薩、我が名を聞き已りて、若し時に應じて菩薩の行を修し清淨歡喜し、平等住を得て諸の善根を具せずんば正覺を取らじ（第四十四 具足德本）

若し我れ成佛せんに、他方の菩薩、我が名を聞き已らば皆平等三摩地門を得ん、是の定中に住して常に無量無等の諸佛を供し、乃至菩提まで終に退轉せざらん、若し爾らずんば正覺を取らじ（第四十五 住定見佛）

若し我れ成佛せんに、國中の菩薩、其の志願に隨て、聞かんと欲する所の法、自然に聞くことを得ん、若し爾らずんば正覺を取らじ（第四十六 隨意聞法）

若し我れ無上菩提を證得せんに、餘佛刹中の有ゆる菩薩、我が名を聞き已りて、阿耨多羅三藐三菩提に於て退轉あらば正覺を取らじ（第四十七 得不退轉）

若し我れ成佛せんに、餘佛國中の有ゆる菩薩、若し我が名を聞き時に應じて一二三忍を獲ず、諸佛の法に於て現に不退轉を證すること能はずんば菩提を取らじ（第四十八 得三法忍）

五　無量壽莊嚴經三十六願

願くは、世尊の如く阿耨多羅三藐三菩提を證得せば、居る所の佛刹は、無量不可思議の功德莊嚴を具足せん、有ゆる一切衆生、及び焰摩羅界、三惡道中の地獄餓鬼畜生、皆我が刹に生じ我が法化を受け、久しからずして悉く阿耨多羅三藐三菩提を成じ、一切皆身眞金色を得ん（第一無三惡趣（？）並に悉皆金色）

世尊、我れ菩提を得て正覺を成じ已らば、十方世界の有ゆる衆生をして、我が刹に生ぜしむること諸佛土の如くならしめ、人天の衆、分別を遠離し諸根寂靜にして悉く皆阿耨多羅三藐三菩提を得せしめん（第二漏盡智通）

世尊、我れ菩提を得て正覺を成じ已らば、十方世界の有ゆる衆生、我が刹に生じ大神通を得て、一念を經る中に百千俱胝那由他の佛刹を周徧巡歷して、諸佛を供養し深く善本を植ゑ、悉く皆阿耨多羅三藐三菩提を得せしめん（第三神足智通）

世尊、我れ菩提を得て正覺を成じ已らば、有ゆる衆生我が刹に生じ、一切皆宿命智通を得て、能善く百千俱胝那由他劫の過去の事を觀察し、悉く皆阿耨多羅三藐三菩提を得せしめん（第四宿命智通）

世尊、我れ菩提を得て正覺を成じ已らば、有ゆる衆生我が刹に生じ、一切皆淸淨天眼

を得て、能く百千俱胝那由他世界の麤細の色相を見、悉く皆阿耨多羅三藐三菩提を得せしめん（第五天眼智通）

世尊、我れ菩提を得て正覺を成じ已らば、有ゆる衆生我が刹に生じ、一切皆他心智通を得て、善能く百千俱胝那由他の衆の心心所法を了知し、悉く皆阿耨多羅三藐三菩提を得せしめん（第六他心智通）

世尊、我れ菩提を得て正覺を成じ已らば、有ゆる衆生我が刹に生じ、一切皆正信位に住することを得て、顚倒想を離れて堅固に修習し、悉く皆阿耨多羅三藐三菩提を得せしめん（第七住正定聚）

世尊、我れ菩提を得て正覺を成じ已らば、有ゆる衆生我が刹に生じ、修する所の正行善根無量にして、圓寂界に徧じて間斷なく、悉く皆阿耨多羅三藐三菩提を得せしめん（第八善根周徧）

世尊、我れ菩提を得て正覺を成じ已らば、有ゆる衆生我が刹に生じ、聲聞緣覺の位に住すと雖も、百千俱胝那由他の寶刹の內に往いて徧く佛事を作し、悉く皆阿耨多羅三藐三菩提を得せしめん（第九二乘佛事）

世尊、我れ菩提を得て正覺を成じ已らば、有ゆる衆生我が刹に生じ、一切皆無邊の光明を得て、而も能く百千俱胝那由他の諸佛刹土を照耀し、悉く皆阿耨多羅三藐三菩提を得せしめん（第十卷屬光明）

世尊、我れ菩提を得て正覺を成じ已らば、有ゆる衆生我が刹に生じ、命中夭ならず、壽百千俱胝由他劫にして、悉く皆阿耨多羅三藐三菩提を得せしめん（第十一卷屬長壽）

世尊、我れ菩提を得て正覺を成じ已らば、有ゆる衆生我が刹に生じ、不善の名なからん、無量無數の諸佛刹土の名なく號なく相なく形なく、稱讚する所なきを聞くも、而かも疑謗なく身心不動にして、悉く皆阿耨多羅三藐三菩提を得せしめん（第十二無諸不善）

世尊、我れ菩提を得て正覺を成じ已らば、有ゆる衆生我が刹に生ぜんことを求め、吾が名號を念じて志誠心を發し堅固不退ならんに、彼れ命終の時、我れ無數の菩薩を して現前に圍繞し彼の人を來迎して、須臾の間を經て我が刹に生るゝことを得せしめ、悉く皆阿耨多羅三藐三菩提を得せしめん（第十三來迎引接）

世尊、我れ菩提を得て正覺を成じ已らば、有ゆる十方無量無邊無數世界の一切衆生、吾が名號を聞て菩提心を發し、諸の善根を種ゑて隨意に諸佛刹土に生ぜんことを求めんに、生を得ざることなく、悉く皆阿耨多羅三藐三菩提を得せしめん（第十四植諸德本）

世尊、我れ菩提を得て正覺を成し已らば、有ゆる衆生我が刹に生じて、皆三十二種大丈夫の相を具し、一生に阿耨多羅三藐三菩提を得せしめん（第十五三十二相並必至補處）

世尊、我れ菩提を得て正覺を成じ已らば、有ゆる衆生我が刹に生じ、若し大願あつて未だ成佛を欲せず菩薩たらん者は、我れ威力を以て彼れをして一切衆生を教化せしめて、皆信心を發し菩提行普賢行寂滅行淨梵行最勝行及び一切善行を修し、悉く皆阿耨多羅三藐三菩提を得せしめん（第十六佛加教化）

世尊、我れ菩提を得て正覺を成じ已らば、有ゆる衆生我が刹に生じ、一切處に於て無量百千俱胝那由他の諸佛に承事供養して諸の善根を種ゑ、意の所求に隨て願を滿せざることなく、悉く皆阿耨多羅三藐三菩提を得せしめん（第十七供養諸佛）

世尊、我れ菩提を得て正覺を成じ已らば、我が刹土中の有ゆる菩薩、皆一切智慧を成就することを得て、善く諸法祕要の義を談じ、久からずして速に阿耨多羅三藐三菩提を成ぜん（第十八一切智說）

世尊、我れ菩提を得て正覺を成じ已らば、我が居る寶刹の有ゆる菩薩、勇猛心を發し